910.4-Sh46-3ウ
1200500754765
910.4
Sh46
3

始

28.8.29

910.4
SH46
3

國文學の新考察

文學博士 島津久基著

東京 至文堂

908
113

はしがき

寡作遲筆の自分にもこれまで發表した小論文が積り積つて幾らかの數に上つた。舊いものや特殊の誌上に掲載したものなどは簡單に閲讀出來ないから、まとめて一冊にしてほしいとの要望が知友の間に數年前からあつたのを、多忙とおつくうがりからそのまゝにしておいたのであつたが、今回少閑を獲て整理してみた結果を、さきに明治書院から上梓した源氏物語に關する研究の分を除いて、こゝに集錄刊行することになつた。

所收論文は大正十五年以降現在に到るものであるが、從つて中には今日から觀れば、かなり不滿なものもあるけれども、書き改めるとなれば、執筆當時の氣分と企圖と意義とを多分に消失することになるしするので、唯僅少の補正を施し、或は註記に追補の意味を添へるだけに止める方針にした。　卷頭の一文の如き、その後の國語國文學界長足の進歩により、近松語彙や日本文學史表覽の出現をはじめ、他の方面に於ても無數の業績が示されて來た事實が當然訂正乃至抹消を要請してゐる部分があるけれども、それだけ最近十年の斯學の趨勢を物語る記念として、さうした部分は「見せ

消ち」といつた姿で却つて讀者を微笑せしめるに違ひないと思ふ。

右の意味にもおのづから觸れてゐると思ふが、新考察といつても、實はもう一昔前の意見もある。又自分では相當新しいつもりでも、識者の眼からは案外陳腐で又誤つてもゐると憫笑されるのもあらう。唯それ〴〵の意味でその時々試見として或は新に立てた論考として提示してみたい意欲から發表したものの集積であるといふ點では、すべてに一貫したものがある。又一昔前の考へ方でも稚拙なりに不備なりに、その意圖する所の旨趣がなほ現在にあつても依然重視され冀求されねばならない必要さを主張してゐないとは斷ぜられ得ないものも皆無ではあるまい。書肆の望みにまかせて、題名を容認した所以である。

各章個々のさゝやかな論文であり極めて狹少な管見の記錄であるが、みづからの力を揣らず强ひて體系の完きに整へることに逸つて、見えすいた間隙を自己を欺瞞して埋めつゝ、いかめしい外觀を取繕ふことの自責から救はれるだけ、氣安い心强さの歡びがある。而もさうした大きな完き體系の基礎構成の一片一材でありたい熱望と豫期とを懸けて、やがて日本が打樹てるであらう新しき國學、書くであらう大きな國文學史への不斷の零碎な寄與を捧げ續けたい私の念願である。

が徒らに雜然と並列するのでは一層意味をなさないから、假に本書では、讀者の爲にも、亦自分の整理の爲にも、大略四つの篇には類別してみた。そして四篇それ〴〵或まとまりは出來てゐるやうに思ふ。又隨時の發表の集成である爲、各篇各章必ずしも同一の方式でなく、且時に內容の重複もないではないが、却つて互に說明補足し合つて、全體としての論述を精確にするに役立つてゐるやうな所もあるのは、望外の僥倖とすべきであらう。

昭和十六年八月

著者識

目次

隨筆と物語

「つれ〴〵」の意義……三
——國文學と註釋——
兼好の健康……四七
兼好と元可……七一
枕草子と清少納言……七九
枕草子短觀……一〇八
——山の端いと近くなりたるに——
平安朝文學の彈力……一二五
古代中世の「作り物語」……一三四
昔物語と歌物語……一四〇
竹取物語小論……一五七

散佚物語三つ……一七三
一　初雪物語……一七三
二　とぼぎみ……一七四
三　しらゝ物語（附、しじら）……一七八
桂中納言物語……一八五

中世文學

義經記論……一九七
第一章　義經記の性質（一）……一九七
第二章　義經記の性質（二）……二〇七
第三章　義經記と義經物語……二二一
第四章　義經記の構成と史實……二三四
第五章　義經記と義經傳說の成長……二四九
第六章　結語――義經記の延長……二五九

小督と小原御幸……二六五
――平語餘錄――
御伽草子・假名草子・舞の本……二七〇
御伽草子論考……二九一
番外舞曲「相模川」……三二二
幸若の曾我物……三三五
ふりこほり……三五〇
――狂言「朝比奈」から――

西鶴・馬琴

西鶴と古典文學……三五九
――特に一代男と源氏物語との關係を中心として――
一　序說……三五九
二　兩作品の相似……三六二
三　西鶴の古典知識と西鶴文の古典味……三七七

四　一代男以外の作に於ける源氏の影響……四〇四
五　西鶴文の止筆樣式と源語……四〇九
六　西鶴と靡案模擬……四一七
七　源語の靡案としての一代男……四二一
八　靡作源語の成果……四六五
馬琴とロマン……四八三
馬琴論片……五〇八
一　逍遙・鷗外と馬琴……五〇八
二　芳流閣――馬琴の描法……五一〇
三　俠客傳……五一四
傳說・說話
說話學の對象としての傳說……五一一
――傳說學序說――
一　語義……五一二
二　說話の分類……五一三
三　傳說の變移性……五一五
四　傳說の他種說話との交錯……五一八
五　傳說の文學的進展凝成……五三一
六　製作說話と傳說……五三四
七　傳說の民族的特色……五三六
八　傳說の分類……五四三
天狗の內裏とイニード(アェネーイス)……五五一
――牛若丸地獄極樂廻傳說とイニーアス(アェネーアース)傳說――
傳說と和歌……五八四
一　和歌及び連歌の起原傳說……五八四
二　歌物語(一)……五八六
三　歌物語(二)……五八八
四　萬葉集及び風土記の和歌傳說……五八九

五　神佛の詠歌傳說及び高僧傳說と美人傳說……五九一
六　武勇傳說と怪異譚……五九五
七　秀歌說話と歌人の綽名……五九六
八　歌德傳說……五九八
九　和歌から生れた傳說……六〇三
一〇　鶯と蛙の歌……六〇六
一一　傳說を詠じた和歌(一)上古……六〇八
一二　傳說を詠じた和歌(二)中古・近古……六一〇
一三　傳說を詠じた和歌(三)近世……六一二

目次終

隨筆と物語

「つれ〴〵」の意義

―國文學と註釋―

帝國圖書館藏

往來の國文學研究が久しく訓詁註釋に終始してゐたのは事實である。特に古典に對して漸くその解明の必要が感ぜられて來た平安時代の末頃から、唯因襲に引きずられ無意義な傳統熱に醉ひ來つた近古時代に至つては一層、幾多相繼いで試みられた古典の註釋は、徒に屋上屋の煩雜と冗漫と無意味さとに耐へ得られさへすれば、最後に出た一本をとればそれ以前の註釋の史的縮圖を極めて便利に概觀し得るほど、先人の考に對する盲目的な尊重の跡を殘してゐるのである。而もなほそれは、眞の意味の訓詁註釋とは言へないものであつた。德川の文藝復興期以後に於ける復古精神の活動に伴ふ眞摯な古典研究の第一歩として、訓詁註釋が始めて文獻學の一方面として所謂國學史の上に意義ある仕事を遂行したのであるといつてよい。

然るに、國學の成立といふ喜ぶべき現象は、又やがてこれが破壞を生命としてゐた保守的な傳統の芽をいつか自身の中にめぐまして しまつた。國學創設當初の先覺者達の意氣も抱負も不斷の努力も次第に見られなくなつて、徒に邪路に入つた小さな鎖國的、且、殆ど世襲的訓詁の世界にせぐくまつてゐる一團の人々の手に、國文學が委ねられることになつた爲に、そして今ではもう殆どそれは影の薄いものになつてしまつてゐるにもかゝはらず、その餘波は、なほ一部の人々に國文學研究を註釋といふ側に局限せしめて考へさせ、同時に他の方面に於て、漸く祖國の藝術に對する眞の理解と同情とが目醒めて來つゝあるとはいへ、なほ、やゝもすれば國文學そのものに對しての大膽な無鑑賞無批判的な侮蔑をまで惹起せんとするのである。

二

我々は世界中で日本だけが國文學を訓詁の學にいつまでも委ねて顧みないといふやうなかなり近い昔まで續いた奇現象、並にそれに對する非難に、今日では最早無條件に事實上の承認を與へる必要を感じない。併し十分に反省して、一層自らを責めたいと思ふ。それに、註釋などは現代の仕事でないといふ聲も聞く。全くさうだ、さうでなければならぬと言ひたい。しかもその爲に所謂訓詁註釋は果して完全になし盡くされてあるだらうか。

訓詁の學に國文學を委ねて顧みなかつたのは過去の事に屬する。併しながら藝術作品としての國文學に對して試みられた批評的研究もまだ數多くなく、新しい意味の文獻學、從つてそれに屬する諸種の分科の對象としても、國文學はなほ其の一部分しか取扱はれてゐないのである。そして此の不滿足な狀況を餘儀なくせしめられる主な理由が、研究の成果に到達する準備並に手續の上に存するといふことが、いつも我々をして痛恨を禁じ得させないところである。對象たる作品を正しく理解し鑑賞し得るに必要にして十分なる資料の蒐集すらも、決して完全に試みられてあるとは言へないのである。本文批評の問題は如何。完全なる國文學作品年表は如何。又、語源辭書や國文學の或作品に就いての特殊辭書、先人の研究に關する記錄の史的若しくは種目的集積並に類別などのやうな大切な作業が、未だに殆ど爲されてないと言つてもよい位である爲に、研究の緒をすらつかみ出すに困惑し、或は暗中模索的な材料蒐集の迷路に彷徨し、滿足であり完全であると信ずる理解に達し得ざる焦燥はやがて逡巡となり、倦怠となり、自棄となるに至ることすらあるのは、常に經驗するところである。而して、更に從來國文學者の主要事業であつた註釋の方面に就

いて觀る時、なほ少からざる不安が生じ來るのである。

三

我々は訓詁の蔑視といふ意味のない英雄的な態度の愚かさを議するに堪へない。我々はその一生を此のじみな精神的勞作に捧げた數多の國學者達に、いつも深い尊敬を致してゐる。今日我々の研究に如何ばかり多くの恩惠を與へてくれるかを思ふ毎に、感謝の念を禁じ得ぬのである。實際彼等の時代は當にそれがなされねばならなかつた時代なのである。さうでなければそれは、更に次の時代の人々に殘されねばならぬ負擔であつたからである。唯、我々は彼等の據ゑかけてくれた土臺石を、もつとしつかりしたものにしつゝ、その上に諸種の研究を築き上げて行くことに努力せねばならぬことを感ずるのである。

私は今此處に「彼等の据ゑかけてくれた土臺石を、もつとしつかりしたものにしつ」と言つた。まことに、我々の先人の訓詁學は、如何にも眞摯であり、篤實であり、歸納的方法に立脚して親切な解明を試みたものではあるが、その最も不滿足な點は、對象たる作品を――僅少の除外例の他、多くは――文獻學的見地からのみ眺めて、國文學として取扱はなかつた點にある。その對象が、藝術乃至藝術的の物であるといふことのはつきりした意識が、やゝもすれば忘られがちであり、或は全然認められないものすらあるといふ點である。即ちロダンの所謂「みる」ことをしなかつたのである。前代までの漫然たる佛教的、又は儒教的解釋に比すれば遙に進んだものであり、神道的精神に偏する嫌ひあるものはあつても、その自覺と研究熱と方式とに於て、我等に範を垂れるものが少くないのであるが、つまりは國學としての訓詁註釋であつた。從つて言語學的、文法的方面が主になつてゐた。單語本位、乃至は文章本位のものであつた。形式的、分析的、辨證的研究が中心であり、內容的、綜合的、直觀的解釋に缺くるところが多く、全一的、鑑賞的、批評的餘裕ある態度の域にまで十分に進めなかつた。所謂引歌、故事、出典、有職故實の穿鑿は、やはり最も力の注がれたところであつた。そして又、此の意味の訓詁すらも、國文學全體に亙つて決して十分に信頼すべき程度の成功を收めてゐると斷言することにも躊躇せねばならぬ有樣である。此の訓詁註釋――あれほど多大な努力が拂はれたにもかゝはらず――の不備といふことが、即ち古文學の眞の內容的解明といふものが未だ完成されてゐないといふことが、一般の人々にとつて、古文學をほんたうに理解する上に、從つて之に對する文獻學的なり審美的なりの批評を施す上に、更に又、思想史的、文化史的、藝術史的等種々の立場から

の正しき考察を下す上に、如何ばかり不安を感ぜしめ、障碍を與へ來つたであらうか。

そこで、所謂訓詁註釋を否定し覆すのではなくて、その不備を補ふことも、今日の我我に殘された仕事の一面でなければならぬ。否、眞の意味の註釋はまだ〳〵成し遂げられてゐないのである。近來漸く此の機運が動きつゝあることはまことに慶ぶべきことであつて、近代文學は勿論、古代文學と雖も、新なる註釋を施さるべき必要を、その作品の研究それ自體の爲に明らかに感ぜしめられるのである。

四

國文學の中で古來無數の愛讀者を有し、從つて數へきれないほどの註釋書を生み來つた徒然草、しかも現時なほ高等程度諸學校受驗參考書といふ妙な役目を、いつのまにか引受けさせられてしまつた――兼好も迷惑であらうが、受驗生には一層迷惑であらう――爲に、兎も角も最も廣く讀まれてゐる筈の、同時に益、續々として其の註釋書の殖えてゆく徒然草、これならばもう十分に解明し盡くされてゐるだらうと思つて、數ある註釋書を手にしてゆくと、極めて少數の良い物を除いて、割合に無造作に片附けてしまつてあつたり、回り道をした面倒な手數がとつてあつたりして、まことに物足りない解釋が意外に多いのに驚かされるのである。先づ何人の耳目にも熟してゐる有名な卷頭の一節、そのまた冒頭の「つれ〴〵なるまゝに」からして既に、我々はもう一度新に考へ直してみる必要はないだらうか。

五

「つれづれ」の解釋は新舊とり〴〵であるやうであるが、先づ之を「徒然（ぜん）」であるとして、其の「徒然」の原義は、(1)何事も無き義で、出典は史記の春申君傳であるとか、(2)居然と同じで動かざる貌であるなどいふ說明がある。是は漢字に宛てて解かうとする人々の態度である。伊勢物語の眞名本に「徒然」の字が用ゐてあるところから來てゐる。

源氏物語須磨卷に「つれ〴〵なるまゝに」とあり、幻卷にも、伊勢物語にも、枕草子にもある語であると指摘して、そこから語義の說明に入らうとする人々があり、或はたゞ指摘だけに終つてゐることもある。その態度なり着眼なり前者に比べて進んでもをり、意義もあるけれども、是は常に古文學に其の典據を求めようとする行き方で、往往古文學の思想や言語で以て悉く後世文學を說明し得るといふ時代錯誤的な謬見の伴ふ危險な方法であるにもかゝはらず、此の餘りに明らかな誤りが、今なほ屢、或場合に殆ど慣習的に解義の一方式として試みられてゐるのを見ることすらあるのである。

更に「徒」は「いたづら」で非教訓の意だとか、佛教の「空」の意だとか、だん〳〵岐路に入つた解釋も出て來、「法師にあるまじき逸興の遁辭」と此の序段を看るのも大體此の非教訓の解と同じ系統の考へ方のやうに思はれるが、近來の數多くの小註釋書には、大抵一樣に「退屈」と簡單に言つてしまつてあるやうに見受ける。文段抄を增補して「本文にはくだ〳〵しく註したれど、俗にタイクツといふことなり」と註した鈴木弘恭氏など以來のことであるやうに思ふ。

だから若目田武次氏の英譯徒然草にも、書名を "The Idle Thoughts of a Recluse." とし、冒頭の「つれ〴〵なるまゝに」を "As I remain idle and weary." と譯させてしまふことになつた。飜譯といふことの決してなまやさしい仕事でないことは今更言ふまでもない上に、「つれ〴〵」といつた特殊の味を持つたことばを外國語に正しく寫すことの困難は想像し得られるけれど、出來得る限り原意に近づくことに努力が拂はれねばならぬことも、原作それ自體が必然に要求してゐるところであらねばならぬ。併しそれを此の飜譯者に難じたくはない。いつのまにか「つれ〴〵」を「退屈」の一語で掩うてしまふやうになつたこと、そして又それをいつまでも其のまゝにしておくことについて、我々國文學に携はる者自らの罪を深く感ずるのである。

ついでに稍餘興に類するが、噴飯に値するのは「とろとろ」の母韻變化說である。「まどろむ」「とろける」「とろかす」などの語幹「とろ」の重なつたものが、轉じて「つれづれ」になつたので「つれ〴〵」は「とろ〳〵」卽ち意識の朦朧たる狀態を意味する、だから「あやしうこそ物ぐるほしけれ」なのであるといふ落語式な說明に對しての論難は、玆に言を費す要を認めない。似た例で、まだしも故高木兼寬博士の「心」の「ころころ」演說のフロイドクスエチモロギーが心學道話的の興味の添ふだけ一寸尤もらしく聞えるのが愛敬であらう。

六

清少納言は「つれ〴〵なるもの」として

「所さりたる物忌。馬おりぬ雙六。除目に官得ぬ人の家」

を擧げ、「雨うち降りたるはましてつれ〴〵なり」（枕草子）と言ひ添へてゐる。そしてその次に「つれ〴〵なぐさむるもの」としては、

「物語。碁。雙六。三つ四つばかりなるちごの物をかしういふ。又いとちひさきちごの物語したるが笑みなどしたる。くだもの。男のうちさるがひ、物よくいふが來たるは、物忌なれどいれつべし（通釋）かし」

としるした。

しづかな餘裕のある氣持ではあるが、何となく落ちつかぬやうな、物足りぬやうな、心細いやうな、慰めを求めてゐるやうな、さりとて自らそれをどうすることも出來ないかなり複雑した纖細な心境が「つれ〴〵」といふ感じの中に含ませられてあることがわかる。彼女が枕草子を「書き集め」たのも、かうした「つれ〴〵なる里居のほど」(枕草子)であつたのである。從つてそれを慰めるものとして、彼女が望ましくしるした前の文にみて、其の態度の中に消遣の氣分に共通したもののあることが感受せられるのであるが、單に「ひまつぶし」「退屈まぎらし」と片づけてしまつては、餘りに語感の鈍さを暴露するに終らう。まして、「馬おりぬ雙六」をば「無聊を感じさせるもの」と釋し、又、倦怠の意味の分子の多い「退屈」といふことばで、「除目(のあした)(宸翰本)に官得ぬ人の家」の感じが說き盡くされようか。同じ枕草子に「うらやましきもの」に「雙六うつに、かなきの賽きゝたる」と數へ、又「除目につかさ得ぬ人の家」を「すさまじきもの」とも觀て細敍してゐるのを讀んでもわかるであらう。

七

「雨うち降りたるはまして」と淸少納言がつけ加へねばならなかつたほど、雨につれづれを感ずるのは、誰にもある心持ながら、其の時代の人々には一つの慣性のやうにさへなつてしまつてゐた。

「つれ〴〵のながめ」といふことばは、一般に五月雨などの降りつゞく頃ほひに殊更、勿論、さうでなくてもあるが――戀する男女が互の上を想ひやつてのもどかしいわびしさの發露であり、隔てられ、うつろひ、と斷えがちに、やがて棄てられてゆき、又は、望を得ず、志と違ひ、はふれせぐくまり、或は、愛し愛せられた骨肉や異性やに離れ別れた人々の、いとゞ止み難き思慕の情、忘れかぬる胸奥の悶を、淋しく、傷ましいうれはしさに籠めて、涙の雨の緣に技巧化した平安時代の流行語であつた。そして、どうにもならないやるせなさは、竟に、さうすることの中にひたることにかへつて悲しい嬉しさを味はふ人知らぬ慰めのよすがを見出す他はなかつた。

つれ〴〵のながめにまさる涙川そでのみぬれて逢ふよしもなし(古今集、戀三、藤原敏行朝臣)

「まめ人(蕉)はのどかに見給ひつゝ、あはれいかにながむらむと思ひやりていと戀し。つれ〴〵と身を知る雨のをやまねば袖さへいとゞみかさまさりて

とあるを、うちも置かず見給ふ」(源氏物語、浮舟卷)

五月ながあめの頃久しくたえ侍りにける女の許に罷りければ　女

つれ〴〵となながむる空のほとゝぎすとふにつけてぞねはなかれける(後撰集、夏)

つれ〴〵のながめのうちにそゝぐらむことのすぢこそをかしけりけれ（蜻蛉日記、村上天皇中宮）

「帝（朱雀院の皇子、今上）はかゝる事を何とも思さで、たゞ藤壺（あて宮）の參り給はぬを、夜晝おぼし歎けど、御使も久しう奉り給はず、后の宮（朱雀院の中宮、今上の母后）の聞え給ひし事をのみ御心憂しとおぼしつゝ、御つれ〴〵とながめおはしませば」（宇津保物語、國讃卷下）

「わざとの事（亡母の追福）なども皆おのがとり〴〵すれば、我はたゞつれ〴〵とながめのみして、『一むら薄むしの音』とのみぞいはるゝ」（蜻蛉日記、作者）

「七月七日も例にかはりたること多く、御遊びなどし給はで、つれ〴〵にながめくらし給ひて、星合見る人もなし」（源氏物語、幻卷。紫上、うせし後の六條院）

つれ〴〵と降るは（イ）涙の雨なるを春のものとや人の見るらむ（十帙集、春上、和泉式部）

つれ〴〵となが（六）めに我はなりにけり（ぬ（六））つれなき空にふる（を（六））心地して（夫木抄卷一九、讀人不知）

言の葉も涙も今は盡きはててたゞつれ〴〵とながめをぞする（宇津保物語、菊宴卷、源宰相貞忠）

藤原道信朝臣

二月ばかりに女の許に遣しける

つれ〴〵と思へばながき春の日に頼むこととはながめをぞする（後拾遺集、戀四）

日ごろ雨の降るに人の許につかはしける　權中納言定頼

つれ〴〵とながめのみする此のごろは空も人こそ戀しかるらし（風雅集、戀四）

からして「つれづれ」とながめわぶる心の持主達は、ともすれば「つくづくと」思ひに沈む人々であつた。

つれ〴〵といとゞ心のわびしきに今日は訪はずて暮してむとや（大和物語、在中將）

清原元輔

題しらず

つれ〴〵とながむる春の鶯は慰めにだに鳴かば鳴かなむ（玉葉集、雜一）

長和五年四月雨のいと長閑にふるに大納言公任に遣しける　權中納言定頼

八重葎繁れる宿につれ〴〵と訪ふ人もなきながめをぞする（風雅集、雜下）

「年比つれ〴〵にながめあかしくらしつゝ、花鳥の色をも音をも、春秋にゆきかふ空のけしき、月のかげ、霜雪を見て、その時來にけりとばかり思ひわきつゝ、如何にやいかにとばかり、行末の心細さはやる方もなきものから」（紫式部日記）

暮れぬめり幾日をかくてすぎぬらむ入相の鐘のつくづくとして（新古今集、雜下、和泉式部）

題しらず

つくづくともの思ふにうち添へてをりあはれなる鐘の音かな（山家集、卷下雜）

「月頃すこしおぼし紛れつる心のうちも、かきくらし思しつゞけて、長押に寄りかゝり給ひて、つくづくと居給へるに」（狹衣物語卷四中、狹衣大將のさま）

「ほれ〴〵しくて、つくづくとおはするほどに、日も暮れにけり」（源氏物語、幻卷、源氏）

從つて又「つくづくとながめ」「つくづくと思ひ暮し」「つくづくと泣き」そして「つれ

づれと思ひ出で」「つれ〴〵と思ひあかし」「つれ〴〵と泣き暮す」のも、かういふ人々の常であることに不思議はない。

「十一月に雪もいと深く積りて、いかなるにかありけむ、わりなく身心憂く人つらく悲しく覺ゆる日あり。つく〴〵とながむるに、（下略）」（蜻蛉日記（作者））

「内裏にても里にても、晝はつく〴〵とながめ暮して」（源氏物語、若紫卷）

つく〴〵とひとりながめて思ひ出づる心のうちを君も知りけり（拾遺愚草下、部類歌）

つく〴〵と空ながめそ戀しくば道遠くともはやかへり來む（女院大輔）

つく〴〵と思ひ暮して入相の鐘をきくにも君ぞ戀しき（十六夜日記（作者））

「姫君（そで君）ともかくも物も宣はで、ただつく〴〵と泣き給へば」（宇津保物語、國讓卷中）

「つれ〴〵と過ぎし方の思う給へ出でらるゝにつけても」（源氏物語、紅葉卷「源氏の醫月夜尚侍への文の詞」）

ものおもひ侍りけるころ月の明かりける夜あかざりし面影つねよりも

たへがたくてよめる

つれ〴〵と思ひぞ出づるみし人をあはで幾月ながめしつらむ（金葉集、戀下）　橘俊宗女

ひとりねは君も知りぬやつれ〴〵と思ひあかしの浦淋しさを（源氏物語、明石卷）

つれ〴〵とわが泣き暮す夏の日をかごとがましき蟲の聲かな（源氏物語、幻卷）

九

「つく〴〵と居る時は、つれ〴〵な時である」ことが多い。

「つく〴〵といとまのあるまゝに、物縫ふことを習ひけるが」（落窪物語、卷一）

つく〴〵と秋の日長き山里にをぎの葉すぐる峯の木枯（寶治二年百首、後九條内大臣、荻風）

「おのがつれ〴〵といとまあるまゝに」（堤中納言物語、ずさまじきもの）

「須磨には年かへりて日長くつれ〴〵なるに」（源氏物語、須磨卷）

つれ〴〵と雨降り暮す春の日は常より長きものにぞありける（玉葉集、春上、章義門院）

「つく〴〵と臥したるにも、やる方なき心地すれば、例のなぐさめには西の對にぞ渡り給ふ」（源氏物語、紅葉賀卷「藤氏」）

「君は、かくてのみも、いかでかはつく〴〵と過し給はむとて院へ參り給ふ」（源氏物語、裏卷「裏上逝去後の源氏」）

「今はいとあはれなる山寺につどひて、つれ〴〵とあり」（蜻蛉日記）

「つれ〴〵とものすれば、思ふ心あるにやと世の人も推し量るらむを」（源氏物語、梅枝卷）

「つれ〴〵」な時は、多くの人は何かしてそれを紛らし慰めるか、さもなければ「つくづくとながめ」「つく〴〵と居る」よりすべがないのである。

「心のどかに御物語起き臥し聞えて、つれ〴〵も紛るればぞ、まして參りなまほしきに」（和泉式部日記）

「そゞろ事につれ〴〵をば慰め給ひ」（紫式部日記）

「忌日など果てて、例のつれ〴〵なるに、彈くとはなけれど琴押し拭ひて、かきならしなどするに」（蜻蛉日記（作者））

「なか〳〵もの思ひつゞけられて、乘てし家居の戀しう、つれ〴〵なれば、かの御かたみの琴をかきなら

す」（源氏物語、松風巻　父入道の許を離れた明石上）

「つれ〴〵なるまゝに、いろ〳〵の紙をつぎつゝ手習をし給ひ珍しきさまなる唐の綾などに、さま〴〵の繪どもをかきすさび給へる」（源氏物語、須磨巻　源氏）

「長雨例の年よりもいたくして晴るゝ方なくつれ〴〵なれば、御方々繪物語などのすさびにて明し暮し給ふ」（源氏物語、螢巻）

つく〴〵と軒の雫をながめつゝ日をのみくらす五月雨の頃（山家集、卷上夏）

つく〴〵とながめすぐして星合の空をかはらずまたながめつる（建禮門院右京大夫集）

「此所にはいとゞながめまさる頃にて、つく〴〵とおはしけるに」（源氏物語、蓬生巻　末摘花宮）

「こと問ひまゐる人もなきまゝに、起き臥しつく〴〵とおぼし歎くこと限りなし」（狭衣物語、巻二上　峰の帳院大宮）

つく〴〵と霞にくらす野邊の庵の庭のすみれに雲雀おつなり（千五百番歌合　家長朝臣）

だからつれ〴〵とながめることとつく〴〵とながめることとの心持の隔たりは、或時は引き離して説明することの殆ど出來ぬ場合があるほどに近接してゐる。

「年比つれ〴〵にながめあかしくらしつゝ」（前出）

「内裏にても里にても、晝はつく〴〵とながめ暮して」（前出）

つれ〴〵とながめ暮せば冬の日も春のいくかにことならぬかな（家集一・玉葉集雜一　和泉式部）

つく〴〵と軒の雫をながめつゝ日をのみくらす五月雨の頃（前出）

つれ〴〵とながめながめて暮るゝ日の入相の鐘の聲ぞ寂しき（風雅集、雜中　親子内親王）

つく〴〵とながめ暮して入相の鐘の音にも君ぞ戀しき（前出）

たゞ「つく〴〵」はながめる人の態度から對象へのはたらきかけであり「つれ〴〵」はながめる人の情感から對象への移入であるが、結果としては屢偶然の事象がその情感を誘惹したかの觀をなすことが多い。一は「ながめる」心の動きを能動的な側から、他はそれを受動的な側から觀ての言ひあらはし方とも言へる。なほ言はば「つく〴〵」は感じ方のはたらきから情緒の内容へのひろがりであり「つれ〴〵」は内容の質から感じ方への延長である。それで「つく〴〵とながめる」場合は、その對象が明らかに意識せられてゐることが多く「つれ〴〵とながめる」場合はさうでなくて唯漠然たる感じが主である。

更に語を換へて言へば、既に所謂「ながめ」をするのは「つれ〴〵」であるからである。從つて「つく〴〵とながめる」のは「つれ〴〵」であるが故である。「ながめ」といふことばに既に「つれ〴〵」の感じが含まれてをり、なほそれを明らかに且丁寧に解説した詞句であるところの「つれ〴〵とながめる」ことが一層意識的になり、そして又或はつきりした對象に向けられる時に「つく〴〵とながめる」ことになるのだとも説明せられ得

るのである。そして又逆に、その「つくづくとながめる」對象が客觀的存在でなくて、其の人の心裡に內在する時、或は客觀的存在からそれが主觀の中へ全く融けこんで來た時、卽ち「眺める」だけでなく「詠める」時に於て、此の二つの心持は自ら重なり合つて來るのである。それは前に引いた入相の鐘の兩首についてみてもわかるのである。

又

「火をつくづくとながめさせ給へる御まみの、忍ぶとすれどいたうしぐれさせ給へるを」（增鏡、久米のさら山、「隱岐の御配流天皇」）

の場合の「火」は

つれづれとながむる空のほとゝぎすとふにつけてぞねはなかれける（前出）

の「空」と同じく、最早「ながめる」心の對象ではない。たゞ眼が無心に注がれてあるのみで、全的精神活動は却つて他の方向にその統覺の對象を求めようとしてゐるのである。

一〇

それ故に「つくづくと」と「つれづれと」とは決して同じことばではないばかりか、或場合には勿論全然異なつた意味を持つのであり「つくづくとながめ」と「つれづれとながめ」との間にも全然は同じでない心持が無論感ぜられるのであるけれども、しかも「つくづくと」といふことばに――特に平安朝から鎌倉期もしくは少し降つても――「つら〳〵」といつたやうな意味以外に「つれづれ」の感じを含んでゐることが多いのである。そして又「つれづれ」を解する上に「つくづくと」といふ語を閑却するわけにゆかないのである。

かの「羅生門」で知られてゐる

つくづくと春のながめのさびしきはしのぶにつたふ軒の玉水

の新古今集（春上、大僧正行慶）の歌は「つれづれと降り暮したる宵の雨、これぞ雨夜の物語」といふ詞句を謠曲作者に全く矛盾なしに直に想ひ浮べさせて來たであらうし、又

つくしより歸りまうで來て、もとすみける所のありしにもあらず荒れたりけるに、月のいとあかく侍りければよめる

と詞書した帥前內大臣の詠

つくづくと荒れたる宿をながむれば月ばかりこそ昔なりけれ（詞花集、雜上）

が異本には

つれづれと荒れたる宿をながむれば月ばかりこそ昔なりけれ

となつてをり、和泉式部の歌の

たらちねの諫めしものをつれづれとながむるをだにとふ人もなし（新古今集、雜下・家集二）

の「つれ〳〵」が異本には「つく〳〵」となつてをるのも、この二つの心持の近似した性質と近接しやすい理由と、從つてこの二つのことばの類義もしくは殆ど同義的に移用せられて來た徑路をも示すものであらう。後世淨瑠璃の特殊の慣用句のやうになつた

「二人有る中にも見えざるは不審者、面體似たるにせ者ならずや。讀、心はつかざるかと、仰せの中に忠信をつれ〳〵とうちながめ」（義經千本櫻、河連館段）

「ハテ滅相な勝頼呼ばはり、微塵覺えのない籠作、亀忽ばしのたまふなと、云ふ顏つれ〳〵うちまもり」（本朝二十四孝、十場香段）（八重垣姫）

といつた變用も、「つら〳〵」「つれなし」などいふ類義又は類音の語が其の固定を助けたでもあらうが、

「局は歎きの中よりも、君を膝に抱き上げ、御顏つく〳〵と打守り」（義經千本櫻、渡海屋段）（典侍局）

「縋り歎けば母親は、娘の顏をつく〳〵と打眺めく」（吸名手本忠臣藏、九段目）（戸無瀬）

の例と併せ比べて、なほ右の關係をも一顧する値があるかと思はれる。もし

「上き」こしめして、御前に召して、物も宣はで、つれ〳〵とまもり給ふ」（宇津保物語、國譯卷下）（朱雀院）

とあるのが原本の形であつたとすれば、（異本には「つく〳〵とまもり」）尙更、淨瑠璃のそれと全く一致した用法を、既に早く此處に見出し得ることになるのである。

一一

以上考察して來たところで、平安時代人達及び其の傳統を承け又は追ふ人々のひたつてゐた「つれ〳〵」の空氣といふもののどんなものであつたかが略、解明せられたかと思ふ。物語及び歌の詞として用ゐられてゐるものの中には、無論唯、典型的修辭的に慣用踏襲せられてゐる場合が多いから、實生活の直寫といふ點からは、すべて無條件に認容するにはかなりの躊躇を感ぜねばならぬが、少くとも語義の考察の資料にはなり得る。そしてそれには、「退屈」「倦怠」「飽厭」といつた分子がかへつて餘り多くないことを著しく感じさせられるのである。母を喪うた後の事を記して、

「今はいとあはれなる山寺につどひて、つれ〳〵とあり。夜日もあはぬまゝに、歎きあかしつゝ、山づらを見れば霧ぞげに梵をこめたる」

とある蜻蛉日記の文に至つては、その何處に「退屈」「倦厭」のあらはな實感を見出し得よう。

「御忌の程など、いと哀れにつれ〳〵なる事ども多かり」

とある榮華物語（後悔大將卷）の文も同斷である。

但し、平安時代の人々とても生活に倦怠を感じなかつたのではないどころか、むし

ろ一般に感じ過ぎるほど感じてゐたと思はれる。又其の感じを現すことばを持たなかつたのでもない。「物倦んじ」「倦んず」といふことばは倦厭の意が其の内容の主部を占め、「くん(屈)じいたし」「くん(屈)ず」といふことばは沈滞の意味が其の中心をなしてゐる。前者は、報いらるゝことなき生活に對する嫌倦・鬱憂・期待を裏切られた事實に對する失望の情が主として現はされ、後者は、變化の無い環境に對する疲嫌・困惑・打開し得ない生活に對する無氣力の賴りなさの感が主として述べられたもののやうに解せられる。そして又互に通じ聯なつてゐるところのもので、屢〻同じやうに用ゐられてもゐる。勿論いづれも何人も之を喜ばぬのであつて、「つれ〴〵」が或場合に味はれ愛されると同日の談ではないのである。

「あはれと思ひし人(夕顔)の物倦じして、はかなき山里に隱れ居にけるを」(源氏物語、玉鬘卷)
「あてたる女の尼になりて、世の中を思ひうんじて、京にもあらず、遙かなる山里に住みけり」(伊勢物語)
「あはれに思ひ聞えし人を、一ふし憂しと思ひ聞えさせし心あやまりに、この御息所(六條)も思ひうんじて別れ給ひにしと思せば」(源氏物語、須磨卷)
「おいらかに、あたりよりだになありきそ、とやは宣はぬといひて、うんじて皆歸り(給ひ)ぬ」(竹取物語)
「身じろくべきやうもたくて、うんじ顔つくりてあり」(宇治拾遺物語、卷一四)

「道かひにてだに、人か何ぞとだに御覽じわくべくもあらず、まづ追ひ拂ひつべきしづのをのあはれに睦まじう思さるゝも、我ながらかたじけなく、屈しにける心の程思ひ知らる」(源氏物語、明石卷)
「姫君(紫上)いかにつれ〴〵たらむ。日頃になれば屈してやあらむとらうたく思しやる」(源氏物語、花宴卷)
「少將(藏人)は、この源侍從(雀)の君かうほのめき寄るめれば、皆人これにこそ心寄せ給ふらめ。我が身はいとゞくんじいたく思ひ弱りてあぢきなうぞ恨むる」(源氏物語、竹川卷)
「まめ人とこそつけられけれ。いと屈したる名かなと思ひ居給へり」(源氏物語、竹川卷)
「かの居たみくんじたりつる氣色どもぞ、あはれに思ひ出でられ給ふ」(源氏物語、蓬卷)
「日頃よろづに思ひ屈したりつる人々も、うち休みて心ゆるびしたる夕暮の程に」(狹衣物語、卷二下)
「かゝるものは、うちくんじたるこそあはれなれ。うたてもはなやかなるかな」(枕草子)

「ものうし」「ものうげ」は一層不愉快でけだるいのである。

「いとものうくて惱ましげにのみもてなし給ひて」(源氏物語、蓬卷)
「ものきゝに、宵より寒がりわなゝき居りつるげすをのこなど、いとものうげに歩み來るを」(枕草子、すさまじきもの)

更に又、平安時代人等の用ゐた「つれ〴〵」といふことばに、全然、倦怠・退屈の感じが意識せられてないとすることも出來ぬ。稀にそれらしい感じを見出すことが出來るが、それは決して此の語の内容の主部、中心ではないのみならず、それほど此の語が複雜な内容を持つことばであることと、又それが爲に後世その意味に展開し移用せられて來た芽生を胚胎してゐる證左となり得るだけである。

つれ〴〵と雨降り暮す春の日は常より長きものにぞありける（前出）

と歌つても、倦んじ屈した不快感をそのまゝに色濃く吐き出さうとしてはゐない。のびやかにおちついた氣分をも籠めてゐる。むしろ、しづかな感じである。

つれ〴〵なりしをり、よしなしごとにおぼえし事

世の中にあらまほしき事

夕暮はさながら月になしはてて闇てふことのなからましかば

春を花をしなべて花は櫻になしはてて散るてふことのなからましかば

世の中にうき身はなくて惜しと思ふ人の命をとゞめましかば

世の中は春と秋とになしはてて夏と冬とのなからましかば

みな人を同じ心になしはてておもふおもはぬなからましかば（和泉式部集二）

と和泉式部が詠じた「つれ〴〵」の心持の中には「よしなしごと」を空想する閑暇な餘裕を、又それを表現した態度と詞とに、かなりの「あそび」の氣分を見のがすことは出來ない。そしてこれは又兼好が「心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつくる「つれ〴〵」の心持に、決して絶縁的なものでもない。併し、そのいづれもに感ぜられた閑暇な餘裕の底を流れる、空想の世界へのがれようとあがく痛ましく切な苦しみ、「あそび」の氣分を透して感ぜられる淋しい人生に對する嚴肅な悲しみを看過してい、だらうか。一概に「倦んじ」や「屈んじ」と同じやうに解し去つて濟まされるであらうか。

一二

もとより又、つれ〴〵とながめわび、つれ〴〵と思ひ惱んだ果ては、倦怠のやりどころない輕やかな疲れが殘らう。實際「うんじ」「くんず」る感じに通ずるものがあるとすれば、それは「つれ〴〵」の連續した情緒の流れの、僅かに終末に於ての主として感覺感情にあらはれるところで、決して常には、そして最初からは含まれてゐない感じと思はれる。（前掲、源氏花宴卷の「殿君いかにつれ〴〵ならむ云々」の文も改めて參照したい。又、同じく少女卷にも「この頃まかん出て侍るに、いとつれ〴〵に思ひて屈し侍ればぞ云々」）

さうして、詩的情感そのものよりは、殆どそれらの蟬脱し去つた肉體的の感覺のみしか意識せられぬやうになつた、否、往時のやうな詩的情感を持つことを知らないほど物質化現實化し、兼好の所謂「衰へたる末の世」（徒然草二十三段）の「無下に卑しくこそなりゆき」（二十二段）つゝあり、「片田舎の人」（百三十七段）の所得顔に振舞ひ、あらゆる物の觀方、感じ方が粗雜になつて來た、又前代の主情主義の反動としての主知的主意的の傾向が漸く增大して、何事も鑑賞の程度に止まり得なくなり、こざかしい理判の鑄型に強ひてはめ込まうとするやうになつた近代心理では、兼好の慕うた「ふるき世」（二十二段）の「つれ

づれ」の氣持に同化しきることはおろか、それに觸れることすら次第に益〻緣遠くなつて行つたのも無理はないとも言へる。兼好が屢〻歎じ、冷罵してゐる當代人がもう既に兼好を理解する資格に於て許されなくなりかけてゐたのであることを思ふと、近世學者の徒然草註解の態度が甚だ不滿足なところに低徊してゐる現象を呈してゐるのは――そして又それは實に徒然草だけに限つたことでなく、其の理由も他にもあるのであるが――止むを得ない事であつたのかも知れないけれども、單にこの「つれ〴〵」の語釋だけについても、餘りに後世的な思想の上に立つての考へ方、及び後世的に變化させられた內容を持つやうになつた語意の無造作な適用に終始しすぎてゐるのが甚だ遺憾である。それは又、一はその純國語に宛てられた「徒然」の漢字に知らず識らず煩はされて來た爲であらうかと思はれる。

かうして、近代語の說明に際しての古語の無意味な列擧によつて徒らに權威づけようとする虛假威しの滑稽と共に、古語を釋するに近代化せられた意義からのみ眺め、或は近代語の中に含まれて稀薄になつてゐるその原義的要素を輕々に看過するのも、決して忠實なる訓詁と言ひ難きものであらねばならぬ。

故に「つれ〴〵」といふ語の語源を調べることは無用の事ではなく、出來得るならば望ましい事であり、又其のことばの內包的意義の一般的な時代的變移を考察することも緊要な事である。併しながら、それだけでは不十分である。ことばは生きてゐるものである。斷えざる流動と變化の機因を自らの內から又外から釀し出しつゝ常に成長、進化、或は壞滅を營みつゝある。此の意味からすれば、同一の語の意義でも、時代的に全然同じであり得ないと共に、個人的にも全然同じであり得ないし、もつと嚴密には、同一者でも常に同じではあり得ない理であることは今更言ふまでもないが、作品の註釋、就中かうした感情の表現に關する語釋の場合には、特に右の原理と事實とに基礎を置くことが忘れてならない用意でなければならぬと思ふのである。

乃ち、兼好の「つれ〴〵」は畢竟兼好の「つれ〴〵」である。古典のそれや漢字の「徒然」と全く同じである必要はない。作者自身の說明に聽くのが一番いゝ方法ではあるまいか。幸にして彼の精神生活の內部に立ち入つて、そこから是が說明を演繹し來る手數をとらなくとも、彼自ら自分の言葉で明らかな解說をしてくれてゐるではないか。

「つれ〴〵わぶる人はいかなる心ならむ。まぎるゝ方なくたゞ一人あるのみこ

そよけれ。」（徒然草七十五段）

そして續いて其の理由を此の段で述べてゐる。「配所の月罪なくて見ん」理想もそれである。

若し「つれ〴〵」が「退屈」だとすれば、それを兼好に好ませておく註釋者達は少々惡戯が過ぎよう。

一四

併し又、ことばを用ゐる人の想念の中に、情感の中に、自ら具有せられてゐて、先人及び時代人の其の語に注ぎ込み渾熟させた意味を理會し鳴感し同化する力とはたらきとは、其の語を自分のことばとして用ゐるに際しても、特に或意圖からの改變が要求せられなければ、さうした意味の內容から全然脫れ出ることをも許さない。むしろ出來る限り其の普遍性を失ふまいとする殆ど本能的な努力がはたらかされる。そこに其の語を通して流れてゐるたましひの時間的及び空間的連續があり、こゝに言語の存理と効用と隨つて又語釋の利便な鍵が藏されてゐるのである。

此の意味で、枕草子を初め前に引いた幾多の用例にみて、平安時代――特に兼好にあつては、それが憧憬の時代であつた點でも注意せらるべきである。――以來の人々の使つた、そして又兼好の用ゐた語意の輪廓はわかるのであるが、更に想像を加へることが許されるならば、平安時代の物語・日記・隨筆などに於て、もう熟してゐる例へば、彼が其の流れを酌んだ枕草子の中の「つれ〴〵といとまあるまゝに」（すさまじきもの）や、其の枕草子と並稱した源氏物語（徒然草十九段）の中の「つれ〴〵なるまゝに」（夕顏卷・蓬卷・須磨卷・幻卷・橋姫卷）や、又彼が「ふれ〳〵こゆき」の條に（百八十一段）も引いてゐて、恐らくは愛讀したでもあらうと思はれる讃岐典侍日記の中の「つれ〴〵のまゝに、よしなし物語、昔今の事語りきかせ給ひし折」などいふ詞句が、それから或は堤中納言物語（よしなしごと）の「つれ〴〵に侍るまゝに、よしなしごとども書きつくるなり」などの文辭が、殆ど無意識的に、あの序段を書く時の彼の心持をふさはしく寫し出したものでもあらうし、或は單にそれだけの詞句についてならそんな聯想の過程も要せぬほどまでに彼の平生の心持に最早融合してしまつてゐた「つれ〴〵なるまゝに」「心にうつりゆくよしなしごと」といふ既に詞章化せられたまゝで蓄へられ、或は用ゐられてゐたでもあらう想念が、記載の形式をとつたまでであるとも看られ得るのであるが、――尙一層作者の心理に立ち入つて、もつと大膽に想像することの餘地が與へられるならば、その執筆の動機に關しての內因的な說明は唯藝術衝動の湧躍とい

ふことに盡きるのであらうが、外因的な一つの說明として、もし流布の徒然草が――少くとも卷頭の數頁が――原本のまゝであるとすれば、所謂序段の次に

「いでや、この世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ」

と續けた心理に似通ふところのものに遭遇する點で、前に示した

「つれ〴〵なりしをりよしなしごとにおぼえし事」

と詞書して「世の中にあらまほしき事」「人に定めさせまほしき事」「あやしき事」「くるしげなる事」「あはれなる事」の題下に數々を詠み出でた和泉式部の筆すさみ――和歌四天王の一人であり平安朝文學の熱愛者である兼好に、かなり親しいものであつたらうことは容易に想像される式部集の――が、彼の好み且倣はうともした枕草子型の隨筆の書き起しに際しての心象に、或は直接乃至間接の誘因的暗示と表現の摹本とを與へたのかも知れないと考へたくなることは、同じ式部集の

「いとつれ〴〵なる夕ぐれに、はしに臥して前なる前栽どもを唯にみるよりはとて物に書きつけたれば、いとあやしうこそみゆれ。さばれ人やはみる（下略）」（家集五）

の詞章を併せ讀む時に益〻此の憶測が助けられるやうな感じがせぬでもないからである。（註）「書きつけたれば」と「書きつくれば」、又「あやしうこそみゆれ」と「あやしうこそ物狂ほしけれ」とは、嚴密には、表現せられた「我れ」の姿を後からふりかへつて眺めるのと、今表現せられつゝある「我れ」を感じ、動きつゝある心のはたらきと感情の靜かな興奮とをそのまゝしるしつけたといふ Tense の上の幾分の差異、敍述の主題の客觀的であると主觀的であるとの差異、作者の心境乃至心的過程の上に於ける自己判定と自己觀照との差異があるけれども、一面からは要するに修辭的の差異とも言へる。

が、それは兎も角、「つれ〴〵」は徒然でも居然でも何でもあれ、兼好の「つれ〴〵」はまぎるゝ方なくただ一人ある狀態である。心を捉へらるべき外部生活の世界から暫く全く解放されて、一人靜に自分をみつめることの許された時間ではなからうか。（前述のやうに、堤中納言物語には「よしなしごと」の題を設けた一章すらあり、其の中の文も前掲のやうに、兼好のそれに相似た表現の態度と詞句である。併し其の「よしなしごと」の內容及び感じ方は兼好と同一のものでないことは勿論「つれ〴〵」の心境も亦恐らく兼好ほど複雜化してゐないことが容易に想察される。又「徒然之餘以盲目日來時々書」大和物語、今日終功了、是又狂、事也。互可嘲多」といふ明月記（寛喜三年八月十八日）の文も、全く徒然草の冒頭に無緣でないのではあるまいかと、想像してみたくもなる。

「つれ〴〵」なるまゝに」を漢文で書けば、先づ「徒然之餘」であらう。和泉式部以上に明靜

の文は兼好に親しいものであつても不都合はない筈である。但し定家と兼好兩者の心境と態度とは、是亦多少通ずるところはあつても、決して全く同じでないこと、說明するまでもなからう。）然らば、古いが、壽命院抄の「サビシキ也」野槌の「閑寂のこゝろなるべし」文段抄の「さびしきなり」などいふ註が、少し言ひ足りないところがあり、又全然は當らないとしても、「退屈」などにくらべてむしろ勝つてゐると思ふ。同じ古註の中でも、高田宗賢の大全に「心二つ有り。一には、しづかなる心、二には、さびしき心。こゝにては打ちまかせて用ゐる也」と註し、更に「兼好の方よりは只さびしき故に硯にむかひて心にまかせて書くといへり。此方よりみれば、兼好心身ともに靜かなる心よりかゝる有難き草子をばつくられたるとも可見ものなり」と述べた見解が、今一息といふ憾はあるが、そして寶典扱ひし過ぎてはゐるが、此の場合だけについて言へば群を拔いてをり、殊に之を創作心理と鑑賞心理との兩面から觀ようとした態度も進んだ註釋法の方式であるのに、後の註釋者達に餘り注目せられなかつたのが殘念である。但し、源氏などに「さびしくつれ〴〵なる晝つ方」（柏木卷）「さびしくつれ〴〵げ」「いとさうぐしくつれ〴〵なる慰めに」（橋姫卷）などあるのを以てみても、「さびし」と全くの同義語（シノニム）ではないと思はれる。

「紛るゝ方なく」は「閑暇」である。煩劇な環境との勞務的交渉から自由であることを意味する。（だから、「つれ〴〵といとまあるまゝに」（前出、枕草子）「いとまありてつれ〴〵なる心地し侍るに」（源氏物語、手習卷）と言へるのである。（註二）「たゞ一人ある」は「唯我」である。「唯我」の自意識を主觀的に考へたといふよりは、その環境との關係に於ての客觀的事實として述べたのである。即ち此の二つの觀念が「つれ〴〵」といふ感じを構成してゐる主な要素であると共に、此の二つの觀念の結合に於て「つれ〴〵」の感じは醸成せられて來ると解することが出來る。「閑暇」であるが故に「暢濶」と共に或場合に「安逸」「退屈」を感じ易く、「たゞ一人ある」ことには、許された世界に於ての生命の擴充の誇りと安心との喜悅感の一面があると同時に、孤獨の物足りなさと不安との哀感をつゝんでゐるが故に、「靜寂」に赴くのはまことに自然であらねばならぬ。

源氏物語幻卷に女三の宮の事を敍して、

「何ばかり深う思しとれる御道心にもあらざりしかど、この世に怨めしく御心亂るゝ事もおはせず、のどやかなるまゝに、紛れなく行ひ給ひて、一つ方に思ひはなれ給へるも、いと羨ましし」

とある。竹川卷にも「大方のどやかに紛るゝことなき御有樣どもの」「三月になりて咲

く櫻あれば散りかひくもり、大方の盛りなる頃、のどやかにおはする所は紛るゝこと、なく」など見えてゐる。「紛るゝ方なくたゞ一人ある」狀態が、平靜で幸福な意識に滿ちてゐるときが「のどやか」で、精神活動がその中心となるべきはつきりした對象を獲ずに何處かに滿たされぬ孤獨の感に支配せられるときが「つれ〴〵」ではなからうか。そして、この二つの心持の相異は、大體に於て、前者は紛るゝ方なくといふ感じに於て勝ち、後者はたゞ一人ある感じが強く意識されるところにあるのではなからうか。又此の二つの心持に共通するものがあるからこそ、つれ〴〵にのどかになりにたる有樣も」(竹川卷)「のどやかにつれ〴〵なる折は」(梅枝卷)など言へるのであらう。(「のどやか」「のどか」も右の意味に止まらず、いろ〳〵に移用轉化せられてゐるのも勿論である。)

註一　其後、村井量令の群書備考(卷之一)に

久保取蛇尾(入江昌喜)云「つれ〴〵草發端のことばは、和泉式部集に、つれ〴〵なるをりよしなし事におぼえし事どもかきつけしにと云々。是を模して潤色せるなるべし」

とあるのを觸目して、既にかうした先學のあつたことを知り得、穿鑿の到らなかつたことを愧ぢた。併し猶語簡に過ぎ、且卑見と全くは同じでない。「潤色」の評言も、必ずしも妥當でない憾がある。「いとあやしうこそ」の方は引かれてゐない。

二　源氏物語若菜上卷の

「しづかなる住居は、この頃こそいとつれ〴〵に紛るゝ事なかりけれ。公私に事無しや。何わざしてかは暮すべき」など宣ひて、「今朝大將(夕霧)のものしつるはいづ方にぞ。いとさうざうしきを、例の小弓射させて見るべかりけり。(下略)」

とある文は、就中此の「閑暇」の意味に用ゐられてゐることを最も適切に說明してゐる。

一五

兼好はかく「つれ〴〵」を好むと共に、一面又此の「つれ〴〵」の氣持に堪へ得ないところも無論ある。十七段(「山寺にかきこもりて云々」)などは一般的な經驗を教訓的な標語の形であらはしたものでもあらうが、なほ十二段(「おなじ心ならん人と云々」)百七十五段の後半(「つれ〴〵、なる日、思ひの外に友の入り來て云々」)などと共に此の心持を語るものである。兼好法師集にも

三月ばかりつれ〴〵とこもりゐたる頃雨のふるを

ながむれば春雨ふりて霞むなりけふはたいかにくれがてにせん

かくしつゝいつを限りとしらま弓おきふしすぐす月日なるらん

此のつれ〴〵であることに却つて一層の寂寞を感じて此の瞬間から脫れようとする心持がはげしくありながら、やはり又つれ〴〵でありたくてたまらない彼の心持は、十分に同感の出來るものであると思ふ。から解して始めて卷頭の一節がやゝ

わかつて來るやうな氣がするのである。「心にうつりゆくよしなしごと」も「そこはかとなく書きつくれば」も「あやしうこそものぐるほしけれ」も、右の「つれ〴〵」の心持が理解せられゝば、そこから自ら解釋せられて來ねばならない。「つれ〴〵なるまゝに」「つれ〴〵なるに」「つれ〴〵なれば」とも勿論意味が餘程違ふ筈である。單なる「タイクッ」を消す爲に筆を執つて日ぐらし書きちらす奇蹟的なのんきさ、むしろ苦痛でもあるべき大事業を兼好に敢へてさせて、文學は退屈から生れるものであるといふ新しい事實を敎へられ又敎へてゐた自分等こそ、ほんたうに「あやしうこそものぐるほしい」ものではなかつたか。

一六

兎もあれ、かうした「つれ〴〵」は靜觀の許された時間である。內察の自由を與へられた時間である。心ゆくばかり自分をながめ、いつくしむことの出來る時間である。僞りなき自分の心の姿を直視することの出來る時間である。ほんたうに自分の生を、存在を、ほんたうに全き獨りの命を、力を、感ずることの出來る唯一の世界である。そして「もののあはれ」をほんたうに感ぜしめられるのは唯此の時である。不滅の眞理に觸れ、久遠の信仰に入る機緣がほのかに芽ぐんで來るのも此の時である。淋しいが決して冷えきらない、おだやかではあるがむしろはげしい情熱が全意識を掩うてゐる。そして斷えず何物かを求めようとして止まない。想像の翼が無究な世界への自在な飛翔を無限に續ける。强くなり得ない悲しみはあるが、强くならうとしての努力、充足に向つてのあこがれを底に沈潛させてゐる弱さである。もし一層惠まれたたましひの持主であるならば、その人が純な感性を最も鋭く光らせることの出來るのは唯此の時である。ほんたうにひろく深い思索の出來るのは唯此の時のみである。ほんたうに豐かなそして透徹した人生の觀照の出來るのも亦此の時である。大自然の暖い懷にしつとりと抱きしめられてそのまゝ一如に融合してしまふことの出來るのも亦此の時である。枕草子も此の心持から書き集められ、道綱の母も此の心持を日記に寫した。「おまへはかくおはすれば御幸は少きなり。なでふ女が眞名書は讀む。昔は經よむをだに人は制しき」（紫式部日記）と女房達にしりうごたれながらも、厨子の中から取り出して式部が讀み耽つたのは「つれ〴〵せめてあまりぬる時」（同）であつた。「されどつれ〴〵におはしますらむ」と思ひやりながら「又つれづれの心を御覽ぜよ」（同）とそのつれ〴〵を愛するたのしみを人にも分たうとしてゐる式部が、つれ〴〵の心を覽味ふといふ心持こそは、やがて源氏物語を生み出した創作

の態度そのまゝではないか。「つれ〴〵とながめ」ることが次第に内に深まつて來「つれ〴〵の心をみる」ことが益豐かに養はれて來、かくて「もののあはれ」を感ずる心は愈切に、竟に「善きも惡しきも世に經る人の有樣の、見るにも飽かず聞くにも餘ることを後の世にも言ひ傳へさせまほしき節々を、心に籠め難くて」(源氏物語、螢卷)源氏の物語は創り出されたのではないか。時世こそ違へ、全生活の姿こそそれ〴〵に同じからざるところあれ、西行も兼好も、更に又、蕉翁であれ、惟然坊であれ、良寛和尚であれ、いづれは此の「つれ〴〵」の心境をほんたうに味はうとし、そして味ひ得た人々であり、或はもつと進んだ境域にまで到達し得た人々であると言へよう。「つれ〴〵せめてあまりぬる時」屢、よき藝術は、詩は、生れ出づるものである。あらゆるよき藝術、よき哲學、よき宗教の創生、それは「つれ〴〵」の心境を度外視しては說き得ない。何となれば、これは人性本然の姿の、縱へ全體でないまでも、そが實相に於てのみ顯るゝ生命の躍動であり、又かれはその僞りなき表現であるからである。そして、外部生活との交渉に追はれて日も足らず「つれ〴〵」の時が殆ど一般に許されなくなつた近代に向ふほど、却つて此の心持を好ましく娛しまうとする欲求がはげしくなつて來るのも自然であり、それであるのに又それと共に、往昔は少しも珍しげでなかつたその事が、特殊の人々の生活に追ひ込まれてしまつて來たのを、「紛るゝ方」にのみ沒入してゐる平凡な生活からは、たゞむしろ世を拗ねた、世から隱れた、世をあそぶ消閑の遊戲、異風の癖態、變り者の性狀とのみ眺められてしまつてゐるのではなからうか。

かくて益、我々は、徒然草を目して「涙なき道德書」("Morals Without Tears")(一九一四・一・一ロンドンタイムス文學附錄)と嘲笑し去る外人に對して、而もそれはラムによつて十分に說き聽かされて「クエーカーの人々の集ひ」が釀し出す空氣のどんなものであるかを熟知してゐる心にとつて、同化は容易でなくとも、その理解はさまで困難でなからうと忖度し得る國の人々に對して、不注意なそして又不親切な國文學の案內者の一人であることを愧ぢないわけにゆかないのである。

私は玆で、徒然草の讃歌を唱詠してゐるのではない。語釋の妥當でないことから、ひいてそれが其の思想までも正しく理解せられることの障碍となる恐ろしさを考へてみたのである。

一七

まことにこのつれ〴〵をたのしむ心と「つれ〴〵」に堪へ得ない心との縺れ、それが徒然草全篇を通じて流れてゐる兼好の心持である。さうしてこの心持が徒然草を

生んだのであると思はれる。獨りの「我れ」に滿足しようとする心と滿足し得ない心、自己を視ようとする心と、みまいとする心、穢土を厭離する心と風流に惹かるゝ心、如幻の生に意義を認めまいとしつゝなほ死を恐るゝ心と、住みはてぬ世に早世を望みながらなほ生を喜ぶ心、絶對超自然の力と世界との存在を信じてゐながらも、それを斷えず自らに信じさせようとする努力、くつろいだ心のゆるびを恐れ呪ひつゝも、それを求めて其處へのがれたい希冀、過去に對する感傷の愛著、現時に對する冷笑の憤懣、理性にうべなはずして感情に是認する行爲、論理に許されずして情趣に存立し得る心象、必然と偶然、定と不定との謎、理想と現實との矛盾、破綻の惱み、諦め、悟、疑、しかもその相反する姿に於ての瞬間的の「我れ」は常に眞であり、その不一致、破綻も亦儼然たる事實である。そのいづれをも正しとして、其處に調和と自然と意義とを見出さうとし、否定の肯定を、矛盾のまゝの統一を得ようとする努力の淋しい自己の飽くまで人間的な生活記錄が徒然草である。この心境から彼は自警し、自嘲し、自遣し、又自負してもゐる。時としては自分へと共にすべての他人へも話しかけながら。其の間、屢、煩はしい程に、單なる備忘や考證的の氣分もまじるが、そして又これも、常識と趣味とに富む教養ある彼の性格と氣持とを僞りなく物語るものであるが、全篇はその命名者の誰であるにかゝはらず、「つれ〴〵草」の名によつてふさはしく代表されてゐる彼の自ら觀照し自ら詠歎する隨筆文學である。そしてそれは「つれ〴〵」の「なぐさめ草」だけでもなく、亦「つれ〴〵」の「たのしみ草」だけでもなく、やはりたゞ「つれ〴〵草」なのである。之を戯筆と觀るべからざるは勿論、所謂教訓書ともみるべきでないと同樣に、すべてを趣味論扱ひすべきものでもない。

そして彼がこの「つれ〴〵」の氣分をつくり出し、それをたのしみ、それに惱んだことの說明としては、時代の政治史的背景や、文化、宗教、老莊的哲理思想等、いろ〳〵の問題に關聯して、いろ〳〵の方面から考察せられねばならぬのであるが、彼がこの隱遁生活に入つた、否入らねばならなかつた動機、及びさうした生活を選び、之を生きた、そして又徒然草に示されたやうな個性を創成したことについて、時代精神並びに先人の隱者思想乃至文學の影響を認め得べきはもとよりであるけれども、それと共に、彼の個性、人生觀、死生觀、宗教觀、戀愛觀等が先天性及び外的誘因以外に、彼の健康にも淺からず根ざしてゐるべきことを注目し得ると思ふのであるが、それは他日改めて考へてみたいと思ふ。

一八

「つれ〴〵」の意義

かうして兼好の「つれ〴〵」は彼が憧憬した平安朝の人々の「つれ〴〵」の考察からと、彼自身の説明からとで、略ぼ正しい解釋に近づき得たかと思ふ。そして彼の「つれ〴〵」を究明することによつて、平安朝の「つれ〴〵」の概念の把捉にも一段の的確さを加へ得た感じがする。

が、上に述べたやうな解釋は、それ〴〵の場合に於ける、單なる單語の辭書的註解のみでは出來得ない。(ほんたうの意味からいへば、文の解釋は如何なる場合に於ても、常にさうであるべきではあるけれど。)作品全體(或場合には作者のあらゆる意味での全生活)を知らねば試み得ない方法ではあるが、そして又これは我々が作品を通して作者の心の奥に直に飛び込んで行くことが出來れば、たやすく遂げ得られるところの作業であるべきであるが、しかし又作品がよく理解せられる爲には、やはり正しい解釋が必要である。一語一句にも滲み込んでゐる作者のたましひを、生活を、心の聲を、姿を、あやまりなく知り得、感じ得る爲には、ほんたうの意味の註釋は唯一つのこれが開扉の秘鑰でなければならぬ。結局完全なる理解は卽ち完全なる釋義であり、完全なる釋義は又やがて完全なる理解でなければならない筈である。さすれば作品中のたゞ一つのことばの解釋も、その語が、時代的、社會的、地方的に分化展開して行く文化の體系的な又具體的な表現の一因子を成す意味に於て、又全文と、全作品と、作者の全生活との有機的關聯をもつ意味に於て、言語史、文化史、文學史等の側に自ら密接重要な交渉を生じ來るものであり、更に文法的、修辭的、韻律的方面に及び、或は題材、思想、作者の傳記、著作の年代其の他の諸項目にまで亙つた十分な解說が施さるべき爲に、廣義に於ける作品の註釋といふ上から、補助學科としての數々の大切な學問と、それに伴ふ幾多の問題並びに方法とが必要とせられて來ねばならないのも當然の事である。

このやうな意味から、私は國文學の作品研究に相伴つて或は其の準備として、作品の註釋(解釋及びそれ以上に出でた味釋、評釋)といふことの決して忽にせらるべきでなく、又疎かであつてはならないといふことを痛感するのである。新しい意味の國學の基礎を確立する上にも、閑却してならない緊急な事ではなからうか。幸にして近來かういふ側に漸く忠實な注目が拂はれかけて來た傾向を看取して、慶福の念を禁じ得ぬと共に、一段の努力が捧げられねばならぬことをお互に改めて牢記したいと思ふ。たゞそれが爲に又國文學研究がいつまでも此の註釋にのみ止まつてゐなければならないとは考へられない。そして又さうでなかるべきことを熱望するも

のである。

兼好の健康

地口のつもりではない。あやしうこそものぐるほしい興味が一寸惡戯してみただけである。

兼好の「つれ〴〵」が、平安時代からの史的用例と、兼好によつて個性づけられた語義とから觀て、所謂單なる「退屈」といふことばで言ひ換へられるには餘りに複雜した寧ろ「退屈」とは似て非なる心持と言つてもよいものであることは、昨年の夏「國語と國文學」(大正十五年七・八月號)に書いた(前章所出「つれ」の意義)から、此處では詳述を控へる。たゞ

つれ〴〵わぶる人はいかなる心ならん。まぎるゝ方なくたゞ一人あるのみこそよけれ。(徒然草七十五段)

つく〴〵と一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや。(七段)

(有朋堂本や國民文庫本など、何に據つたのか「つれづれと」になつてゐる。それならばなほ適切である。なほ「つれづれ」と「つくづく」との關係も「國語と國文學」に述べておいた。前章參看。)

と、兼好自身のことばではつきり說明してくれてゐる釋義と心意とを引證しておくだけにとゞめる。

雙が岡の隱者は、斯かる枕草子が書かれた「里居のつれ〴〵」、又式部日記の認められ

た「つれ〴〵の心」を懷かしみ、自らに許された靜觀の時間をつく〴〵と娛しみ味はうとしつゝも、同時に此の孤獨感に堪へきれぬわびしさに惱んでゐる。更にその惱んでゐる自身を又懷かしくながめてもゐる。その惱みを惱みながら又さうすることを、惱みそのものをも、味はつてゐるやうにすら見える。そして和泉式部集の詞書のやうに

つれ〴〵なりしをりよしなしごとにおぼえし事。

を、又堤中納言物語の「よしなしごと」のやうに

つれ〴〵に侍るまゝによしなし事ども書きつくるなり。

と、そこはかとなく自分の斷想を、瞬間的に變現してゆく自分のとぎれ〳〵の姿をば、そのまゝ徒然草に印し留めてゐるのである。

あゝした靜かな心、閑かな生活、そしてたゞ一人在るといふ哀切な喜び、と同時に悲しみ、淋しい誇と同時にあきらめ、それは忽忙の生活に日も足らぬ人々には味解のむつかしい心境である。而も病弱の心身にあつては屢、偶然に――或は必然でそして自然であるかも知れない。――近づくことの機會が餘り面倒なく用意されてあるのではないかといふ氣がする。芭蕉や西行や良寛やもみんなつれ〴〵の門をくゞつた人達であると思ふ。そしてそれ〴〵自分の魂を高く淨く美しくいろ〳〵に育ててゆかうとした人達であると思ふ。併し今は私は此處では兼好の事だけを考へる。

隱棲、それは俗人には無緣の事である。眞似は出來よう。世襲的、職業的の僧房生活の程度ならば。同時に働き盛りの健康人には恐らく苦痛の桎梏であらう。無論、隱棲の動機は人さま〴〵であらう。併し心身の羸弱が活動の社會の煩劇な勞務から脫れさせようと强要することを、其の最も有力なそしてかなり根本的な且自然な動因の一つに數へることは當然過ぎる事と言へよう。詩を生み、哲學を創成する心境に、屢、恐らくは自分にも氣づかぬ生理狀態の微妙な變化が、目に見えぬ大きな支配力となつて臨むものである事も否定出來ない事實であると思ふ。

徒然草を讀むと、到る處で消極思想に出逢ふ。そして隱遁主義の提唱を聽く。泡沫無常觀は勿論佛說でもあり、特に時代意識でもあり、又一般的な人生觀であるとも言へるが、それを兼好自身の論理で以て始終自分に納得させようとしてゐるところに彼の個性が滲み出てゐる。常住の世ならば「いかに物のあはれもなからむ」といふ立場から「世はさだめなきこそいみじけれ」（七段）と斷案を下してゐる。否定のまゝの

肯定である。が、その餘所事のやうな餘裕さの中に、腸の底から吐き出された魂の聲が響く氣がする。人生行路の定不定の謎、かねてのあらまし皆違ふかとすれば然らず、違はぬかとすれば亦然らず。いよ〳〵物は定め難い。「不定と心得ぬるのみまことにて違はず」（百八十九段）といふ眞理は、迷ひ悶え疑ひ惱み焦り諦め、永い間苦しみぬいた末にたどりついた貴い體驗の告白として、煩悶解決の唯一絶對の心得として聽く時に、改めて新しい力となつて生きる。迷のまゝの悟りである。

ほいにもあらでとし月經ぬることを
うきながらあれば過ぎゆく世の中を經がたきものとなに思ひけむ
ならひぞと思ひなしてや慰まむ我が身ひとつのうき世ならねば（兼好法師集）

といふ心にも通うてゐる。希望を棄てた、自分の意志の力ではどうにもならぬ、たゞあるがまゝに任せるが一番だ、否事實さうするより外に全く仕方はないといつた心持はあり〳〵と感じられる。弱い强さである。彼の歌集を通して彼にも戀愛の惱みのあつた事は知られる。その悶えもかなりにあつたらしく想像される。失戀の悲苦も經驗したやうである。けれどもそれだけが隱遁の主動機乃至は煩悶の中心であつたとは思へない。後宇多法皇の崩御を悼み奉つての發心とも傳へられる。併しさうならば、もう少し歌集なり徒然草なりにその心持が鮮かに出てゐさうにも考へられる。誘因は勿論あらう。或は一二にして止まらないかも知れない。併し彼に遁世を決定させたものは、環境よりも寧ろ彼自身の人生乃至人間といふものに對する、或はもつと直接に自分といふものについての主觀的な疑惑にありはしなかつたらうか。彼の人生煩悶は畢竟すべての人間に通有したところのそれである。併し彼にとつて、何よりもそれが最大の最上のそして最急務の煩悶のやうに見える。此の問題に對して彼は常に最も眞劍である。考へまいとしてもいつも考へずには居れない、轉換させることすら出來ない。時々ふつと忘れてゐることはある。紛れてゐることはある。他の事に注意が偶然に向けられることはある。そしてそれを暫く娛しんでゐることはある。併しすぐ又あの煩悶がかへつて來る。考へ出す暇のないやうな活動的な仕事は爲ようとしても出來ない。誰か訪ねて來てくれたらと願ふ。來るとうるさい。去ると淋しい。獨りで居たい。やつと心からの氣安さを覺える。併し益淋しい。そして却つて今度は自分がうるさくなる。自分の心が自分をぢつと看透す。恐ろしいやうな不安なやうな悲しいやうな氣持になる。ぢつとして居れなくなる。併しどうにも出來ない。體も心も縛られたやうになつてしまふ。焦る、愈苦しくなる。どうでもなれと思ふ。ふつといゝ氣持になる。惱み

が何處へか消えてしまふ。急に晴々した子供らしい無邪氣さになる。わけなく嬉しくなる。さつきの自分を笑ひたくなる。のんきなあそびの氣分さへ交つて來る。書見でもしたくなる。繙く。面白い。いつか引き入れられてしまふ。ふと中の文句が氣がかりになる。何だか心が昏くなる。急にむしやくしやして來る。わけなく罵倒したくなる。又急に馬鹿々々しくなる。目まぐるしい氣分の變り方、少しも一定の自意識におちついてゐる時がない。「心にうつりゆくよしなしごと」に日ぐらし思ひ耽りながら「そこはかとなく書きつゞけては「あやしうこそものぐるほし」い昂奮を感じた徒然草の筆者の隱棲生活の日々に、かうした時間の繰返しはなかつたらうか。もとよりさうした時間にそのまゝの自分をすぐに書き寫すことはなか〳〵苦しい事である。書ける時も無論ある。併し苦をばそのまゝ書きたい心持と共に、又書きたくない心持も却つて激しいものである筈だ。徒然草を開いて讀みながら、時々私はかういつた事を考へる。

彼は常に現世の苦から遁れよう〳〵と焦つてゐるやうに見える。少くとも惱みの始まつた頃はさうである。否悟つたらしい後でもさうである。それでゐて死を非常に恐れてゐるやうである。彼は所謂「無下に衰へ行く」「今やう」の「末の世」の當代を口を極めて冷罵してゐる。其の當代から離脱しようとする希求が、時間的には尙古懷想主義乃至風雅故實趣味となり（十三段・十四段・二十二段・二十三段・二十九段等）、空間的には山林隱棲生活乃至閑寂孤獨主義となつた（五十八段・五十九段・七十五段等）と解せられるが、其處には、老莊の誘導も、佛典の敎示も、物のあはれの平安朝趣味も、王代政治の衰滅を慨く心も、下剋上の時世に對する憤懣も、或は其の他にもいろ〳〵の有力な素因、外因はあらう。けれども

人と生れたらんしるしには、いかにもして世をのがれむことこそあらまほしけれ。（五十八段）

人生の最大意義を此處に置かうとしてゐる彼は、少くとも現世に社會人としての活動を、闘生を好まなかつた事だけは――好まなくなつた事だけは確かであるが、それは實生活上に大きい不滿があるといふ爲でもなければ、眞に信仰を求めたい動機からといふのでもないやうである。たゞ世の中が、環境が、うるさいといふ感じで、つまらないといふ感じで自分をつゝみまはしてゐる、何だか此のいやな現世に生きてゐるその事が苦であり無意義であるやうに感じられるといふ心持が一番强くはたらいてゐるやうに思はれるのである。

ともすれば鳰の浮巢のうきながらみかくれはてぬよを歎くかな

いかにしてなぐさむものぞ世の中をそむかですぐす人にとはばや
住めば又うき世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな
なにとかくあまの捨船すてながらうき世を渡る我が身なるらん
かくしつゝいつを限りとしらま弓おきふしすぐす月日なるらん
うきこともしばしばかりの世の中をいく程いとふ我が身なるらん（兼好集）

たゞ煩はしい世を遁れさへすればよい。遁れてどうするといふよりも、先づたゞ遁れたい。遁れずにをれば、苦しくて惱ましくて厭はしくてどうにも仕様がないのである。遁れても遁れきれない氣がする。一寸でも安らかな氣持になりたい。それだけでもよい。

いまだ誠の道をしらずとも、緣をはなれて身を閑にし、事にあづからずして心をやすくせんこそ、しばらくたのしぶともいひつべけれ。（七十五段）

環境ばかりではない。自分自身のいろんな相をした無限の欲求には一層激甚に煩はされ惱まされる。

如幻の生の中に何事をかなさん。すべて所願皆妄想なり。所願心に來らば妄心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直に萬事を放下して道にむかふ時、さはりなく所作なくて、心身ながくしづかなり。（二百四十二段）

多少禁欲の教理の祖述といつた意味はあらうが、やはり彼の體驗から得た信條でもあらう。そして所願といふのは、簡易に殆ど反射的に直接行爲にあらはれるやうな小さな欲求である場合は無論少くて、主として空想上に湧出して來るさま〳〵なそして恐らく現在の自分には實現の望まれ得ない欲求か、又は望んではならない欲求をいふのであらう。そしてこの「所願心に來」るといふのは惟ふに平靜な心的狀態ではなくて、沈鬱若しくは昂奮した氣持の時か、或は冥想してゐる間の時を主に意味してゐるのだと考へたい。でなければ「妄心迷亂」「心身ながくしづか」或は「直に萬事を放下して」といふ語句が單なる文飾になり過ぎるからである。誇張はある。が實感が根柢に在ることも否まれない。かうした大げさな無上命令が、さうした妄想の消散には屢〻最も適切な暗示となるからである。そしてそれを知つてゐるだけ體感の根據があると考へたい。そして又此の言ひ方にも兼好らしい姿を見出すやうに思ふ。

かくて彼は木曾路に遁れ、修學院に籠り、横川に住み、雙が岡に世を避けたりした。併し「人に知られじと思ふ頃、ふるさと人の横川までたづね來て、世の中の事どもいふいとうるさし」（兼好集詞書）と言ふ〳〵「されど歸りぬるあとはいとさらく〳〵し」（同）と、訪はれぬよりも訪ふ人の歸りて後（註）のさびしさに愈〻堪へられないのである。そして

いかなる折にか戀しき時もあり
あらしふくみ山のいほの夕暮を故郷人は來てもとはなん（兼好集）

そのうるさい故郷人をばたまらなく戀しがるのである。何故だか、どういふ時だか自分にもわからない。遁れたくて遁れきれない心、遁れて遁れないでゐたい心、遁れないで遁れてゐたい心、つれ〴〵でありたくてつれ〴〵に堪へ得ない心、つれ〴〵でなくてつれ〴〵を味ひたい心、こんな自分にもわからぬ、そしてどうすることも出來ぬ無理な、併し何だか叶ひさうな氣がする望み、それが又、それを空想してみることが、彼の惱ましい樂しみであるやうに思はれる。「配所の月罪なくて見ん」（五段）幻想に顯基中納言と鳴感する心持もそれである。

歌集に「とにかくに思ふことのみあれば」といふ詞書が見え、又

さだめ難く思ひ亂るゝ事の多きを
あらましもきのふにけふは變る哉思ひ定めぬ世にし住まへば

とあるなどは、かなり激しい悶苦の發つて來た初期の頃の作らしく考へられるが、其の後漸く時が經過して、悶苦に稍慣れて來た、そして又悶苦も稍鈍くなつて來たかも知れない後も、例の「不定と心得ぬるのみまことにて違はず」「所願皆妄想なり」の悟りを攫み得た後と雖も、恐らくは屢、又迷ひ又思ひ亂れた瞬間が決して少くなかつたらうと思ふ。かの悟りを知りぬいてゐながら、或は考へてもゐながら、念じつゞけてもゐながら、やつぱりどうすることも出來なくなる時がきつとあつた人と思ふ。時にはその悟りなどはすつかり忘れてしまつて苦しんでは、その苦の薄らいで來る〳〵、急に元氣とかの悟りとがむく〳〵と忘却の中から勇ましく取りかへされた時は無かつたらうか。

稍落ちついた時、彼は風流を娯しむ、さもなければ、まじめに道の事を考へる。そして一かど悟つたやうな事を言ふ。さうして安心する。すが〳〵しい氣持になる。そのそばからぶつと死の恐怖に襲はれてをのゝく。彼は今にも死が迫るやうな事を言つておびえる。今まで生きてゐるのが不思議だといふ（百三十七段）。靜かな深山に隱れても「無常のかたきぎほひ來る」（同段）。「其の死にのぞめる事、軍の陣に進めるに同じ」（同段）と覺悟の臍を固めてゐる。それどころでない、死は前から來ない、後から不意討をくはせる「かねてうしろにせまれり」（百五十五段）と言ふ。比喩などは通り越してゐる。眞劍である。だから、餘りにこの世のかりそめな事を思うて、靜かについゐる事だになくて、始終うづくまつてばかりゐた心戒といふ聖（四十九段）が、むしやうに、そし

てよそ事でなく興味深く彼に感じられたのである。

世を遁れる事が人世の最大意義であるといふ。そして世を遁れるとは、俗縁を離脱して所願を放下するのである。かうして世を遁れるのは何の爲か、遁れて何をしようといふのか。それは、道を修ぜんが爲である。後世を願はうとてである。「死期はついでを待たず」(百五十五段)老死の「來る事速にして、念々の間にとどまらず」(七十四段)たゞ人はその近づくことを忘れてゐる(九十三段)。病みて悔い、死に臨んで悔いても及ばぬ(四十九段・二百四十二段)、萬事を棄てて一念發起せよと訓へる(五十九段、二百四十二段)。然らばその「一大事の因緣」(百八十八段)とは何であるか、「まことの大事」(百七十四段)とは何であるか、「小を棄て大につき」(百八十八段)「萬事を放下し」て向へといふ「道」とは何をいふのか。それは儒・老の道にも亙つてゐるやうな漠然たるものではあるが主として勿論「佛の道」を意味してはゐる。併しその佛の道、これほど大騷ぎして人間の一大事と願ひ求める道そのものについての、はつきりした觀念はつくり上げられてゐるのではないやうである。又攫まうとはしてゐないやうに見える。只、それに思を專らにして向ひさへすれば、何とかして救はれるであらうことを信じたい心だけ一ぱいであるやうである。法然上人の尊い敎の數々に感銘してゐる徒然草の一節(三十九段)にみても、その感動して引いてゐる上人のことばが、そのまゝ兼好の心持であるやうな氣がする。もとより道の本體は說明の出來ない、又說明すべきではないのであらうけれど、「空よりや降りけん、土よりやわきけん」(二百四十四段)といふと同じところに、索考を止めておきたいのではなかつたか。それ以上考へることは怖ろしいことではなかつたのであらうか。彼が「心にあひて覺えし事ども」として、一言芳談の語を借りて自らを得心せさようとしてゐるところのものは、

佛道をねがふといふは別のことなし。いとまある身になりて世のことを心にかけぬを第一の道とす。(九十八段)

といふのである。佛道の要義は遁世に在りとなす。竟に循環論法である。そして恐らくこれが兼好の低徊してゐた哲學思索の軌道であつたのではなからうか。

かうした處に止まつてゐる彼にも同感の出來ないことはない。けれどもそれよりも、此のやうな閑かな遁世意識の反面に、時折激しく動き立つて來る悶苦の發作に伴ふすてばち的な絶叫が、冷語が、却つて痛ましく胸をうつものがある。飛鳥川の淵瀨常ならぬ世に、人間が地上に築き上げた榮華の殿堂ほど脆いものはない。

さればよろづに見ざらん世までを思ひおきてんこそはかなかるべけれ。(二十五段)

すべては空に歸する幻の人生に、子孫の代の事まで考へるほど愚かな事はない。死が迫つてゐる身にどうして何の計畫が立てられよう。（百八段）

身をやしなひて何事をか待つ。期するところたゞ老と死とにあり。（七十四段）

榮光の徑唯到る處は墓墳のみ。しかも無常迅速、是を待つ間何のたのしみかあらん」（同段）。かく沈欝した想念は、此の重苦しい惱みに堪へきれなくなつた時、忽ち恐ろしいことばを口走る。「命は人を待つものかは」。水火の責めるより速かに來り捕へる不可抗の死、

其の時老いたる親、いときなき子、君の恩、人の情、捨て難しとて捨てざらんや。（五十九段）

彼の好きな「物のあはれ」は影も見せず、唯冷い理性のみが自身を快く嘲る。個人主義と片附けてしまふには、悶苦が深過ぎる。餘裕が無さ過ぎる。

げには此の世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はんに、何の興ありてか朝夕君に仕へ、家をかへりみるいとなみのいさましからん。（五十八段）

人間苦の激しい人でなければ言へない思ひきつたことばではないか。

日暮途遠し。吾生既に蹉跎たり。諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ。禮義をも思はじ。此の心をも得ざらん人は、物ぐるひともいへ。うつゝなし、情なしとも思へ。そしるとも苦しまじ。譽むとも聽き入れじ。（百十二段）

狂暴に近い昂奮である。熱した冷やかさである。切實な痛苦懊惱の底から吐き出された心の響音である。一片の說法的辭令やひとりよがりの漫言と混視することは出來ない。

つまり兼好の惱みは、あらゆる人間の經驗せねばならぬ大きな惱みなのである。そしてそれ以外の何でもない。けれどもその惱みを始終いつまでも惱みつゞけ消極思想を終に打開して、闘生に若しくはより高き哲學に藝術に向はうとしなかつたところに、時代思潮の洗禮と先天的素性との他に、彼の健康狀態を想像してみることによつて、一層うなづけるふしがあるのではないかといふ氣がするのである。

彼の神經はかなり苛ついてゐるやうである。無論始終さうだといふのではない。平靜な時も屢〻ある。併し環境を頻りに氣にするのは、感覺が餘程尖敏になつてをり、感情が餘程動搖し易く、意志が少からず强さを失つてゐるからであるに違ひない。又徒然草を通して觀る時、彼は統一した自己を長く保ちつゞける事が不可能なやうである。分裂した思想と言ふのは當るまい。統一されないまゝの斷想、自我の生活斷片の斷えざる流續、次から次へと新しい題目と變つた心持とへ移つて行く――時には略〻相似た內容と過程との繰返しのやうな事もあるが――、展開へと言ふよりは

流移と言ふべき思索形態に於ての――併しそれは一の常に變らぬ彼の鑑賞的な氣分といふものによつて連結せられてゐる。――自己觀照の隨時の表現、それを彼の隨筆文學徒然草に看るのである。その徒然草の中に於ける彼の思想の矛盾、主張の撞著として屢〻指摘せられるやうな諸項についても、之を人生そのものが矛盾であり表裏であるといふ立場、或は彼の理性の上の意見と趣味の側からの立論とに分けて考へようとする立場や、それらを外にして――そしてそれらに通ずるのでもあるが――彼の斷想的生活、それはさまざまの相であらはれるが、そのあらはれた相としては刹那的に彼にとつて常に眞であり、瞬間的には僞らざる感じであつて、その際他の立場を考へる餘裕は殆ど無いのである、と考へたい彼の人格解釋から、無理でなく容認されるやうに感ぜられる。そして其の矛盾といふ程度も、決して絶對ではないのである。寧ろ極めて自然で且ほんたうであると言つてもよいであらう。

以上觀察して來た兼好の心的生活記錄の中から抽出し得られる心理的感覺的な特異の自覺狀態と認めらるべき諸相として、煩悶・悲觀・陰鬱・恐怖(死に對して特に)・焦燥・悔恨・感傷・緊張・昂奮・我儘・矛盾・錯覺・妄想・神經過敏・意志薄弱・現實逃避・來世の欣求・神佛への依縋・生活の不統一・非持續性と列擧して來ると、そして之を假に刀圭家氏に示して紙上診斷を乞ふならば、肉體的症候の材料に缺くるところはあつても、以上の諸症狀が具備してゐては、先づ躊躇なく神經衰弱症といふ立派な折紙を附けられるであらうことを疑はぬ。彼が夜を好んだのも平安朝趣味であると共に、亦それが彼の生理的生存狀況におのづから合致してゐた筈でもある。家庭生活を厭ひ、妻子の愛を知りながら之を希はぬのも、彼の隱遁思想が生理的にも亦健康人の營む平俗生活に適應し得ぬが爲でもあつたのではなかつたか。

かくいへばとて彼を侮辱しようとしてゐるのではない。それにもかゝはらず、書いてゐる私自身にも一種の可笑しみと或不快さとを感ぜずにをれない。それは恐らく、神經衰弱といふことばにしみこまされてある侮蔑的非活動的な語感の爲であると思ふ。私は神經衰弱といふことばは嫌ひである。そして妥當だとは思はない。醫學上の術語としてやがて改められるべき語の一つであることを信ずる。さればとて、神經質の一狀態と呼ぶのでは亦漠然過ぎる。やはり病的狀態である以上、或便宜的な名目が立てられても差支ないと思ふ。(さういつた病的名稱を除去することが、患者に對して或暗示として治療上の實際効果があるであらう意味の他は)。それについて卑見を述べるのも一興かも知れぬが、素人醫學は先づ控へよう。仕方がない、

通用した神經衰弱といふ語を使つておくことにする。たゞ神經衰弱といふ術語は新しいが、病そのものはドクトル、ベ氏とかによつてアメリカから紹介せられた新しい文明病であるといふには、同意出來かねる事だけを附言したい。そして所謂神經衰弱症であることが、或は神經衰弱的人間であることが、兼好にとつて何等嘲笑せらるべき理由とならないばかりか、さうであるが故に、彼の表現が眞實であり、痛切であり、端的である――同時に矛盾もあり、虛僞らしく見えることもあり得るが――ことが屢、あることを言へば足りる。さう觀ることによつて、彼を理解する上に一つの新しい參考の立場が、極めて自然に且合理的に與へられることになりはしないかといふことを言へば足りる。何となれば、所謂神經衰弱症は、決して常人の思惟するやうに、しかく不まじめな病ではないからである。當人にとつては、決して遊惰、虛僞どころではない、苦痛そのものの連續である。緊張しきつた餘裕のない心身の生活である。餘所事などにしてをれないのである。しようとしても出來ないのである。生そのものが、まことに「一大事」である事が痛感せられる病であるからである。それが外觀的には如何にも怠惰で、無責任で、我儘で、意氣地無しで、苦勞性で、感情家で、どうにも仕末に困るのが一般であることが、一層損の卦なのである。此の病を經驗した、この無い人には全く想像もつかない、又かゝつたことのある人でも、癒つた後にはすつかり忘れてしまふ、全然主觀的な厄介な病氣であることは此處で申すまでもなからう。少くとも或人の說の如く、器質的疾患ならざるが故に、「假病」なりといふやうな見解論斷は、全然普通健康人の心理からの類推で、最も非科學的非醫學的非人間的非人道的であると言つてよい。これも暗示として多少の効果を擧げる爲にでも用ゐられるのでなければ、上の意味での此のことばは、やはり早晩醫書の中から、或は醫療界から抹殺せらるべき必然の理由をそれ自體の內に藏してゐるものであることを信じて疑はぬ。

そこで本題に返らう。私は以上考察して來ただけの事由で彼を無理に病者にしてしまはうとは思はぬ。前に述べたやうな彼の思想言動は、健康な神經質の哲人や詩人型の人にもありがちな性狀であるからである。(尤もそれらの人々も立派な健康の保持者であるとは斷言せられ得ない場合が恐らく多かりさうに思ふのであり、又年齡にも關係しようが)。併し私には、彼はどうも健康人であつたと考へることが許されないのである。

先づ歌集の中に

八月十五日夜報恩寺にて人々あまた歌よむよし聞き侍りしを、わづらふこと有りてえまからで申しつかはし侍りし

三月ばかりつれ〴〵とこもりゐたる頃雨の降るを
なげく事ある頃心地そこなひて籠り侍りしを新中納言程經て訪らひ給ふとて

など詞書した歌が見える。これも彼の健康を考へる上の參考にはなるが、これ位なら普通の人にしても珍しくない。且、病といつても、これでは(特に後二つは)精神的の側が勝つてをり、病と言へば言へるといふ程度の材料に過ぎないやうな感があるが、併し一面、それだけ所謂神經衰弱症であることの假定と背反する距離が縮少されることにはならないだらうか。

徒然草に

めなもみといふ草あり。くちばみにさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなん。見知りておくべし。(九十六段)

といふ一節がある。又

四十以後の人、身に灸をくはへて、三里をやかざれば上氣の事あり。必ず灸すべし。(百四十八段)

と記したところもある。これらはいつ頃書かれたかは知り難いけれども、先づ老境に入りかけた頃のものとすれば、老人共通の備忘心理、特に後のものは其の前段、灸の習俗に關しての故實癖の餘筆と見てもよいのであるが、少くとも彼がかういふ事に無頓著であり得ないことを語つてはゐる。が、それは先づよい。「人の才能」は聖教の學第一、書道第二として、第三に醫術を數へ、弓馬の武術、調味、工藝を次々に擧げ、此の外の多能は君子の恥と述べ、特に、醫術の習得を說いて、

身を養ひ人をたすけ、忠孝のつとめも醫にあらずば有るべからず。(百二十二段)

と言ひ、

文武醫の道まことに缺けてはあるべからず。これを學ばんをばいたづらなる人といふべからず。(同段)

と、「文武醫」と三つを竝べたのはどうであらうか。漢學思想の攙入してゐるのは確である。が、此の習術の順序、輕重は兼好の考へ方であると思ふ。

「友とするにわろき者七」を數へて、「よき友三あり」と擧げてゐる益友は、「一には物くる友」といふ飄逸の氣に滿ちたものであるが、「三には智慧ある友」の上に「二にはくす師」とおいたのはどうであらうか。其の七損友の「三には病なく身つよき人」と嫌つたのはどうであらうか。(百十七段)

舶來品無用論者の彼が、唯一つ、藥だけは輸入を許してゐるのはどうであらうか。(百二十段)

衣食住を「人間の大事此の三に過ぎず」と云つた次に、

飢ゑず寒からず風雨におかされずして閑に過すを樂とす。たゞし人皆病あり。病におかされぬれば、其の愁しのびがたし。醫療を忘るべからず。藥を加へて四の事求め得ざるを貧しとす。此の四缺けざるを富めりとす。此四の外を求めいとなむを驕とす。四の事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。（百二十三段）

と論じてゐるのはどうであらうか。常人ならば、衣食住三についてだけ考へるのが一般であるのに、「藥を加へて四の事」と言ふのは如何に彼が平生自身の健康に煩はされてゐたかがわかる。何としても健康人の心理ではない。「其の愁しのびがたしと」は恐らく彼の實感であらう。

かく、病・藥・醫術に特に眞劍になつてゐるのは、養生訓に於ける益軒と同樣、自分のからだの事に無關心でをれない何よりの證左ではあるまいか。が彼は始終臥床してゐるといふほどの大病人では無論ないと思はれる。畢竟漂浪者であり（歌集にも其の記錄を留めてゐる。）遁世者であり、非活動人である。而も自らの羸弱であることは自覺してゐるやうであるが、自分の言動が病的であることの意識は必ずしもないらしい。これが又神經衰弱症の或は精神的疾患の一特徴である場合もあるやうにも聞いてゐる。そして少しの病苦でも、實際以上に大げさに感ずる、此の誇張した錯感も亦此の病氣の特色である。更に兼好が

病をうくることも、多くは心より受く。外より來る病は少なし。藥を飲みて汗をもとむるには、しるしなき事あれども、一旦はぢ恐るゝ事あれば、必ず汗を流すは、心のしわざなりといふ事を知るべし。（百二十九段）

と、「身をやぶるよりも、心をいたましむるは、人をそこなふ事なほ甚だし」いのを恐れ戒めてゐるのも、普遍的通俗的な考でもあるが、器質的の疾よりは精神的、神經的の疾に罹り易い體質の所有者であつたらう想像をも助ける。又彼が多少豫感的、靈覺的の素質らしいものを持つてゐたやうにも考へられるのは、七十一段の一節を讀む時にも想ひ浮ぶのである。

私の想像では、彼の思想言動に觀て彼は胃腸の健全な人とは思へない。もし彼が病者であるとすれば、現代醫學の敎へるところに隨へば、消化器疾患による神經衰弱症といふところが先づ相當であるやうな氣がする。さう思ふ時、芭蕉の胃の弱かつたことや、夜通し何かで弟子を怒りつゞけたことや、西行が無邪氣に慕ひ寄る四歲の愛娘を荒らかに緣から下へ蹴落したと傳へられる話などが想出されて來る。併し今は兼好の事だけ考へるつもりであつた。そして繰返して言ふ。かういふ想像を加へることが、彼、或は彼等の作品や、思想やの藝術的哲學的價値を毫も損ずる所以で

はない事は勿論でなければならない。

最後に言はねばならない事が殘つてゐる。それは、徒然草は決して病的文學といふ語で、全部を蔽はるべきではないといふ事である。健全な文字が澤山にあり、健全な思想、否健康人と同じ心理、同じ思想、同じ教訓、同じ鑑賞を隨處に見出す事は改めてことわるまでもない。病的な心持とさうでない心持との交錯、それを私は徒然草に見る。丁度それは、つれ〴〵の氣持と、つれ〴〵に堪へ得ない氣持とが交錯しながら全篇を流れてゐるのと似てもをり、又それにかなり關聯をもつものと言つてもよいかと思ふ。

註　山里は訪はれぬよりも訪ふ人の歸りて後ぞさびしかりける（兼好集）

兼好と元可

兼好が高師直の爲に鹽谷判官の妻への艶書を代筆したといふ事實の眞僞は明らかでないが、太平記（卷二二、鹽冶判官讒死事）に載せて頗る有名である。忠臣藏の殿中にまでこれが持ちこまれて、伯州の城主、御蔭で飛んだ恥まで搔かされねばならなかつた。太平記の方では又、折角の御用が勤まらなかつた忿りの餘り、「物の用に立たぬものは手書なりけり」と、武藏守に不思議な發見をさせ、その代りに「返すさへ」の歌を書いてくれたり、女からの「小夜ごろも」の謎を、新古今十戒の歌と判じて解說の勞を取つてくれたりした藥師寺が對照せられて、

兼好が不祥公義が高選榮枯一時に地を易へたり。

と雙が岡の法師、希代の面目を潰されてしまつた。だから「信に一生の過錯」と、林春德に慨惜せられ（本朝遯史）てゐるのである。

所謂「兼好といひける能書の遁世者」に對する太平記の所述が徒然草を通して觀る哲人とは、何處かに一致しないやうなものを感じさせるところから、この事件を事實

として肯定する人々でも、「其不拘也如此」と辯護しようとする深草の元政（扶桑隠逸傳）や、進んでは師直の不義を好餌として、足利氏の内紛に口火をつけ、南朝方に有利ならしめようとした謀慮に出たとする土肥經平（春湊浪話）――これは業平の好色を勤王に基づく藤氏攪亂策の手段と目する見と類をなす、謂はば最眉の引倒し論に近いものであらう。――の如きをまで出したのは一面理解の出來るところであり、本朝遯史の讀耕子も、同じく兼好を敬愛すればこそであるが、徒然草抄の盤齋に至つては「色好まざらん云々」を理據として、却つて兼好の此の行爲を是認しようとすらしてゐる。又この事件卽ち太平記の記事そのものに疑をかけて否定的態度に出ようとする人々もある。そしてそれは主に太平記の史料價値が論議せられて、傳說的及び假作的要素がかなり含まれてゐると考へられて來るやうになつた明治以後に屬すると言つてよいが、中でも徒然草講話の瓊音氏などは、或は艶書の代筆ぐらゐしかねない人間だが、人妻への色文を代筆してやるほど墮落した心持の人では斷じて無いと辯じて雪冤に努めて居られる。これは併し純情で理想家で且道義心の强烈な評者の觀察として、又一部自己解剖の投影として頗る微笑を誘ふものがある。更に和歌百話の佐佐木信綱博士は元可法師の家集が紹介せられたので始めて兼好の冤が雪がれたとして居られる。これが實正ならば、この問題は全然解消して、徒然草作者の名譽恢復が立派に出來た事になるのであるけれども、奈何せむ、猶濡れ衣は干されてゐないばかりか、この集あるが爲に、却つて疑惑を濃厚にさせるものが加はつたことを否み得ないのである。

元可法師集は、群書類從（卷二七〇、和歌部一二五）にも收められて、而も兼好法師集（卷二六九）の次にあるのが面白い。この集の「戀」の部に例の問題の歌が次の詞書が添うて出てゐるのである。

或人たびたび文を遣はしけれども、空しくもとの文のみ返し侍りける女の許へ、
又文を遣るとて、歌よめと申し侍りしに、
返すさへ手やふれけむと思ふにぞ我が文ながらうちも置かれず

これは初め侍從といふ女房を媒として言ひ送り、次に兼好に筆を執らせて「言を盡くして聞えた」その結果が、

返事遲しと待つところに、使歸り來て、御文をば手に取りながらあけてだに見給はず、庭に捨てられたるを、人目にかけじと懷に入れ歸り參つて候ひぬ。

といふ太平記の本文と、餘りにも符合する。歌は無論一句も違はない。さてその「返すさへ」の歌を詠んだ人物を太平記では、

薬師寺次郎左衞門公義所用の事あつて、師直を訪ねたと記してゐる。忠臣藏の判官切腹の場では我むしやらの赤つ面、性急低能の憎まれ役も、師直の眼からは救世の菩薩、太平記を通してその評言を聽けば、

嗚呼御邊は弓箭の道のみならず、歌道にさへ無雙の達者也けり。

とある。但しこの讃辭は、誇張は割引せられねばならぬとしても、必ずしも師直が御座なりといふだけに終らせなくてもいゝものらしく思はれる。即ち太平記に從へば、弓箭の方では崩れ行く味方の二萬餘騎が中に手勢二百五十餘を以て十六度まで返し合せて奮戰した打出・御影の濱の猛勇（卷二九、小清水合戰事）、大將三戸七郎が俄の狂死に色を失つた宇都宮勢を、禍福糾纏と說いて激勵し、那和庄の戰に桃井勢を潰走させた機智勇略（卷三〇、薩埵山合戰事）等特筆に値するもの、又歌道の方では、

取れば憂し取らねば人の數ならず捨つべきものは弓矢なりけり
高野山憂世の夢も覺めぬべしその曉をまつのあらしに

等の詠も見え、而もそれは卷二九「師直・師泰出家事附薬師寺遁世事」の章に載せ、執事兄弟の不甲斐無さに慨歎して、豎子與に謀るに堪へずと、薙髮した際のが前の歌、そして高野へ登つて幽隱を娛んだ折の詠が後の一首であるが、太平記作者はこれを木曾義仲を忠諫して自刄した越後中太には「無下に劣りてぞ覺えたる」と難じてゐる。但し入道後又山を下つて再び捨てた弓矢を拾ひ上げたことは、前記那和庄合戰の事實があるのでも知れる。

ところで薬師寺公義である。右の如く和歌も詠めるし、且出家もしてゐる人物である。とすると先に比較した元可法師集の歌並びに詞書と太平記との關係が、何となく親近さを感ぜしめられて來る。否推測までもないのである。太平記に於て既に「薬師寺次郎左衞門入道元可」（卷三〇、薩埵山合戰事）、「薬師寺入道元可兄弟」（同）と明記せられてゐる。同時に「返すさへ」の歌の他、高野山での詠も、

高野に住み侍りし比、奥院に通夜し侍りし時思ひつゞけ侍りける
高野山うき世の夢も覺めぬべしその曉を松のあらし（「脆弊」に）

と、やはり元可法師集「雜」の部に出てゐるのである。同じ「雜」に、

世を遁れて高野に住み侍りける比、同じ時に遁世して都に住み侍りし人の許より
世を捨つる同じ身ながら住む山の深きや深き心なるらむ
と申しおこせて侍りける返し
いとへたゞうき世を厭ふ心だに深くばふかき山ならずとも

といふ贈答もある。そして「取れば憂し」の歌だけは類從本乃至屋代弘賢本には見え

ないけれども他の歌の詞書に徵すると「南方退治發向の時、天王寺にて人々題を探りて歌よみける時」といふのがある一方には、兼好等と共に當代和歌四天王の一に數へられ、且兼好とも親しかつた「淨辨法印」との交渉もあつたことが明瞭である。然らば藥師寺次郎左衞門橘公義が卽ち元可法師の俗名であり前身であることは確としてよいかと思はれる。(註一)

そしてさうなると、太平記の記事が少くとも藥師寺公義の元可に關する限り、全然の根無しごとで無いといふ推斷が可能になる結果を招來するのではあるまいか。

そして又それが

女に遣はさむとて人のよませし。

知らせばや木の葉がくれの埋れ水したに流れて絕えぬ心を
逢はむといひながらさもあらざりける人に遣はしける人に代りて
賴め置く言の葉なくば逢はぬまに變る心を歎かざらまし

とある兼好法師自筆の家集の二首と結びつけて考へられる時、又師直と兼好との關係に思ひ及ぶ時、或程度の太平記作者の弄筆潤色はもとより想像に難くはないとして、或は又何等かの訛傳による迷惑な改裝であつたとしても、かの鹽谷判官讒死に絡まる一挿話が、あり得べからざる夢物語と無條件に笑殺されることが幾分沮まれるといふ歸結が導き出されて來さうにもなる。少くとも兼好の濡れ衣はそのまゝで、問題は又元へ復された事になるやうに思はれる。

だからとて併し、太平記のかの記事が積極的に支持せられねばならぬ程の他の確實な旁證が提示せられぬ限り、あのまゝが絕對信憑の置ける資料として直に兼好傳に採入れられねばならぬといふ事になるといふのでは又無論ない。要するに一箇の傳說的資料としての參考を、そして史傳價値についての再檢討を、かの笑止千萬な話譚が今後も猶要請するであらうといふだけである。そして又兼好といふ人物が徒然草を通して眺められる限り、あの豐かに深い隱士の內生活記錄は、これに反感を持つ人なら知らず、これまで多くの禮讃者や同情ある鑑賞家達に於てさうであつた如くに、それが同樣の兼好宗の人々の胸裡に描き出す哲人の小照を、恐らくこの不確實な一笑話によつて傷け歪めさせることから、不思議に救ひ出し、或は任俠的に斥否させるであらうことも疑ないであらう。

註一　正徹物語にも「藥師寺元可入道歌に」として、三首の詠が出てゐる。(但し三首共、類從本の元可法師集には見えない。)

二　兼好が師直邸に出入してゐた事は、洞院公賢の園太曆(貞和四年十二月二十六日)に、師直著用の

狩衣に就いて、その使として公賢邸に相談に來た由の記事が見えるのでも、明らかに立證せられる。

枕草子と清少納言

一

一條天皇の御治世、それは國史の上では所謂平安時代の中期で、今から約九百二三十年前に當ります。これを政治史の上から觀ますれば、卽ち藤原氏の全盛時代特に御堂關白道長の權勢が漸く昇天の有樣を示して來た時でありますが、我が文藝史、特に國文學史の上から觀まして、亦實に特筆せらるべき時期であります。そして我が國文學史を通じて最も女流作家の活躍してゐる時代であります。卽ち源氏物語の生れたのも、枕草子の書かれたのも、多くのすぐれた女流日記文學の殘されたのも、この時代であります。紫式部・清少納言・和泉式部・赤染衞門・伊勢大輔・馬內侍・小式部內侍など數へ擧げられる宮廷才媛達は、いづれもこの一條天皇時代前後の人々であります。更に概括的に言ふならば、國文學が詩から物語へと展開して行つた時代、そしてその達成期であり、我が國抒情文學の精華を成して、奈良時代に引續く燦たる時代であります。

その一條天皇の皇后定子と申上げる御方は、今申した御堂關白とうたはれた道長の兄であつた中の關白藤原道隆の御女であり、それから後に道長の御女彰子と申す御方が入内せられ、女御から中宮にそなはり、後に院號を御受けになつて上東門院と申上げました。源氏物語の作者紫式部はこの上東門院に宮仕をした人でありました。そして今申述べようとする枕草子の作者清少納言は、實に右に申しました皇后定子と申上げる御方に宮仕して御寵遇をうけてゐた人で、式部よりは年齢の上でも亦宮中生活に於ても、幾分先輩であつたらしく思はれます。

ところで、その清少納言が御宮仕してゐた一條天皇の皇后宮が、或雪の日に、格子を下してみんなが火鉢を圍んで四方山の話などしてゐると、不意に「少納言よ、香爐峯の雪はいかならん」と仰せられたところが、少納言は畏り立つて、格子を上げさせ、御簾を高く卷き上げたので、皇后宮は御笑になつて、少納言は御感にあづかつたといふ逸話は、恐らく皆様の多くの方はとくに御存じの話であると思ひます。解說致すまでもなく、かの支那の唐の詩人白樂天の「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看」といふ詩の句の意であります。この少納言の學問と機智とを傳へる右の逸事は、今日では殆ど知らぬ人はない位に有名な話となつてをります。雪景色を前に簾を捲上げてゐる十二單、緋の袴といつた女官の繪でもあると、すぐにそれとわかるといつた程になつて來てゐるのでありますが、こゝに甚だ面白い事は、德川時代までは無學の一般人の間に、それが紫式部の事として訛傳せられてゐたといふ一事であります。江戸時代の傳說研究書として最も主なものの一であるものに、廣益俗說辨といふ本があります。著者は井澤長秀と申し、その觀方、說話の解釋、研究の目的及び方法等に於て、無論贊成しかねる點が多々ありますけれども兎も角も今日の傳說學に基礎を與へる上に又、國民傳說の材料を出來るだけ蒐集して、之に說明を加へようとした點で注目せらるべき、又少からざる貢獻を致したものとして認められねばならぬものであります。書名の示すやうに、その企圖するところは、主として、民衆の爲にその俗說の誤れるを正さうとしたのにありますが、この本の正編卷十四「婦女」といふ項に、紫式部樂天が香爐峯の詩の意にてすだれをあぐる說」と題して、

俗說云、一條院の御とき、ある日雪ふりけるに、紫式部に、香爐峯の雪はいかにとありければ式部すゝみよりてすだれをまきあげたりといふ。

と記して、かく所謂俗說では紫式部の事として傳へられてゐるけれども、今按ずるに、それは清少納言の誤りであるとして、枕草子の中に清少自ら記してゐる文を引いて、

辨じて居ります。同時代の平安宮廷女流中の二大才媛、しかも源氏物語と枕草子といふ平安朝文學の雙璧ともいふべき作品を殘した紫・清の兩女に關して、その逸話が混同せられて來たのも、有り得べきことで、決して不思議はないのでありますが、

人々も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人には、さるべきなンめりといふ。（枕草子）

と自讃して書きつけた清少の得意も、これでは全く式部に株を奪はれた形で、少々氣の毒な感じが致します。

皇后宮と中宮との表面上の對立、道隆派と道長派との裏面の對立、その下に兩人は又他の才女達の中にあつて、或は、一時特に對立してゐた才媛であつたのでもありませうが、かの二名作を作成した爲に、後世この兩人が並稱せられるやうになつた意味が多いと思はれます。すでに近古時代の無名草子に、

紫式部が源氏をつくり、清少納言が枕草子を書き集めたるより、さきに申しつる物語ども、多くは女のしわざに侍らずや。

と並べたゝへ、又、皆樣御存じの兼好法師の徒然草にも

いひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などに、ことふりにたれど、

と並べ掲げて居ります。併し紫式部の方が、源氏の方が、何といつても多くの渇仰者、愛讀者を持つてゐたであらうことは、更級日記や、無名草子の文にみても想像せられ、又實際、源氏の研究書目の方が、それから又源氏の影響を直接間接に受けた文學の量の總和が、枕のそれに比べて遙かに多大であること――それは源氏の方が物語であり、又分量も大きい爲もありませうが――からも推斷せられ得るのでありますが、かうした清少得意の場面、しかも自ら記錄しておいた場面までも、いつか式部に吸引せられたといふことにも、一般國民間に於ける紫女の人氣が清女を追ひ越してしまつた、作家の死後の文學的生命といふものの上に於ける皮肉な生存競爭の一端があらはれてゐて、興味が深いのであります。

そして、その紫式部は、實に又、この樂天の香爐峯の句意が示す場面を、自分の作中の材料に採り入れて、やはり用ゐてゐるのであります。それは、源氏物語總角の卷（宇治十帖の第三帖目）に薫大將のことを敍して、

雪のかきくらし降る日、終日にながめくらして、世の人のすさまじき事にいふなる十二月の月夜の、曇なくさし出でたるを、簾卷きあげて見給へば、向の寺の鐘の聲、枕を欹てて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて

おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば

とある文であります。かの詩句をそのまゝに採らうとした爲、却つて文意が混雜して來て、甚だ巧な描寫とは言ひ難くなつてゐると思ふのでありますが、それから又、この詩の句は當時朗詠にもうたはれて人々の口耳にも親しく、大納言公任卿撰の和漢朗詠集（巻下雜、山家）にも載つてゐるところのものではありますけれども、宇治十帖の巻、卽ち源氏も終の方の巻でありますから、式部がこのあたりの筆を執つてゐる時、曾て宮廷で噂に上つてもてはやされた清少の機智を想起し、或は讀者の上にその聯想の興趣を豫想したものであると考へられます。それは式部が自他の經驗見聞を自作の素材として始終用ゐてゐたと思はれる個所が、日記や史實に照して隨處に見受けられますし、和泉式部とか伊勢大輔などの同輩の歌の詞句をも時々採つて來てゐるのでもわかるのであります。そして右の香爐峯の逸話も、或は事實からの取材でなく、少くとも讀者には枕草子の讀まれたことを豫想して書いたのでもあらうと考へられるのは、右の文を讀んでも感ぜられますし、又槿の巻に、雪の山を中宮がお作らせになつた話を引いてゐるのなども、枕草子と共に、その記事のもととなつた事實を意味するものであるやうに讀まれるからであります。併し俗說辨の傳へるあの訛傳は、式部が總角の巻にかうした情景を描いたが爲に導き出され、混同されて來たと考へるのは、勿論穿ち過ぎることになりませう。それはやはり、前に申した通りの簡單な理由からであらうと思はれます。

さて餘談が少し長くなつたやうでありますが、兎も角も、皇后宮定子の御方の女房清少納言、それは枕草子の作者、中宮彰子後に上東門院の御方の女房紫式部、それは源氏物語の作者、この二人がいろ〳〵の意味で並べられ、對立させられて考へられて來たことは、決して偶然でないと思はれます。卽ち人間―女―としての違ひ、作家としての素質の違ひ、創作せられた作品がもつ價値の上の相違、單に興味の上からだけでも、兩人を比べてみることは、近松と西鶴とを比較するに比べて距離の一層近いものの對照であるかと思はれるからであります。同時代に同じく宮廷生活をなした女性であり、その宮廷生活から生み出した文學の各〻の作者であるといふ外的の相似の外に、同じくその作品が主情的文學であり、その生活の內容が主情的（情感中心）であるが故であります。況や紫式部には、彼女の枕草子ともいふべき紫式部日記もあるに於てをやであります。

極めて大づかみに兩者を眺めて、その特異な點についてその相違を一言でいふな

らば、やはり一人は枕草子を書いた人、他は源氏物語を作つた人、といふに盡きます。一は隨筆にたのしむ人、他は物語を生み出す人であります。一は斷想的に感覺的に美を創造し表現する人、他は纒まつた餘裕のある心持で、あらゆるものを美化し詩化する人であります。又他の立場から觀れば、理想と現實とを一致した生活に見出し得た人と、理想の世界と現實の世界との間に立つて矛盾を感じつゝなほ調和に於て兩者を見出さうとする惱みを生活した人と言へるのであります。もつと具體的にいへば、一はどちらかといへば、自然の形象と生活の事象とに興味をもつ人、他はむしろ人間そのものに、人間性のさまざまの相と、人生の解き難い謎とに興味をもつ人であるといへます。つまり感性に生きる人と、情趣にひたる人との違ひであります。卽ち或意味では、俳句の心をもつ人と和歌の心をもつ人ともいへるかも知れません。清少納言が感性に感覺に生きる人だといつても、決して物語のわからぬ人ではありません。情趣に乏しい潤ひのない人ではありません。又式部は全然いつでも自己を自分の創り出した情趣の中に沒入させてのみおく人ではなく、常に嚴肅に反省もし批判もする餘裕をもつて居ります。併し大體に於て兩者の最も著しい違ひを簡約に言ふとすれば、やはりその觀照の態度に於て、感ずる人と味はふ人、一は外に、一は内に、より多く凝視する人と言ふのが適切であらうかと思はれます。そして、他は一方のすぐれてゐる點に於て必ずしも同じ程度にすぐれてゐるとは言ひ難いと言へるやうに思ひます。故にこの違つた素質の人によつて書かれた、そして樣式も態度も全く違つた二つの作品を、漫然と比較して價値の高下を品隲するといつたことは、餘り意味のない事であると思ひます。

ところで、かく長い間有意味に無意味に、兩者が比較せられて來てゐる間に、前に申しましたやうに、その作家的聲望が式部の方に或は大であつたかと推測せられると共に、これに關聯して、その人物性行といふ上にも、式部は非常に芳しい評判を與へられ、清少はいつか御轉婆娘といつた感じを一般の人の頭に印象づけさせて來た不運の對照を見受けるやうに思はれます。勿論紫式部は、當時にあつても、和泉式部のやうな奔放な情熱の持主でもなく、實際顰蹙させられるやうな反道德的な生活、少くとも源氏に含まれてゐるやうな非倫理的行爲の直接の實行者としての傳記的材料を殆ど殘してゐないばかりか、却つてかの御堂關白に挑まれたのを拒けたといふ、所謂後世の道義觀念に形の上で一致する事件を示してゐるのでありまして、これが亦、特に紫家七論の安藤年山をはじめ、式部崇拜熱にうかされてゐる源氏學者達によつて、

總がかりで形成せられたところの式部の道德生活の完全化に最上の材料を提供し、終に所謂貞女の典型的偶像にまで祭り上げられて來たのはむしろ滑稽で、式部にとつて或は有難迷惑の事であるかも知れません。少くとも地下にあつて微苦笑してゐることであらうと思はれます。むしろ御堂殿の光ある御蔭に仕へ奉る幸福を感謝してゐた時間もあつたにちがひなく、性の惱みもかなり激しかつたらうことは、日記や源氏を通しても推測し得られる以上、人間としての彼女、作家としての彼女にとつて、このやうな僞善的な名譽表彰はむしろ皮肉な贊辭でありませう。

之に反して清少納言は、又、女性に似あはしからず、自己の學才を誇り、しかもその學才と機智とに於て堂々たる殿上の男性を屢、後に瞠若たらしめることを敢へて憚からず、皇后宮の御寵遇を鼻にかけた思ひあがつた才女、何となく生意氣で小面の憎い、ぶり家、勿體がりや、といつたやうに考へられ、その枕草子に示してゐる筆才には敬服させられるが、人物に於ては到底式部のつゝましやかな上品さに比べらるべくもないといふのが、清少に對する多くの人々の觀方のやうであります。が併し果してさうでありませうか。もとよりかうした清少の人物評は、既に彼女の生きてゐた當時に於て與へられて居ります。しかもその清少の評をしてゐるのが、紫式部であるに至つて、一層面白いのであります。よく引かれる文でありますが、紫式部日記に、

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける（高慢チキナ氣取ツタ顏ヲシテ威張ツテヰル）人、さばかり（アレホド）

<ruby>戀<rt>さか</rt></ruby>しだち（カシコブツテ）<ruby>眞<rt>まんな</rt></ruby>字（本字、漢字）書きちらして侍るほども、よく見れば、まだいと堪へぬこと（上手デナイトコロ）多かり云々。

と書かれてあるのを見るのであります。即ち清少納言こそ高慢ちきな氣取つた顏をして居る人である。女相應の假名書でなくて、上手を振りまはして漢字を書きちらす小面憎さ。しかもよく〳〵見ると、どうもやはりまづいところがかなりあるといふのであります。そして其次に、このやうに何についても強ひて人よりは異ならう〳〵と好んでするのは、却つて見劣りのするものであり、上つ調子のあだめいた人の行末のよからう筈はないとまで言ひ貶してあるのであります。

併し、これはむしろ、和泉式部や清少納言やなどに對する輩濟としての競爭意識に、一種の女らしい妬ましさの加はつた心持で、自己の優越を感じようとつとめてゐる爲であり、又もし式部日記のこの條が、娘に與へた消息であるならば、なほのこと、思ひきつて氣兼ねなしに胸をすかせたものであるからと考へられます。そして平生自分を抑制して恭謙を心がけてゐたと思はれるだけに、自己についての誇りと、他に對

しての優越感と、更にそれを表したい心持とが不用意に語られてしまつてゐるところに、却つて彼女の人間らしさをうかがひ得ると思ひます。

ところでその當の清少納言はなるほど「賢しだち眞字書きちらす人」でありましたらうし、人に異ならむと思ひ好める女でありましたらうし、男をへこますことに痛快を感じたり、まづい歌を無理に作つては負け嫌ひの氣性を遺憾なく發揮する質の人間でもありましたらうが、決して憎むべき人ではなく、又奥底のある人ではなかつたのではないかといふ氣がします。枕草子を通して彼女をみると、病氣して打臥してゐる折に、笑ひ興じて談しをしたり、何の思ふ事もなささうに歩きまはつてゐる人を「いみじくうらやまし」いと言つて（「うらやましきもの」）ゐるのも極く普通の病者心理であり、又「とくゆかしきもの」（早ク知リタイモノ）の中に

人の子產みたる、男女、疾く聞かまほし。よき人はさらなり、えせもの、下種の分際だに聞かまほし。

子供が生れたのが男か女かはやく聞きたいといふのも、極く單純な好奇心的な興味を含んだ、そして一般人間的な情であり、

いかならんと思ふ夢を見て、恐ろしと胸つぶるゝに、ことにもあらず合はせなどしたる、いとうれし。（うれしきもの）

恐ろしい何だか氣になつて仕樣のない夢を見て心配してゐると、なあにそれは何でもない夢だと、夢合はせを誰かが（或は夢解の女が）してくれると、まあよかつたと胸を撫でおろすなどは、まことに幼い單純な女性の心持であります。よき人（皇后宮）がいろいろの昔今の御物語を數多の人々の侍ふ前でなさるのに、自分に時々目を見合はせながら仰せられるのを「いとうれしく」感じたり、多くの人々が御前に一ぱい居る時、後から上つて來た自分が遠く離れた柱のもとなどに居るのを御見つけになつて「こち來」と仰せられたら、みんなが道をあけて通してくれ、御傍近く召し入れられたのを嬉しいと喜んだり（「うれしきもの」）する心持は今の一般の女學生諸君の心理と何程の隔たりもないものではありますまいか。先生に自分だけ愛せられてゐるといふ意識の單純な稚い誇らしさ、得意さ。（勿論惡い意味でなく）。「はしたなきもの」（マノワルイモノ）の第一に「他人を呼ぶに、我もとてさし出でたるもの」と言ひ、「まして物とらする折はいとゞ」とつけ加へたのは全く微笑を禁じ得ませんが、それでゐて自分はさし出たがり、或は「いみじうわれはと思ひて、したりがほなる人はかり得たる」（シテヤッタ愉快サ）、しかも「女どちよりも、男はまさりてうれし」といふ惡戯好きの若い人々の持つと同じ心持、そして同時に他に對しての優越の快感を、特に異性に對してのそれを味ひたい罪のない稚氣の所有

者であります。かういふところに、私はかへつて、卒直で單純で無邪氣な彼女を見るのであります。式部が「賢しだち」とか「人に異ならむと思ひ好める」とかいふのは、こんな氣持に同感出來ない、或は自分では同感しながらそれを卒直にどんな場合でも發露させることをようさせぬ自分の複雜な心情、特にとりすましたさだすぎた心持から、大人氣ないやうに感じたが爲ではありますまいか。「したり顔」な人をやつつけることに興味を感じてゐた清少自身が、又式部などからは「したり顔に」「眞字書きちらす」人と見えましたらうけれど、自分の學問を強ひてもて隱さうとうはべだけつとめるより、「眞字書きちらす」だけ淡白な心の持主ではなかつたでせうか。「したり顔」であるだけ、案外罪のない可愛いゝ人であつたかも知れません。皇后宮の御寵愛をうけたのも、その學才と機智ばかりでなく、このさば〳〵した性格が亦御氣に入つてゐたのではなかつたでせうか。この點では式部の方がむしろ、とりすましした用意深い、底の知れない、成長しすぎた心の持主であつたらしく考へられます。

さて式部と清少、二人を比較した序に、終りに滑稽な傳說をつけ加へておきませう。

それは吉野記といふ書に

清少納言ハ、ヒカル源氏ノ答ニ、クモル藤氏ト云物語ヲツクリテ、源氏ニ事外（コトノホカ）ニオトリタリケレバ、皆燒テケリ。サテ其後枕草子ヲバツクリケリ。

とある記述であります。餘りに噴飯に値する珍說で、事の眞僞を質すにも足りないほど下らないものでありますが、「ヒカル源氏」に對して「クモル藤氏」とは、考へたも考へたもの、過ぎたるはなほ及ばざる御愛敬であります。

二

文學的空想の豐かでない人でも、否却つて自分自身といふものを持つてゐることの意識は在ります。他人の中に自己を見出すことの餘裕はなくとも、自己の中に生きてゆかうとする强い力を感ずることは出來ます。

枕草子を通してみられる清少納言は隨分穿つた觀方言ひ方を、遠慮なくやつてのける人のやうに見えますが、不平家、反抗者ではありませんどちらかといへば順境にゐた人であります。晩年は不遇であつたとしても、不滿であつたとしても、それは彼女の作家生活に、直接多くの交渉を及ぼさなかつたやうであります。又彼女は皮肉屋、諷刺家といふ名辭で、その觀照及び批評の態度を掩はれるには、餘りに單純で無邪氣過ぎます。苦勞のし足りない人といつた氣が致します。負け嫌ひではあるが非常に弱い臆病者であります、自らを恃むこと大きく高いに似ず、人の批評を斷えず氣

にして居ります。彼女は腹からの皮肉屋ではありません。むしろ氣のおけない人だつたかも知れません。たゞ明るい人ではありますが暖い人とは言へなかつたらうと思ひます。自分から大きな博い愛に環境をば包容しようとしても、それは出來なかつた人だと思ひます。彼女は如何にも快活で淡泊さうであります。併しやはり寂しいところのあつた人に違ひありません。が兎も角も、幸福な羨ましい性格の持主であり、遊び友達としては面白い男を向うに廻しても立派に話相手になれる才女であつたことは間違なからうと思ひます。枕草子の中には屢〻、漢詩文の知識及び記憶、又は咄嗟の機才から齊信(ただのぶ)や、行成や、生昌(なりまさ)やを驚かし閉口させ、或は帝や皇后宮の御褒めを蒙つた事が誇らしく書き集められてあります。けれども、思ふに彼女は、故意に學問を鼻にかける、卑しい衒學者といふほどではなかつたのではありますまいか。機會ある毎にペダンテイックな根性の發揮に努める餘裕を持合はせてゐる程、複雜な性格の女ではなかつたやうに思はれます。それは、負け嫌ひの彼女にあつては、同じ對抗するにも競爭するにも、情意よりも知に生きるのが、彼女の重要な生き方の一つの姿であるに過ぎない爲ではなかつたでせうか。同時に又、他人の中に、或は他人との交渉の中によりも、先づ自己に生きるのが彼女の生き方である爲ではなかつたでせうか。それが彼女にとつては、其時のうそ僞りのない全部の自身の表現ではなかつたでせうか。さうして、それでゐて、彼女は恐らくはそれに寂しさを覺えるに違ひありません。自分が抒情詩人でないことが、歌が――いゝ歌、ほんたうの歌が――少くとも自分を滿足させる歌が――よめないことが、彼女にとつて寂しく悔やしいことではなかつたでせうか。物語が創り出される爲に、陶醉した氣分の統一した持續、その中からまとまつた新な構成を產み出し作り上げる盡きない想像力、一つの事にいつまでも熱中する興味と忍耐と、それらに缺けてゐる自分に、慊らなく思ひながら又氣安さを感じてゐなかつたでせうか。

彼女は、古今集の歌人、清原深養父(百人一首でお馴染の「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ」といふ歌の作者)には曾孫、後撰集の撰者たる梨壺五人の一人、元輔(これも百人一首の中の「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波越さじとは」の作者)の女であります。その血統をうけてゐて、歌のよめない人ではありません。又卽興の機才は勿論あります。負け嫌ひからも歌はよみます。併し彼女の歌は全くいづれもが理屈つぽいのであります。日記に、式部が赤染衞門を評したところで「えもいはぬ、よしばみ事」といつたのが彼女にあてはまるほど、必ず引句

か故事かをひつかけなければよめない、といつてもいゝ位であります。それが一般の流行傾向となりつゝあつた時代の中にあつては、無下にひけをとるやうな人ではなかつたでせうが、實際自分でも歌人でないことを自覺してゐたのではないかと思ひます。元輔の後といふ名の爲に、わざと歌はよまないと中宮に申上げたり（枕ニ「五月の御さうじの程」の段）、公任卿への附句の返し（「少し春ある心地こそすれ」といふに對して「空寒み花にまがへて散る雪に」と附けた）にうまく出來ないので苦心慘憺したのも（「二月のつごもり」の段）、自分を思ひおとされまい心からばかりでなく、やはり、この方面に彼女の最大の得意がなかつた實情を物語つてゐると思はれます。又枕草子の文を讀むと、決して物語を書く才筆の無かつた人とは思はれない部分に遭逢する時が少くありません。例へば春曙抄本で卷七の「故殿などおはしまさで、世の中に事出で來、物騒がしくなりて」といふ條、これは道隆の薨後、道長と伊周との權勢爭が漸く露骨になつて、伊周及び皇后宮の御方が事毎に道長派から壓迫をば加へられる頃、清少はその道長方に由緣があると疑はれて、出仕を控へて里居してゐる折に、宮から御使が來て久しぶりに出仕するところの記事であります、自敍傳ではありますが、なか〳〵情味のある、そして敍事の自然な巧みさが見られる美しい文であります。又「宮にはじめて參りたるころ」といふ清少が始めて中宮へ宮仕に上つた時の回想や、關白道隆が積善寺の御堂での一切經供養の盛大な記事（枕中の最大長篇）や、賀茂祭の車爭の描寫など、さながらの光景を浮かび上らせ、生動させて居ります。有名な「翁まろ」の段なども、その可憐で面白い物語が、輕い寫生文風の態度で生々と觀察せられ敍述せられて居ります。併し、それ以上に客觀的空想的にはなり得ない人であります。どうしても始終、自分に、現實に、卽する人であります。だから敍事の面白いところは概ね自己の經驗に關する條で、さうでないところはあまり生々してゐないことは「やしろは」の條の蟻通傳說の記事でもわかります。やはり物語作者ではなかつたのであります。

その自分が抒情詩人でなく、物語作者でないことの淋しさ慊らなさをまぎらす爲に、恐らくはそれは無意識にだつたでせうが、益、機智と印象的な感覺とに生きる自分を、つとめて誇りたくなつたのではありますまいか――むしろ他人にではなく自分自身に、肯定的に――。

この草子は、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすると思ひて、つれ〴〵なる里居のほど書き集めたるを、

と自ら記してゐる枕草子が、たとへ右のことばが多少後からの言ひわけめいてゐる

とはいへ、やはりその最初の動機はそこにあつたことは疑ひもなく、さうした日記と感想と告白とを書き集めたやうなこの草子に、自讃の文が多いとて不思議はないのであります。そしてそれは、彼女が自己の感覺を尊重し、印象に忠實であると、同じ單純な心持であると思ひます。語りたい心はいつぱいであります。表現したい欲求は熾んであります。併し、自分を離れた別の世界を創造することに、餘裕と興味と力とを持たないのであります。否空想の天地に遊ぶ必要がないほど、現實そのものが彼女には美しく尊くかがやかしく、親しみ深く又懷かしいのであります。それでもう十分なのであります。自然も人間も生活も、自分の眼前に展開し、自分と直接に交渉してゐるそのまゝでいくら味ひつくしてもつきない興趣を横溢させて居ります。彼女の前には人間も、生活現象も、恐らく自然の景象と同じ價値を以て臨んでゐるらしいのであります。だから、この時代の人々の生活の中心をなすといつてもよい位な性愛の生活にすらみても、彼女とても思ふ人もあり、思はれたこともないではないのであります、併しそれは、彼女の全生命、全生活ではなかつたことは勿論、同じ人ながらも、志うせぬるは、まことにあらぬ人とぞ覺ゆるかし」（たとしへなきもの）といふ、まことにさつぱりと、思ひきりがよいのであります。自分から惱んだり展開させたり、さうした生活を創造することに、充實した生命の價値を見出さうとする人ではなかつたのであります。彼女は内にみつめるより外にみつめる型の人であつたやうであります。否、自分から努力しなくとも、自分の周圍が、外界が、すべてたゞいつもそのまゝ、かはる〳〵珍しく面白さに滿ちて自分を取卷いて居ります。そしてそれらが斷えず自分の生きてゐる歡びを感じさせます。それらの外界の諸象を、さま〴〵に鋭く細かく鮮かに感ずることが、自分に許され惠まれて居ります。そしてその感じたところのものを、植ゑつけられた印象を、享受した歡びを、たゞそのまゝに胸にしまつてはをれぬ程、嬉しくてたまらないのであります。言ひたくて書きたくてたまらないのであります。枕草子が一面からは清少納言の自敍傳の觀をなし、又一面からはその感覺的印象の生活記錄であるのは、むしろ當然で又自然であると考へられます。

源氏物語に宮廷貴族生活が反映せられてゐるが如くに、枕草子にもその宮廷貴族生活が浮び出て居ります。否、これは、飾りなきその直寫であります。たゞそれが、筆者の感興を最も大きく惹いた事實のみに局限せられてゐるだけであります。その一々の記事は、連絡のない、卽ち意識的には統一せられてゐない長短自由な事件又は說話の記述の集團であります。日記的、行事的、說話的種々の體の敍事文や小品文の

隨記であります。そしてその間々に、時に隨ひ折に觸れて彼女の興味の焦點となり、印象を最も深く殘してゐる感覺的生活の斷片を、適當に整理して、それに意見を加へ批判を下したものが、これ亦長短不劃一な記載の各集團として挿入せられて居ります。そしてこれらの中には、特にその主題を最初に掲げ出しておく一つの約束を、全篇に通じて踏用してゐるものもあります。例へば「山は」「峯は」「鳥は」「蟲は」などいふ名詞、卽ち事物の名稱を掲げて述べる場合と「すさまじきもの」「にくきもの」「おぼつかなきもの」などといふ多くは形容詞の附せられた感覺及び感情に關する暗示を含んだ主題を掲げてゐる場合とがあります。かういふ題目の下に、いろ〳〵の事物や、感じや、經驗や、意見やを書き集めるのは、必ずしも清少の創意でなかつたかも知れません。歌人仲間達の題詠や、歌合、或は女房達の謎合などの慣習の氣分から生れた思ひつきが、最初であつたのでありませう。或は言はれてゐるやうに、唐の李義山の雜纂の影響もあるかも知れません。

興味の深いのは、その題目の下に記された彼女の感じ方であります。觀方であります。批評であります。趣味であります。その中には、九百餘年前の人の感じだけに留まつてゐない、今日の我々の心にそのまゝ響くものがなか〳〵あります。例へば「うつくしきもの」として

雀の子のねずなきするにをどりくる。又へにつけてすゑたれば（足ニ紐ヲ結ビツケテツナイデオクト）、親雀の蟲などもて來てくゝむる（ロウツシニシテヤル）、いとらうたし（可愛イ）。

と記し、その次に

三つばかりなるちごの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざとに（目バヤク）見つけて、いとをかしげなる（美シイ）および（指）にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし（カハユシ）

と言つて居ります。

いみじう美しきちごの、盥（いたい）に入れたる。

さまを「あてなるもの」（上品ナモノ）に數へてゐるのも面白く、「おほきにてよきもの」（大キイ方ガ小サイヨリヨイモノ）に

をのこ（男）の目。餘り細きは女めきたり。又かなまり（椀）やうならむはおそろし。

と言つてゐるなど可笑しく、「むづかしげなるもの」（ゴチヤゴチヤシテ汚ラシイモノ）に、「猫の耳のうち」といふ奇拔なのもあれば、「たゆまるゝもの」（心ガユルンデ、自然怠リガチニナルモノ）に「日遠き急ぎ」（餘日ノアル支度、マツ手近イ例デ言（バ、メ切期日ノマダ遠イ原稿書キ、トイツタヤウナモノ）、或は「にくきもの」に「急ぐ事ある折に、長ごとするまらうど」（急ギノ用ノアル時ニ長ッ尻ノ御客人）といつた平凡のやうで實情を穿つたものもあります。觀劇中に幼兒が泣き出す不快は誰でも經驗する

ことであり、幼兒の芝居入場禁止の問題は、國民文藝協會ならずとも提案したい氣がおこるのでありませうが、實は新しい問題ではなくて、「にくさもの」の中に「物聞かむと思ふほどに泣くちご」。清少納言以來のことであります。「近くて遠きもの」は「思はぬはらから、親族の中」「十二月のつごもり、正月ついたちのほど」。それから「遠くて近きもの」は「極樂。船の道。男女の中」などは、落語式、謎々的滑稽の興味であり、且俗趣味に近いところはありますが、なほ彼女の一面が窺はれます。かうした面白い例を擧げて來れば際限がありませんが、それは皆樣が實際枕草子に親しんで下さる折のお樂しみに殘すことにして、此處ではこれで止めておきます。

が、彼女が如何に印象を尊び愛し、感覺に生きようとしたかは、皇后宮（中宮）の御前で、「私は世の中が、世間が、何となく癪にさはつてうるさくなり、いやになつて〳〵、もう一寸でもこんな世の中に生きてゐるのはいや、どこへでも行つてしまはうかしらとやけになりました時に、普通の紙の眞白い清らかのや、それに、よい筆、白い色紙（しきし）、みちのく紙など手に入れますと、急に、このまゝ暫く生きてゐたい氣になります。それに又、織目の細かな高麗縁の疊の表が、靑みを帶びて新しく光つてをりますのに、縁の紋がくつきりとあざやかに黑と白とが模樣をなして浮上つてゐるのを展げました時の何とも言へない感じ、それを見て居りますと、あゝやつぱりこの世はいゝ、と命が惜しくなつてしまひます」と申上げますと、中宮も御前の人々も「隨分と簡易な慰安法だ」と言つて笑ひ興ぜられた（御前に人々數多の段）ことが見えてゐるのでもわかります。私だけかも知れませんが大へん面白い話だと思ひます。この感覺中でも色彩に對する官能が、彼女には特に秀でてゐたやうであります。これは時代人に共通してゐたところのものでもありますが、その中でも彼女はやはり獨自の境地をもつた色彩鑑賞家であつたやうであります。草木でも、人物でも、之を描寫するのに、先づ、そして最も細かに、眼につくのは、その花、葉の色、着物の色合であつたやうであります。私はこゝでも亦一つ驚くべき事實に出逢ふのであります。それは彼女の色感が如何に正しく且鋭かつたかを例證する非常によい記述があるからであります。

今日の物理學が與へてゐる、補色（コムプリメンタリーカラーズ）（又は餘色）といふ名稱と、發見してゐるその原理は、説明するまでもなく御承知の事と思ひますが、そして又、色彩の配合の上で、互に補色をなす一雙の色を並べれば、よい對照（コントラスト）をなして調和するといふ原則も、御同樣に訓へられてゐるところでありますが、（そしてこれはスペクトルの方からの説明でありますが、繪具の方でも用ゐられてゐます。）枕草子「扇の骨は」といふ條を見ますと、

青色は赤き、紫は綠。

とあります。

（扇の地紙の青色のには、赤い骨が調和し、紫色の地紙には、綠色の骨が映えるといふのであります。扇は無論、蝙蝠扇（異本に「朴色は赤き」とあるのがあり、それでは意味が違つて參りますが、今は流布本について申します。）

ところでその青と赤、紫と綠といふのが、所謂互に補色をなす一雙の色であるのが實に面白いと思ひます。ヤング、ヘルムホルツやヘリングなどに考案せられた學理を、そのまゝ一千年近くも前の時代に於て、我が清少納言に實感として、事實として記されてゐるのを見る時に、太陽の下に大地の上に、果して常に全く新しきものありやと言ひたくなつてしまふではありませんか。

さて、實際、印象生活に生きる人の感覺は、異常にデリケートでしかも鋭いのでありますが、その上に、平安朝といふ時代は、特にその宮廷貴族を中心とした文化生活は、その感覺が益〻デリケートになるやうに敎養洗錬せられてゐる時代であります。繪畫に、書道（入木道）に、音樂に、詩歌に、遊戯に、服飾に、調度に、建築に、この時代趣味は十分にあらはれてゐるのでありますが、中で非常に面白いことは、時代人が蟲の音はまだしも、風の音を、感じ、娯しむほど、鋭く細やかにその感覺を育ててゐたことであります。風の音といつても、吹いてゐる音ばかりでなく、吹いてゐるか吹いてゐないかわからぬやうな中からまで聽きとるけはひ、微かなそよぎ、不思議な聲であります。風の音が持つ微妙な音樂の律動であります。自然の生命のさゝやき、それであります。いつの時代に限らず、詩人には珍しくないところでありますけれども、一般的に風の音が味ひ娯しまれたのは、平安朝が一番だといつた氣が致します。枕草子の冒頭の「春は曙云々」といふ有名な四季の景象の描寫及びそれに附隨して感ぜられて來る情趣の鑑賞を印象的に敍したあの美しい文の數行を讀んで行つても、すぐに、秋のところに

日入りはてて風の音、蟲のねなンど、いとあはれなり。

といふ表現に接しますし、源氏物語でも、もうすぐ首卷の桐壺から「風の音、蟲の音につけても、物のみ悲しう思さるゝに」といふ記述を見出すのであります。慣性的な修辭と共に、猶慣性的な時代人の情感が表されてゐるのであると思ひます。それから又、あの多種多樣な色彩の配合に、調和を求め美を創り出した着物の襲の色目を發達させた視覺の趣味、或は又、極めて複雜鋭敏でなければ感じ分け聞き別けることのむつかしい、さま〴〵の種類、分量の調合からなる焚物―薫香の煙を合はせ、臭を爭ひ、追風

を懷かしむ嗅覺の趣味、これらの藝術的な感覺を磨き、その感覺に伴ふ複雜な甘く快い感情を味ふことが平安宮廷人の樂しみであり、仕事であり、生活の大切な一方面、一部分でありました。卽ち個人的主觀的感覺の、普遍的典型的な樣式に翻化されたもの、言ひ換へれば、一度時代趣味の知的詩的濾過を經た個人の感覺的印象、それが平安朝の人々の最も尙ぶところのものでありました。清少納言はその中でも特にこの感覺が鋭敏になつてゐる人であり、同時にそれに附隨する感情は、時代趣味の標準から全然獨立解放せられるほど超越的な人ではありません。むしろ我からその趣味の中へ入りこんでゆかうとつとめてゐる人のやうであります。更にその趣味を率ゐてゆかうとすら希望しかねない人のやうであります。だから「何々なるもの」「何は」の類がすべて彼女獨自の特殊な感覺に基づく全く個人的な印象と斷じてしまふことは勿論早計であるのみならず、その觀察や印象の中には類型的なものも少からずあり、又もつと狹く、時代趣味の類型の蒐集とさへ見られるところもあります。そこで枕草子は卽ち、時代趣味の中から特に强く、個性の感覺に刻せられた印象的生活の記錄と、之に加へた清少獨自の審美的批判との綜合表現と觀るべきものであらうと思ひます。

さうして個々の獨立した小品文の集團ではありますが、又不統一なやうに見える排列でありますが、それが、全體を一貫した明るい、透徹した、卒直で自由な生命の生きさきした感じ方と、平和な自然の恩寵の中に、それから自分自身の中に、現に、生きてゐる幸福と誇とに滿ちた歡ばしく晴れやかな氣分とで統一せられ、そして暗示を含んだ餘韻と氣品とを併せた象徵詩的な味を持つ表現の態度と樣式とによつて、我が國文學の中に於ける、抒情的論文、卽ち隨筆の典型的なるものを完成してゐるのであります。そしてこの觀照の態度と表現の樣式とに於て、その精神をおのづから展開させて行つた點で、後世徒然草や、尤の草紙や、花月草紙や、俳文、寫生文やその他の隨筆文學の母體として、粉本として、物語文學に於ける源氏と比肩すべき地位に置かるべき、同時代の代表作品でありませう。（放送）

枕草子短觀

——山の端いと近くなりたるに——

一

枕草子初段の有名な四季敍景の一節

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山の端（一本、山際）いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど、飛び行くさへあはれなり。

の文で「山の端いと近くなりたるに」の解に關して、

(一) 入方の夕日が山際に殆ど接近したの意

とする說と

(二) 夕日の映光に照し出されて、山姿が近く眼に見える意

とする說と、兩樣ある。

二

第一說は恐らく「日の入かたちかき也」とある春曙抄の旁註あたりが元になつて行

はれ出したと思はれるのであるが、評釋（窪田氏）・評釋（金子氏）・集註（關根氏）等、近來の主な註釋書は多く此の第一說である。これでも兎に角通ずるのではあるが、唯それでは、

(い) 「はなやかにさして」の「て」が「つゝ」なら、通俗的には誤解がないであらうけれど「て」でも無論誤用ではないのみならず、表現としても穩正で且印象的であるから、これは大きな難點にはならないけれども「はなやかにさして近づく」といふ言ひ方が、何處か稍落ちつかぬ氣味を感じさせる。

(ろ) 「山の端に」の「に」を省約したと見ねばならないこと。（それでも有り得ない表現ではないけれども、下の「なりたるに」の「に」との語呂の重複感が除かれる外は「に」のある方が意味は明瞭となる。單に「山の端近く」といふ形なら寧ろ普通であるが、「いと」が挿入せられると少しく滑らかでなくなり、同時に次の(は)の點に關聯して來る。）

(は) 「いと」が近くを直接限定する爲に近接して置かれた副詞であるとして許されねばならないとしても、正常の文としては「山の端」の上に位置する方が落ちつき、それならば第一說の解としても的確さが與へられ、且上句の「て」も幾分順應性を示して來るやうであるが、本文のやうに「山の端いと近く」では「山の端」を主語と目

する方が先づ自然な讀過印象であらう。

といつた表現上、語法上の疑義が起り得る餘地があるのと、この解では景趣が頗る平凡である憾みがある。

按るに、山際が近くなるの意にては、少しおぼつかなき心ちすれど、山の端とあらんには、こともなく聞ゆれば（增訂枕草子春曙抄卷の一）

と註して、鈴木弘恭氏が古鈔本及び異本に從つて、本文の「山ぎは」を「山のは」と改めたのも、その景趣が平凡であることを容認しての校訂と言ひ得られるであらう。

附記　右の鈴木氏の文は意味が聊か曖昧な點もあつて、「山際が近くなる」では妥當でないが、「山の端が近くなる」ならば、無條件に了解出來る、といふやうにも一寸とれぬでもないけれども、「近く見える」といふ描寫の場合は、「山際」と「山の端」とを置き換へても、語感の差異を別にしては、結局大きな變りはないのであるし、それに前出春曙抄旁註の「日の入かたちかき也」を承認した態度（それについて格別異議を挾まず、或は別解を引用支持又は自說を主張せぬところから、さう認定することが出來よう。）と、「山の端」ならば、「こともなく聞ゆ」と述べた意味（「山際（が）近くなる」なら幾分不明瞭な所があるが、「山の端近く日が沈みかけた」といふ文ならば、特に說明を加へずとも正解出來るといつた程の意味と解せられる。つまり氏の考では、「山際」ならば、入日が近くなつたといふ表現として、不適切だと目してあるやうに受けとられ、卽ち「山の端近く」といふ慣用から推して、此の方なら疑問なく斷定出來るが、「山際」では少し斷定に躊躇を感ずるといふ意見と思はれる。）とから、やはり第一說に屬すると見て間違ないであらう。

三

尤も景趣がさうした平凡なものであつても、差支はない筈である。やはり美しい印象であるには違ひない。落日の照映は常人にでも感賞出來る。詩人にあつては、特に自然鑑賞家にあつては、もつとそれが深く鮮やかであらうのは、もとよりである。併し第二說のやうな解も、決して不自然ではない。語法上には寧ろその方が殆ど無理がないのみならず、景勝美感としては、此の方が稍特殊的ではあるがそれだけ新鮮であり、且物理現象から起る誰にでも通有した錯覺を、端的直截に捉へ得て、實感のまゝ正しい印象を表明したのが、非常に面白い。それに京都といふ土地が、水蒸氣の關係か何かで、日により時により西の山が非常に近く見えることがあるのは、京都に住んだことのある人々の、現今でも常に經驗し得る所ですらある。特に感覺的に鋭

く磨かれることに馴らされた平安時代の趣味として愈〻矛盾は無い。又清少納言は普通に考へられてゐるよりは超俗性を有たない、寧ろ平凡な一女性であることが、枕草子を通して知り得られるのであるが、それだから常人と同じ自然觀賞を持してゐたとしても、奇とするに及ばないにしても、自然美の觀察論評に於ては、なほ獨自の境地を相當に拓き得てゐたと認めることに於て又可能さがあり、第二說の解のやうな觀照を以て彼女に擬しても、却つて彼女らしさを鮮明にしこそすれ、その反對の結論には導かないであらうことは、何人も異議のない所であらう。少くとも時代人の感性の代表者としての彼女の觀照として、毫も不調和を見出し得ないのである。

四

第二說を提唱したのは、加藤盤齋の著とせられて、季吟の春曙抄と好對をなす俗に所謂萬歲抄（枕草紙抄）である。（延寶二年五月の刊行で、同年七月成立の春曙抄より少くとも先行の說と看られ得る。）

山の端いと近くとは、山は氣に從ふ者なる故に、天氣曇れば遠して見えず。はるゝ時は、ちかふみゆる也。夕日にかゞやいて、ちかふ見ゆると也。（清少納言枕草紙抄卷一）

「山は氣に從ふ云々」と、妙に理詰めの嫌に墮した口氣が、素直な適解をかなり勿體ぶつた面貌にしてゐるのが損であるが、併し又同時に、「氣に從ふ」といふ論斷に、科學性も相應に見出される。要するに「夕日にかゞやいて近う見ゆると也」といふ簡明な論結で、その主意を竭してゐる。若し此の第二說に難がありとすれば、

(イ)「なりたるに」と言ひきつてあるのに對する解釋の妥當性の有無。

(ロ)事實として「山の端が近く見える」ことが有り得るか如何かの問題。

(ハ)「山の端」の下に「の」があれば、疑問の餘地が無いが、其處に幾分の曖昧さがあること。

の三點であらうが、(ロ)は前にも觸れたやうに、我々の普通の體驗からしても肯定出來る現象であり、又(イ)は實は「なりたる心地するに」と言ふべきを、暗喩的に述べて「心地する」を省いたのでもあり、否もつと直感的に描出したといふだけで、寧ろそれが自然ですらあると言つてよいから、此の二つの疑問は右の說明によつておのづと解消するであらうし、(ハ)は結局「に」か「の」かいづれかが附せられて居れば、決定的勝敗は自明となる分岐點をなすのであるが、「いと」の位置から推して、「に」の不要さ以上に「の」の不要さが大きく且自然である。然らば三項共に少くとも第一說の場合に起り得る難點よりは、その論據が頗る薄弱であると言へる。

五

念の爲に諸本について本文を一應檢べてみると、先づ前掲のそれは流布の春曙抄の本文であるが、唯通行本は「山ぎは」（十二行木活字本・十三行木活字本・慶安刊本等も同じ。）とあるのが、前田家本・内閣文庫本（三卷本）久原文庫本、及び堺本・後光嚴院宸翰本、それから旁註本（岡西惟仲抄本）・盤齋抄（萬歲抄）本・清水濱臣校本等では、皆「山のは」となつてゐるのに就いて、假に此處だけを改めて掲出しただけである。それも前述の如く既に鈴木氏が改訂を唱へ、（春曙抄と並んで古くから行はれた古抄本の旁註・盤齋兩本が、上述の如く共に「山のは」であることも、此の改訂を阻止せず、寧ろ支持する形になるのである。）金子氏の評釋にもやはり「山のは」を本文としてあり、今では此の形で行はれてゐる傾向があるので、姑くそれに從つてみたのである。勿論近時でも通釋（武藤氏）・集註（關根氏）等「山ぎは」の方を採用してゐるのもあり、又意味の上からは關根博士の言のやうに「いづれにても聞ゆ」（集註）で、殆ど大差は無く、「山の端」「山際」いづれかである事によつて、本題の第一說・第二說の可否が決着する程の重大性は具有してゐないと考へられる。（ついでに、原作冒頭の「春は曙云々」の一節中にも「山のは」乃至「山ぎは」の一語が含まれてゐるのは周知の事であるが、これと後節の「山のは」乃至「山ぎは」とは、重複を避け變化を求めて、いづれか一方を變つた形にする用意が拂はれてゐる爲に、同義の異語が用ゐられてゐるのかとも思はれる。例へば前田家本・内閣本・宸翰本等の古本も、亦旁註本・盤齋抄本でも、それはいづれも前は「山ぎは」で後は「山のは」である。此の意味でも、前節が「山ぎは」とある本文では、後節に於ては「山ぎは」とあるに就かずに「山のは」とする本文に從ふのを、不當な改變として、强ひて否認する必要はないと考へる。但し諸本中には、前後兩節共に「山のは」とする堺本や、又共に「山ぎは」とする春曙抄本・十二行木活本・十三行木活本・慶安刊本等もある。僅に「き」と「の」と一字の違ひであるから、或程度の臆測は可能でも、さればとて一概に、これらがそれ〴〵明白な誤寫若しくは改刪とも卽斷せられかねるし、原形が確證せられたとまでは言はなくてもよからう。いづれにせよ、當面の主題に直接關係ある事項ではないが。）

次に右の「山のは」「山ぎは」の異同（これを假に1とする）以外で、諸本が春曙抄本と異なる諸點を拾上げると、

2　「夕日」の下に「の」のあるもの（前・内・久・堺・宸本等）

3　「はなやか」の代りに「きはやか」とあるもの（前・堺・宸本等）

4　「いと」のないもの（堺・宸・旁註本等）

5　「ちかく」の「く」が「う」となつてゐるもの（内・久・宸本等）

6　「なりたるに」が「見えわたるに」となつてゐるもの（宸本）

といふ結果を示す。（「鳥の云々」以下は、本問題の主要部分でないから今省略する。）此の内、表現の巧拙並びに語感の差異を除いて、卽ち2・3・5はさして取上げられるに及ばず、僅に「いと」の有無(4)と「見えわたるに」とある特殊表現(6)とが、此處で本問題考察の資料圈内に入つて來る。結局それは宸翰本の場合に歸着するとも言へるのであるが、――(4)の「いと」が無い本文では「山の端近く(う)」といふ接續した形になるので、第一説の(ろ)及び(は)の難點は相當緩和せられるけれども、或は脱漏の疑が懸け得られる可能さは十分にあり（春曙抄本とは別系をなし、他方に於て「山のは」「さはやかに」の詞句まで、堺本宸翰本の一類と一致する前田家本にあつても、亦内閣本・久原本にあつても、やはり「いと」が春曙抄本と全く同位置に儼存してゐる點からも、それが旁證される。）非常に重きを置いて考へるには頗る躊躇させられる。だからやはり變つた形の

秋は夕暮夕日のきはやかにさして山の葉ちかう見えわたるにからすのねにゆくとて……

とある宸翰本だけが「いと」を含まない點で(4)をも併せて殘されることになる。けれどもこれとても、

秋はゆふくれ　ゆふひのきはやかにさして山の葉いとちかくなりたるにからすのねにゆくとて……

とある前田家本――近似した姿ではあつても、より古い・傳寫と推定し得べき――に比して、原形に近いとは考へ得られず（そして春曙抄本の方が、此の問題の表現に關する限り前田家本・内閣本等と一致する。）寧ろ「なりたるに」を、説明的に和らげた形に受けとられる。縱一歩を讓つて、此の部分の宸翰本の本文の形の方が、より古いのであつても、それは第二説の可能を助證するに役立つことでしかあり得ない。斯く觀て來ると、本文檢察の上からは、餘り收穫は獲られず、獲られた限りでは寧ろ第二説に彌、傾く結論に到達するのである。

六

こゝで今度は一轉して、同代の他の作品に於ける類例の觀照乃至表現と對比してみたい。それは一は源氏物語椎本卷の一節と、今一つは同じく薄雲卷の一節である。

椎本卷のは、宇治八宮を訪問した薫に、宮が亡き後の二人の姫達の上を託せられる夜の對談の條で、

夜深き月の明らかにさし出でて、山の端近き心地するに、念誦いと哀れにし給ひて昔物語し給ふ。

といふ文である。これは夕日でなくて月であるのが同じでないが、山の端が近く見

える印象といふ點は全く一である。而も「心地するに」と直喩の形で述べてあるから、説明的であるだけ一層誤解の惧は無い。契沖が

これは月の明らかなるによりて、東の山の近きやうに見ゆる山里の景色なり。（源註拾遺卷八）

と註してゐる通りである。但し玉の小櫛（九の卷）の宣長は、東といふのだけを否定して、西の山の端とし、雲間を出た月光に照し出されたと解してゐるが、後文に「入り方の月は隈なくさし入りて」とあるから、その解き方を正しとすべきである。兎もあれ、映光の爲に山姿が眼に近く浮き出て見える感じを捉へて言つたのであることは確實で、枕草子以外にも斯うした用例があるに看て、恐らくそれは時人の體驗としても、昔時から今日同樣普遍化されてゐたであらうことが察知し得られ、それ故に慣行表現として「山の端近く」と「の」を省いても常用せられ、又「なりたるに」とも、殆ど怪しまずに用ゐられたのであらうと、推測して大過ないのではあるまいか。

右の椎本卷の文は、第二説の場合の三つの難點を、同時に除去する旁證例として有力なものと思惟せられるのであるが、なほ此の自然現象發生の起因條件をなす夕陽の照映といふ事象に關しては、それに直接恰當する類例を擧げることが出來る。それが卽ち薄雲卷の文で、薄雲女院（藤壺中宮）の崩御に際會した源氏の傷心を、その背景の景象の中に融化させて寫した表現である。

夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄く渡れるが鈍色なるを、何事も御目とゞまらぬ頃なれど、いと物哀れに思さる。

入日さす峯にたなびく薄雲は物思ふ袖に色やまがへる

「夕日はなやかにさして」の詞句は、枕草子通行本のそれと全然同一で、恰も符節を合せた如き觀がある。（勿論それは又當時の慣行句でもあらうし、此の樣な程度の形でなら、全然一致した表現が用ゐられても何等奇とすべきではない。或は又椎本卷の場合と合せて共に却つて枕草子からの影響と目することも、さして不自然ではないとしても、それは此處では重要な問題とはならない。假令影響を受けたとしても、その粉本の詞句は時人の觀照を代表した淸女の表現であることを、或は影響の有無に關せず少くとも時人の普通の觀照に容易に同化し得ることを豫想しての紫女の筆致たるや論を俟たないからである。）「山際の梢あらはなるに」といふのが、必ずしも山の端が近く見えるといふのと、同一を意味しないこと言ふまでもないが、山際の梢がはつきりと浮き出て見えるといふ景色は、卽ち山の端がいと近くなるといふ感じと、その間幾許の距離もないと言つてよいであらう。さすれば枕草子の場合の景象を、

右の源氏物語の兩個の場合が共同して解明し確證したことになり、殊にその詞句まで殆どそのまゝ兩者に分割せられてゐて、それを還元すれば枕草子の表現が成立するといつた形になるのを觀るのである。(だから枕草子からの影響と目しても少くとも矛盾はないし、先縱を基臺としてのかゝる換骨の筆法は紫女の常用する所で、その點も撞著するものを見出さない。が又、影響說を固持する必要も今は感ぜられない。)

但し此處で一寸考へてみたいのは、その夕日の位置である。卽ち照し出される山と反對の方向に位置するのか、或はその山の方向に位置するのかの問題である。椎本卷の月の位置は、契沖說が破れるとすれば、昇空ではないから少くとも東ではない。西乃至は西寄りの方向であることは疑ない。そして暫く時間が經過して――此の間に八宮と薰の昔語り、大君の彈琴、薰と辨君との對談等がある。――から、「入り方」になつてゐるから、此の時までは未だ西山に沒しかけてゐないことは確である。西に傾く月を呑んでゐた雲間を漏れた光が、俄に西山を照射したと見るべきでなければならない。つまり山と反對の方向ではないまでも、山の端とは相當離れた天空の位置と定むべきであらう。がやはり西寄りの位置たることは勿論であり、夕日でこそないが、大體落月に近い部類には入れても大過ないものと思はれるから(少くとも昇光ではないから)、類推の參考にはなる。次にこれは正しく「夕日」を扱つてゐる薄雲卷の場合は、一讀してはいづれとも解せられるやうな氣がするが、「入日さす峯」といふ歌に從へば、少くとも落日するその山の方向と見るのを妥當とすべきであらうから、この歌意と背反せぬ爲にも當然さう解せねばならない。落日の餘光の美しさは、枕草子「日は」の段に、

入日。入りはてぬる山際(一本山の端)に、光の猶とまりて赤う見ゆるに、薄黃ばみたる雲のたなびきたる(一本、わたりたる)、いとあはれなり。

と見えて、此の薄雲卷の場合の幾分時か後に來る、卽ちそれより今一段推移經過した賞間に於ける印象を、錄示してある。「夕日はなやかにさして」は卽ち何人でもよく觀時し得るあの落日の榮光を言つたので(旭日を同樣の表現で敍述した用例も、源氏物語若菜上卷に「山際よりさし出づる日のはなやかなるに」とある。)從つて沒りかけた山際の梢が映發して、一際の鮮明さにその姿を浮き上らせる光景が、極めて自然に了解せられる。然らば「さして」の「て」は、必ずしも反對の方向からの照射を意味せずともよいことになり、枕草子の本文に於ける用法も、おのづから理會出來て來る。そして又、事實に於ては「山の端にいと近くなつた夕日の光耀であるから、第一說とも相離れ

た景象ではなくなるのである。――だからこそ兩說の各、生じ得る契機が其處に存するとも言ふことが出來るのであるが。

元來、山姿が近く見える爲に照射する夕陽は、實は、沈まうとするその山の端に位置しなくてもよく、反對側の方からの場合も、或は雲間からの斜陽である場合も、想定せられ得る――我々の實際經驗として、又前出椎本卷の月光の場合からも推論出來る――のであるけれども、そして特に「夕日はなやかにさして」とある記述からは、反對の東の山姿が映發して近く見えるやうに解しても、不自然ではないやうに見られ得るのであるけれども――さう解するのも面白い一解であり、實際の現象としても寧ろ面白いのではあるが――やはり前掲薄雲卷の用例に徵してと、本文の表現に對する正常な素直な解釋とから、落日の西山そのものと解するが穩當であらうと考へられる。「山の端」或は「山際」も、必ずしも嚴密に文字通り端際の意味に拘はれる要はないにしても、卽ち大まかに「山姿」の意味に用ゐられた氣持が相當大きいにしても、なほ「山の輪廓」といつた感じを强調してのことであるのは否まれないから、その點でも落日直前の西山(或は少くとも落日に近接した西側の山)とする方が、一層明確な解となるであらう。落日直前の夕陽ならば、特に彩發せしめるのはどうしてもその沒入の山際でなければならないからである。(椎本卷の場合の「山の端」も、「輪廓」といふ程の氣持はやはり籠められてゐると看てよいであらう。若し又姑く宣長說を採らずに、契沖說に從つて、東山からさし出た月とするならば、照映える山と同方向となるから、一層此の落日の場合と相一致することになるわけである。)

斯くして、第一說を全然正しくないと論斷するまではなくとも、反對に第二說の解は、略いづれの點からしても妥當に支持せられ得ることとなる。そして第一說の解では、所詮第二說の到達した鑑賞成果に對して、正に恰もその半ばの階程の域に止まつてゐることになるのである。

七

盤齋抄の他、それより後に第二說を主張してゐる古人がなほある。

近頃刊行された岡本保孝の枕草紙存疑(未刊國文古註釋大系第十三册所收)を繙くと、「山きはいとちかく」とある項下に、

源氏椎本、夜深き月のあきらかさにさし出て、山のは近きこゝちするに。日と月とはかはれど、山のちかくみゆるは同じ。朝日の出シとする山際近くみゆるなり。海邊ならば海よりなれど、山國は山より出れば、山際と云なり。

と出てゐる。保孝が盤齋抄を參考したことは、此の書の卷頭に掲げてある諸本の解說中にもその名を擧げ、又註釋としても「萬歳抄云」として隨處に引用してゐるのでも明白であるが、此の一節では直接同抄の解を繼承した形は特に示されてはゐず(恐らく自說の前提としては、それを殆ど當然の解として採用してゐるのかも知れぬが)寧ろ別の角度から獨自の見解を下してゐると言ふべきで、而も椎本卷を引證して(但しこれは契沖と同樣、昇月と解してゐるやうである。)解かうとした先人の既存したことを知り得て、一段私見を固めるのに勇氣を與へられた。一面此の說の既存を紹介することによつて、同時に私見を呈示する意味が自然消散するやうにも思はれるのであるが、なほ論旨におのづから異同を殘してゐるのと、今一つ薄雲卷の引例を、も、並べて考察することが無用でないと思ふ所から、前掲の冗言を敢へてしてみたのである。舊く書き散らしたまゝ筐底に押籠めて置いた覺え書の資料と試論を、最近保孝の論を閲讀したのを機に、改めて取出して整理した結果が、こんなものになつた。更に他日の是正に俟ちたい。

平安朝文學の彈力

一

平安朝文學は宣長の所謂「物のあはれ」の文學、そして眞淵の所謂「たわやめぶり」の和歌、といふのが通念である。それは無論謬りではない。古今・源氏を古事記・萬葉に、又、平家・太平記に一寸讀み比べただけでも、それが誰にでも先づ第一に與へられる繙讀印象であることも間違ひはない。

もとより平安時代四百年、相當に永い期間である。初期と後期とでは創作の傾向もかなり變つて來てゐる部面もある。又作家の側からいつても、性別、個人の特色など、簡單に一括しては取扱はれない場合のあるのも當然である。今昔物語や大鏡を、一概に物の哀れで片附けるのは、先づ輕忽の譏りは免れまい。が、平安朝文學の平安朝文學たる所以は、やはり眞淵や宣長の目して以て論定の標識としてゐるところのものに代表され得る。

二

けれども唯弱い甘いといふだけが平安朝文學の特質ではない。女性的な感傷だといふだけが平安朝文學の全部ではないことも、亦事實である。

源氏や枕草子に、上代文學のひた迫る強い力は求め得られない。和漢混淆の上に佛教用語をもこなし入れた中世文學の澁い鹹い味は見出されない。而も此の兩時代の文學の間に挾まれて、平安朝文學は頗る優美な柔軟性を有つた獨特の立場を獲得してゐる。奈良時代文學に比して洗錬された品位と落ちついた餘裕があり、そして又鎌倉室町文學の形式的なぎごちなさ、誇張的な虚飾感から救はれてゐる。粗野でないと同時に生硬でない。情趣的であるから柔かみに勝れてゐる。そして表現が動もすれば靜止的固定的になりがちな近世文などの及びもつかぬ生き〳〵した感覺が屢見られる。表面靜止した一樣さを見せながら、その水面下の微妙な生動は豫想以上のものがある。例へば文飾縱横、外構への強さを誇る馬琴の文章などは、平安朝文學に對比すれば、案外に單純單調で、使用された文字に卽應するだけの迫力は內實には乏しい場合が多いのは常に經驗せしめられる所である。柔かく弱い外觀に似ず、壓せば一度は凹むけれども、指を收めれば忽ち舊の態勢を保たうと强靱に反撥して來るのが代表的な佳き平安朝文學の精髓である。

三

平安朝文學の弱さは强い弱さである。他の語で言へば、弱さうに見え脆さうに見えて、決して弱くない壞れ易くない弱さである。弱いなりの强さである。卽ち其處に一種特異の彈性が潛むのである。涙脆の女性的な文體とことばだと甘く見くびつてかゝつてゐる讀者が、いつか却つてその弱い柔かい藝術から、だん〳〵押し迫られて、終には遁れる隙もないまでにぐん〳〵締めつけられ、降參させられてしまふことは決して珍しくないのである。

四

例へば先づことばである。洗錬された典雅な上流語、平安朝語は如何にも大宮人にふさはしい優美なことばである。それが蜒々と列ねられると、盡きざる豐かな情趣の世界を綿々と展開する。而も一種のねばりのある壓感を伴つて快く哀しくそして又息苦しく我々をつゝんで來る。それはじれつたいほど悠暢で而も不思議な蠱惑をもつてゐる。簡潔だといはれる清少納言の筆ですらも、漢語を過多に用ゐる後世文學とは比較にならない。

單語に於て既に複雜な內容をもつ彈力性に富むものが夥しいことは、一々擧げる

にも及ぶまい。同じ「あはれ」でも、近世文學に於て見る單一に凝固した抽象語では決してない。用例の箇所によつて、屈伸自在、千變萬化の卽應性を發揮する。「をかし」でも同樣である。語彙の貧困から來る必然の結果でもある半面、それだから乏少の語が、外見單一に見えて、內容は多彩自在であるといふ利得をかち獲てゐるのである。宣長が漢語の粗笨性と一律性を難じて、平安朝物語の詞の伸縮多樣性を絕讃したのは正に的言であつた。

五

木の花は　梅。濃くも薄くも紅梅。櫻の花びら多きに、葉色濃きが枝細くて咲きたる。

キビ〳〵した齒切れのよさ、そしてやはり柔かみとふくらみが肌ざはりの快い親しみを感じさせる。驚くべく美しい强さである。

大方の世につけて見るには咎なきも、わがものとうち賴むべきを選ばむに、多かる中にもえなむ思ひ定むまじかりける。男のおほやけに仕うまつり、はか〴〵しき世の固めとなるべきも、眞の器ものとなるべきを取り出さむには、難かるべしかし。されど、賢しとても、一人二人世の中を政ちしるべきならねば、上は下に助けられ、下は上に靡きて、事廣きに讓らふらむ。狹き家の內のあるじとすべき人一人を思ひめぐらすに、足らはでありしかるべき大事どもなむかた〴〵多かる。

のびやかな迫らぬ態度で、靜かにやんはりした整つた言葉づかひで語りつゞける左の馬頭――作者――其處には何の殺伐の響なく激越の調こそないが、實人生問題に對する熱烈な關心と主張と、そして鋭く嚴正な批判とが、一語一句に力强く籠つて、ビン〳〵と彈む勢を以て、我等の胸に食ひ入つて來て、完全に讀者を說伏せねば已まない。まことに恐るべき弱さである。

六

作中の人物にしてもが、此の柔かい剛さ、弱い强さが、男性にも女性にも理想として具象化されてゐる場合が多い。光源氏は卽ちその最適の代表例である。昔男の業平も亦それであり、竹取のかぐや姬の心高さと心强さも超人間的條件の半面に於て、當代女性氣質の現れであることも否定出來ない。宇津保物語の藤原の君の九の君あて宮は卽ち又その後身である。源氏物語の女性には殊に斯の種の人物が多く且顯著に取扱はれてゐる。伊豫介の後妻空蟬、明石入道の女明石上、桃園式部卿宮の姬權前齋院、宇治八宮の遺孤の姉姬大君など、いづれも屈指の人々である。稍特異の型としては六條御息所のやうなのもある。

作家、特に女流作家自身に卽ち又それを見る。蜻蛉日記の作者右大將道綱の母も、二代の情熱女歌人和泉式部、小式部內侍母子も、いづれは其の例に漏れぬ。有髯男子

を屈服させて、インテリ女性の尖端を切る清少納言も、超強の心臓だけではなく、

恥かしき人の、歌の本末問ひたるに、ふと覺えたる、我ながら嬉し。（嬉しきもの）

といふ人並のしをらしさは持つてゐた。

女はもてあそびの端にしつべく物はかなきものから（椎本卷）

と自嘲しつゝも、御堂關白を夜もすがら槇の戸口に叩き佗ぶる水雞になり了らしめ、そして又、

心淺げなる人眞似どもは見るに傍ら痛くこそ（蜻卷）

と、獨自の創造性を主張した紫式部でもあつた。源氏物語に前述のやうな女性が多いのは、畢竟それらはすべて作者の性情の分身投影であるからである。

七

清少納言の負け嫌ひは有名である。雪の山のかけ事、元輔が後といはるゝ君しもや」と中宮が御歌賜はつた時の御答など、彼女の案外正直な姿が躍然としてゐる。紫式部もそれに優るとも劣らぬ負けじ魂の所有者である。恐らくは清女より露骨でないだけ餘計執拗で强情であつたと考へられる。或意味ではこれは確に平安時代女流の傑れた人々には共通した性格であつたと言へる。

男性の知識人が擧つて滔々漢詩漢文に沒頭してゐた時、彼等に負けない漢才をも具備してゐる上に、更に加へて新しく制作された日本文字を驅使し、生き〳〵とした日本語で、生き〳〵した自分の生活を歌ひ上げ描寫し或は小說化する文學運動を成し遂げた平安時代女流作家達に、さうした矜りがおのづから持せられ育成されて來てゐたことは何等奇しむに足りない。

「やまとだましひ」「やまと心」といふ語は平安時代に出來た。少くとも文獻の上ではさうである。そしてそれは赤染衞門や紫式部が特に好んで、そして十分意識して用ゐた所であつた。赤染衞門が使つてゐる用例（赤染衞門集及び後拾遺集）の如きは、就中日本的自覺に基づいて對外妄拜を嗤笑してゐる――といふのが若し過當であるとしても、少くとも負けじ魂の日本人意識を熾烈に擡頭させてゐる跡が歷然としてゐる。枕草子の「社は」の條、源氏物語の薄雲卷、共に又、大國異邦に對して、日出國の無比の優越を强調してゐる。卽ち平安時代に最も日本精神を發揮したのは寧ろ女流作家達であつたと觀ることが出來る。此の自覺がやがて一つの固い信念を形成しつつ、彼女等の作品に又大きな强さをもたらさずに措かない筈であつた。

八

かくて日本人たる誇がある。作家たる矜りがある。女流なるが故に、――そして當代では特に――男子の成し遂げ得ない藝術の領域と境地とを拓き得た歡びと自負がある。女人なるが故の宿命的な弱さが、男性への魅惑としての力と、それに生き、それを守る强さとを又彼女等に與へる。生計苦の殆ど無い豐かな高い文化生活の中に住し、一面雲居の宮仕に光榮と幸福との誇らしさを擔うて、自己を娛しむ文學に精進する勇氣と餘裕とを恣にすることが許されてゐる。そして高度の敎養ある家庭と優雅な社交場裡に、細緻な感性と美しい意志とが尊重される。そして又用ゐられる言葉は、その感性と敎養とに研ぎ澄まされ磨き上げられ、和げられ潤ひを與へられて、いよ〳〵匂ひ多く光澤を增した麗しい「やまとことば」である。かうした雰圍氣の中から生れ出る平安朝文學が、弱々しい容姿の、何處か犯し難い氣品を湛へ、狎れ易い柔かさを見せながら、反撥して來る底力を藏してゐるのは、首肯出來る所であらねばならぬ。

九

私は先に空蟬君の事に觸れた。

人がらのたをやぎたるに、强き心を强ひて加へたれば、なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず。

と帚木卷に書いてある。この紫式部の評語をそのまゝ移して、彼女によつて代表せられる中古文學の上に置かう。

平安朝文學の弱さは「なよ竹」の强さである。

古代・中世の「作り物語」

一　物語のいろ〳〵

小說といつても、古代のそれは後世に所謂小說といふ術語では、嚴密な意味ではあてはまらない。發生的に文學の展開を眺めても、何處の國、何の民族の文學も、所謂小說らしい小說の生れて來るのは比較的後であるのが事實でもあり、自然で當然でもある。隨つて原始文學の中には先づ此の形態は日本でも見出されないと共に、初期の此の種、此の系統の作品には民族敍事詩的氣分と民間說話的素材とがかなりに遺存してゐる。――言ひ換へれば未だ說話文學の域を脫してゐないやうな構想のものが多く、表現も亦さうした傾向を示してゐると大體に於て言へる。尤も「小說」といふ漢語それ自身が亦、原義は街談巷語といつたものを意味してゐるのが、漸次複雜な內容を有つ概念に進展し、且稍異なつた意味に轉化して來たのにも、先づ略相應じてゐる。なほ初期のみならずこれはもつと後までも引續いて、古代・中世の小說の主要素と目してもいゝくらゐの大切な成分は、古代文學に萬葉の光と耀き、古今の花と咲

いた、所謂敷島の道――やまと歌――と相通ずる抒情詩味、それである。和歌の散文化――といつては少し當らないが、和歌の世界の散文(これも嚴密には散文と言ひ得ないほど、韻文からまだ分離してゐないのであるが)へのひろがり、それが古代小說の曙であつた。

かうして古代小說は單純な稚いものではあつても、其の屬性は單一ではないので、生れ出た各作品も、後世の個性の相違から來ると稍似たやうな、併しそれとは又異なつた複雜さを一見示してゐて、簡明な一語で統一して取扱ふ事が少し無理である。

幸に、我等の祖先は甚だ重寶な語を作り出した。いや使用したといふ方が適切であらう。それよりも有つてゐたといふ方が、猶ほんとかも知れない。それは卽ち「物語」といふ語である。洵に便利な語である。これならば殆ど抗議無しに、あらゆる種類の古代・中世の小說を蔽ひ得るのである。そして小說といふ語よりも、一層妥當に、一層ぴつたりとあてはまるのである。此の「物語」といふ語と、「童話」といふ語とは、日本人の創り出した單語の中で、大出來の部に屬するものであらう。

「童謠」といふ語は昔にも在るが、今日のと少し意味が同じでない。「童話」といふのは、殆ど現今のそれのやうな意味に、德川時代の戲作者山東京傳などが用ゐてゐるが、「物

語」といふのは、「物語る」といふ動詞から來て、其の物語られる內容をも、言ふやうになつたものと考へられるから、特に誰かが新しく創作した語といふのでは無いであらう。それだけに無理が無く、流布の範圍も一般的であつたらうが、其の代りに「物語られるもの」が何でも「物語」であるとすると、甚だ雜然曖昧な事になつて、說明の上からは少からぬ不便を負はされねばならぬ結果となるのである。

假に題名に「物語」の語が使用されてある作品だけ例示してみても、題名に用ゐられてゐなくても、內容が物語である作品も無論多い。竹取物語・伊勢物語・落窪物語・源氏物語・榮華物語・今昔物語・平家物語・俵藤太物語・徹書記物語、後のものまで入れると、武家義理物語・雨月物語と、かう竝べて來ると、外見上物語といふ名で統一されてはゐるが、內容から、或は形態から、或は作者の態度からなど、それ〴〵皆異なつた性質を有つてゐて、同一に見做して取扱ふ事は困難でもあり、又誤でもある。中には純粹の意味の小說とは言へないものもあり、又全然小說でないものもある。歷史物語の榮華、なほそれよりも歷史小說の傾向を帶びてもゐるが、さういつた稱呼では少し妥當でない所謂軍記物語の平家、傳說集卽ち說話物語の今昔、それに小說ではない藝術論隨筆の徹書記物語、それから德川期の西鶴の浮世草子と上田秋成の讀本、其の殘りのものでも、幻想的な竹取、歌物語の伊勢、童話的な落窪、寫實味と心理描寫へ進んだ、つまり小說の形態に向つて來た源氏、御伽草子としての俵藤太と、各〻同一でないそれ〴〵獨自の世界を創り出してゐる。同時にそれらは以上の各〻の上に附した簡便な說明的な詞では、何れも十分に其の全作品を示し得てゐないほど、又互に交錯した部分、共通した分子をも有つてゐる。而も右の諸作品、否、榮華や雨月やまですべて上に擧げた諸書は、何れもそれが「物語」であるといふに於て僞りは無いのである。

卽ち古代・中世の小說史は結局物語史――物語文學の史的展開の考察說述といふ事になるのである。そして其の物語の中でも、大體「作り物語」（此の語は今鏡卷一〇に用ゐてある語である。）の胎生發達の跡を眺めるといふ事になるのである。「作り物語」とは卽ち說話文學でもなく、歷史物語でもなく、とりも直さず、創作であり、小說である事を意味する。

二　「作り物語」史の時代區分

さてその古代の「作り物語」を、展開の姿に於て眺める時、どうしても鮮かな一大劃線を引いて、おのづからそれを前後に二分させるものは、源氏物語である。そこで私は古代・中世の小說史を說くに、次の順序に區分したいと思ふ。

古代　I　源氏以前の小說――昔物語と歌物語
　　II　源氏物語
　　III　源氏以後の小說
中世　IV　童蒙小說――御伽草子

茲に用ゐた古代及び中世といふ稱呼は、大略普通の解釋・用例に依據したのである。尤も此の場合古代といふのは、事實としては平安朝を指す事となる。（全體の文學史からいへば、古代の後半期に當るのであるが、それ以前には小說と呼んでいゝ作品が殆ど無い。）中世が鎌倉・室町時代を意味するのは言ふまでもない。

なほ右の四つの區分は又「作り物語」の側からの事である（文學史全體の上からいつても、大體は其の主潮・傾向に應ずるが。）事を明記して置かねばならぬ。且、小說史に於ては、平安末と鎌倉期との間には畫然たる界線が引かれ得ないと言つてよいから、「源氏以後の小說」といふ部分を、古代と中世と兩者に跨らせて置くのが適切であらう。（純小說でない歷史物語や敍事詩的物語やをも入れて考察すれば、無論兩者間に重要な界線を見出し得るし、又御伽草子を以て室町文學を代表させるのは、餘りに偏し過ぎた事にならう。）

そこで、もう一度繰返して言へば、昔物語（天草參看）から御伽草子に至る「作り物語」の史的展開、これが古代及び中世の小說史の取扱ふべき範圍と大體に於て定めてよいと思ふのである。

更に、古代と中世とを區分する事無しに、一括して概觀する場合には――「作り物語」史の側からは殆ど無條件といつてよい位にそれは可能であり、寧ろ自然ですらある。――平安朝から室町期までの小說を、極めて概括的に二分して、源氏以前（源氏物語を含む）と源氏以後とに分けて考へることも、簡明で而も妥當な觀方として許さるべきであると思ふ。

昔物語と歌物語

——源氏物語以前の小説——

一　昔物語

枕草子の「にくきもの」の條に

物語などするに、さし出でて我ひとりさいまくる者。すべてさし出では童も大人もいとにくし。昔物語などするに、我が知りたりけるは、ふと出でて言ひくたしなどする、いとにくし。

と見えてゐる。「物語」は普通の談話乃至世間咄の意味であるが、「昔物語」といふ語を之と區別して特に用ゐてゐるのが目につく。同書のずつと後段にも

物語もせよ。昔物語もせよ。さかしらにいらへうちして、こと人と物言ひ紛らはす人、いとにくし。

ともある。又源氏物語の夕顔卷で、例のなにがしの院に宿つて、物怪に夕顔上の命を奪られた不氣味な一夜、院守の子がやつと點して參つた紙燭のちらつく光に、

たゞ此の枕上に、夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそ斯かる事は聞けといと珍らかにむくつけければ云々。

といふ敍述もしてある。少くとも此の「昔物語」は古傳說、古說話といふ意味に用ゐられてゐる事だけは確である。(註一)

勿論「昔物語」といふのは、いつもはつきりと古說話の事を意味してゐるわけでは決して無い。同じ源氏でも、宿木卷の薫君が、年老いた辨の尼（薫の實父柏木の乳母の女）を、殊更何くれと心をつけてやる事を記した條に

外にては、かばかりにさだ過ぎたらむ人を、何かと見入れ給ふべきにもあらねど、夜も近く臥せて、昔物語などせさせ給ふ。故權大納言の君（柏木）の御有樣も聞く人なきに心安くて、いと細やかに聞ゆ。

とある「昔物語」は、やはり辨の詞であるが、

あはれなる昔の御物語の、如何なるついでに打出で聞えさせ、片端をも仄めかし知ろし召させむと云々。（橋姫卷）

と言つてゐる其の「昔の御物語」を簡約にしたと見てもよい。之を聞く薫が

よし。さらば此の昔物語は盡きすべうなむあらぬ。又人聞かぬ心やすき所にて聞えむ。（同卷）

と言ふので一層よくわかる。つまり

げに人目も繁し。さしぐみに古物語にかゝづらひて、夜を明しはてむも、こちゝ〳〵しかるべければ（同卷）

さるは覺えなき御古物語聞きしより、いとゞ世の中に跡とめむとも覺えずなりにたりや。（椎本卷）

の「古物語」といふのと同じである。（此の「古物語」といふ語も亦古代小說の意味にも轉

用せられてゐる。）

けれども

昔物語などに語り傳へて、若き女房などの讀むを聞くに、（橋姫卷）

といふのは、記述せられた古說話の謂である事は明瞭である。

後の世の例に言ひ出づる人もあらば、昔物語などに、殊更に嗚呼めきて作り出でたるものの譬にこそはなりぬべかめれ。（總角卷）

といふに至つては、最早「作り物語」を意味してゐる事を認めないわけにゆかぬ。帚木卷の名高い「雨夜の品定」の條にも、源氏の親友頭中將の談話の中に、撫子の花を折つてよこした愛人（後の夕顏）上、此處では未だ撫子の歌を詠んだ女として語られてゐる。）を久し振に訪れると、例と變らぬながら、何となく浮かぬ顏で、荒れた家の露にしとゞ濡れた庭の面をぢつと見つめては、蟲の音と競ふかのやうに、ともすれば泣いじやくるいぢらしさ。「昔物語めきて覺えた」と追憶してゐるのも、それであらう。（註二）

要するに「昔物語」の內容が實事・經驗であると、口碑傳說であるとの差があるだけで、「昔語り」といふ程の意味で、其の兩樣何れを指すにも用ゐられてゐた事は明らかであるばかりで無く、其の他に、特に古い「作り物語」の事をさう呼んでゐた事も、以上の例で知る事が出來る。そしてそれは後世にいふ「昔噺」「御伽噺」の意味とは必ずしも同じでない事も、說明を加へる要はあるまい。

併しその「作り物語」の「昔物語」も、童話・傳說的「昔物語」と、先づ相距る遠からざるものであつた事も否定し得られない。前に引いた帚木卷や總角卷やの敍述を通して所謂昔物語の素材が、感傷的で類型的な情話や、誇張された現實味の少いローマンスやであつた事が推知し得られる一方、次の源氏の文は、其の素材の種類の他の一面を語るを、又賢木卷には、異腹の紫上が、源氏君に知られ引取られてからの思はぬ出世幸福に引替へて、異母兄妹達のはかゞしくない宿世に、

繼母北の方は安からず思すべし。昔物語に殊更に作り出でたるやうなる御有樣なり。

と繼子の幸運に引證しようとしてゐる「昔物語」は卽ち繼子童話――古代・中世小說の一型式、平安朝から室町期までの抒情物語中特に際立つて一の系統を形づくつて展開してゐる所謂繼子物語――を指してゐる事は疑を容れない。而も以上の推論は、現存の所謂「昔物語」に照らして、事實として十分に肯定せられねばならない。

兎に角、私は源氏以前の作り物語を總括して、當時、紫女や淸女達が使つてゐた語に

借りて、便宜、「昔物語」と呼んでみたいと思ふ。尤も枕草子に、古い物語の名を擧げてゐるのは、「物語は」といふ條で、其處では特に「昔物語」としてはない廣義の「物語」中に「昔物語」が含まれるべきであるは無論の事であるが、假に一歩を讓つて、清少が「物語は」の條に列べた諸作品を「昔物語」と呼び慣らはしてゐなかつたとしても、他の物語、或はもつと古い物語をさう呼んでゐたかも知れないと思ふが、併しそれは恐らく明確な意識や標準があつたらうとは考へ得られない。）事實に於て――時代から言ふも、將た作品そのものから言ふも――之を源氏物語に對比する時、なほ躊躇無く、それらすべてを昔物語と呼び去るを憚らないのである。

然らば其の私の所謂「昔物語」としては、どんな作品が在つたか。それを述べる前に、一言せねばならぬのは「歌物語」の事である。

註一　源氏物語蜻蛉卷に「鬼や食ひつらむ、狐めくものやとりもていぬらむ。昔物語のあやしき物の事の譬にか、さやうなる事も言ふなりし」とある昔物語も同じである。

二　源氏物語胡蝶卷に「昔物語を見給ふに」又眞木柱卷に「昔物語などを見るにも」とある昔物語も、古代小說、少くとも記述せられた古說話の謂であり、若菜上卷に「昔物語にも、物得させたるを、かしこき事には數へ續けためれど」とある、それも古代小說の意味に解して大過無いであらう。

二　歌物語

「歌物語」といふ語は、故芳賀先生が好んで使はれたのであつたが、典據は既に平安朝に在る。榮華物語「淺綠卷」に、粟田殿道兼の遺子の姫君が尙侍（かん）の殿（道兼の弟道長の女威子）の慫慂によつて宮仕する事に決定する條に、母が道兼存生の折に夢想した此の當時胎内にあつた娘の宿世の思の外に拙いのを歎いて、

北の方いとゞ堰きもあへ給はず「あが君や、これを善き事とてにはあらず。人（威子）の切（せち）に宣ふ事なれば。故殿（道兼）の歌物語を書き、御調度をし設けて、待ち奉り給ひしかど、御顏をだにも見奉り給はずなりにし事」と云ひ續け泣き給へば、

と記してる「歌物語」は、歌論では無からう。娘の將來を祝つて、其の翫びがてら敎へがてらに名高い歌道說話――歌を中心にした物語――を書き集めたものに違ひ無い。嫁入文庫みたいな意味のものであらう。勿論此の「歌物語」といふ語の內容も稍漠然としてゐて、廣く歌に關した何でもの話といふ程の意味と事實とをも有つてをり、又所謂歌學書・歌論書にも、歌道に關する諸種の傳說や、つまり歌物語を大抵必ず含んでゐる事も改めて言ふまでもない。

平安末以後中世へかけては、愈、此の「歌物語」といふ語は流行したやうに見える。

人の語り出でたる歌物語の、歌のわろきこそ本意なけれ云々。

といふのは徒然草の一節である。歌がやはり其の中心であり、生命である事は、當然ではあるが右の一句でも明らかに裏書せられてゐる。此處の歌物語が縱し稍廣義の意味に用ゐられてゐて、必ずしも歌に關する說話的物語に局限せられてゐないにしても、所謂歌物語といふものの性質を、おのづから說明してゐると言へる。曾我物語流布本卷七の六「李將軍が事」の條、

十郎聞きて、や殿、歌物語心得ず云々。
げにや折による歌物語悪しく申すと覺ゆるなり云々。

の「歌物語」は「虎と見て射る矢の石に立つものを云々」の古歌と其の典據の支那說話を五郎が語るので、これは明白な所謂歌物語なのである。鬼界が島の流人平判官康賴入道の著と普通に傳へられる寶物集（卷二）にも「歌物語」の項があつて「求不得苦」即ち貧困の苦を說くに所謂歌物語を以てしてゐる。そして其の出典を、俊賴口傳（歌學書、金葉集撰者源俊賴の著）にも求めてゐるが「君なくてあしかりけり」の歌物語を、

大和物語に見えたり。

と記してゐるに見れば、大和物語に載せてあるやうな說話を既に早くやはり歌物語と呼んでゐた事實を知り得るのである。（ついでに、此の說話は大和物語下卷に、詳しく語られてゐる。）

かくて中世には、軍物語（謠曲實盛）、法物語（判官都話、室町時代の小說で一名鬼一法眼。なほ此の法は兵法の意）などと並んで、歌物語といふ語は珍しくないものであつたらしく考へられる。さうして、かうした意味での歌物語集の始祖であり而も典型である作品は、やはり伊勢物語に止めを刺す。大和物語が之に次ぐべき物である事も論は無い。

これら歌物語は、純然たる「作り物語」と見做す事は妥當でない。實事譚もあらう。且傳說的物語が主要な部分を占めてゐると言ふが正しいであらう。けれども創作の形態を採つてゐる歌物語、特に伊勢物語などは、今昔物語のやうな忠實な口碑記錄の傾向態度を有つ物とは、決して同一に視る事は出來ない。寧ろ小說に近い種類の樣式と性質とを具へてゐるものと言ふべきである。それは恰も記錄的な日記に對する、心境小說的日記卽ち日記文學の場合と稍似てゐるとも言へよう。結局、伊勢物語も「昔男の物語」である。歌の「昔物語」とも言へれば、小說的歌日記と言つてもよい。そして又所謂「昔物語」の竹取物語も、歌物語の要素と型態をすら具有してゐるのである。要するに、源氏物語以前の小說を、大體昔物語と歌物語とに、纏めて取扱ふ事は、さ

して不都合で無からうと思ふ。

三　散佚物語

さて其の昔物語と歌物語とを併せて、實際の作品に就いて言ふと、現存してゐるものでは、竹取物語・伊勢物語・宇津保(空穗)物語・落窪物語・大和物語がある。此の中で伊勢・大和の二作品が卽ち所謂歌物語である。(註一) なほ今日に傳存してゐない數々の物語文學や、傳つてゐても、名が同じだけで實は後世の改作又は新作と言ふべきものも在る事を注意して置きたい。

散佚物語の各作品の名稱だけは、諸書を通して知る事が出來る。例へば、枕草子の「物語は」といふ條に、

物語は　住吉・うつぼの類。殿うつり・月まつ女・交野(かたの)の少將・梅壺の少將・人め・國讓(くにゆづり)・うもれ木・道心すゝむる・松が枝。狛野の物語は古き蝙蝠(かはほり)さし出でてもいにしがをかしきなり。

と見えてゐる。此の中で、住吉物語は現存のものは後世の改補作であるらしく、昔物語のそのまゝでは今傳はらないが、其の內容は源氏物語(螢卷)にも見えてゐて、現存の作と略同じ繼子物語であつたらしく想像される。宇津保は枕草子の異本に

住吉・空穗の殿うつり・國讓はにくし。

とあるに隨へば、殿うつり・國讓は宇津保物語中の卷名を指した事となる。但し現存の卷名に「國讓」はあるが「殿うつり」といふのは無い。前に揭げた流布本の文のまゝとすれば、殿うつり以下皆逸散した昔物語である。

殿うつり・國讓を物語名とすれば、それと梅壺の少將・人目・松が枝は、其の內容を想測すべき資料が、書名の他に全く無いから、それを通しての勝手な想像の他、輪廓をすら描出す事が出來ない。殘りのものとても、はつきりした內容は推知し難いけれども、埋木は「埋木の少將」、道心すゝむるは「道心すゝむる右大臣」といふのが主人公らしい事だけは風葉集によつて知られ、月待つ女は祐子內親王家紀伊集に

月待女といふ物語をみて

いにしへの月待つ里を見るにこそ哀れうき世はたぐひ有りけり

とあるので、多少空想の手懸りは與へられる。交野の少將と狛野の物語だけは、中でも特に喜ばれた昔物語らしく、兩書とも、前文の他にも枕草子にも出てをり、源氏物語にも出てゐる。但し交野の少將の方は、人名として出てゐるので、枕草子の

げに交野の少將もどきたる落窪少將などはをかし。

とあるのは、落窪物語(卷一)に書かれてゐる人物辨の少將を指してゐるやうで、それと

此の人名を書名としてゐる散佚物語との關係、卽ち落窪物語に此の他の昔物語中の人物を採入れて來てもゐるのか、或は名を借りただけで、別に落窪の中の一人物として創作せられてゐるのか、一寸明らかでない。併し落窪物語の同じ條の、世に交野の少將ともてはやす此の辨の少將が容貌の類なく美しい事、戀文一つ書いただけでどんな異性の心でも過たず捉へる不思議な力を有つてゐる事、それから

都の内に女といふ限りは、交野の少將めで惑はぬなきこそ羨ましけれ。

などあるのを、

なよびかにをかしき事はなくて、交野の少將には笑はれ給ひけむかし。

と見える源氏物語（帚木卷）の文に比べ合せたりすると、やはり何だか其の昔物語の主人公を、落窪の作者は少くとも豫想してゐたやうに考へられる。源氏野分卷に見えてゐる「交野の少將」は其の昔物語の主人公たること疑を容れない。片野羽林と呼ばれた右近少將藤原季繩の事跡を書いた物語であらうとは古物語類字鈔の黑川春村の說であるが、想像に留まる。モデルの當否は別として、實在人物の傳記だつたらうとは考へられない。やはり一種の作り物語で、相當面白い物であつたらうと推定する方が自然かと考へる。恐らくは物語文學の世界に於て「昔男」の業平の變身で――若しさうでなくても、少くとも確に一一或意味での光源氏の前身の位置を主張してゐる人物ではなかつたらうかと想測されるのである。（註二）

それから狛野の物語は、これも枕草子の後に引いた「交野の少將云々」の件にも出てをり、源氏物語螢卷にも其の物語を繪に畫いてあるのを、紫上が覽る事が記してある。清少納言は

狛野の物語は何ばかりをかしき事もなく詞も古めき、見どころ多からねど、

と評してはゐるが、月に昔を思ひ出て、蟲ばんだ扇をさし出したところが面白いと、前に「物語は」の條に此の物語にだけ幾十字かを割いたと同じ意味の事を、繰返して記しつけてゐる。小さい姫君があどけない樣子で晝寢してゐるところがあつた事も、紫上の見た畫面で知る事が出來る。

又源氏物語に見えてゐる古い物語では、別に

正三位物語（繪合卷に見える。）

からもり・藐姑射の刀自（蓬生卷に見える。）（「からもり」のことは宇津保國讓卷上にも見える。）

芹川・とを君（蜻蛉卷に見える。）

伊賀姥（たうの）（註三）（東屋卷に見える。）

等がある。後の鎌倉時代の石清水物語をいつの頃からか誤つて正三位物語として傳へてゐるものがあるが、古い眞の物語の方は失はれてしまつてゐる。とを君・芹川は更級日記にも出てゐる。からもりはかはほりの誤ではないかとも言はれてゐる。それから書名は出てゐないが內容から推測されるものに、

朱の盤（手習卷に話が出てゐる。）

がある。

昔ありけむ目も鼻もなかりける女鬼にやあらむ云々。（手習卷）

といふ文で、一條兼良公の著花鳥餘情（卷三〇）に之を注して、

朱の盤といふ繪物語あり。文珠樓の目無し鬼の事を書けり。

としてあるから、傳說的の昔物語であつた事が想測される。なほ奧州の會津諏訪の宮の怪物朱の盤の口碑（老媼茶話）が傳はつてゐるが、或は本源は同一であつたかも知れないと思ふ。

又更級日記の武藏國竹芝寺の緣起に何處か似たところのあるやうな芹摘みし物語といふ、賤しい下種男が主人の娘（一說高貴の御方）に及ばぬ戀をして、其の姬の食べてゐた芹を人知れず摘み歩いたといふ筋の物語もあつた事は、枕草子や狹衣物語や唐物語や色葉集などによつても知られ、其の內容は、少異はあるが俊祕抄・綺語抄・袖中抄等の歌論書に載つてゐるのでわかる。

其の他、惠心僧都の勸女往生義といふ物に

今めきの中將（註四）・長井の侍從（註五）・伏見の翁

などいふ古物語があつたとしてあると、顯註密勘（顯昭法橋の注に、定家の勘を加へた古今集の註釋書）に記し、又花櫻物語といふものを、道長に獻じた人があつた事が、赤染衞門集の詞書で知られる。それから源氏物語よりは少し後の作の更級日記や狹衣物語等にも、所謂昔物語と思はれるものの名が見える。卽ち更級日記には、源氏物語や在中將（伊勢物語）の下に、前にも言つた二書につゞけて

……しらゝあさうづなどいふ物語も、

とあり、他の箇處には、長恨歌を物語に作つてある事や、かばね尋ぬる宮といふ物語を親族から持たせてよこした事が書いてある。しらゝ物語の事は「しらゝの姬君」といふ女主人公が、迎へに來ようと契つた夫の少將が遲いのを待ちわびて「石に我が身ぞなり果てぬべき」と詠じた歌が、支那の望夫石や、我が松浦佐用姬の古傳說と竝べて、十訓抄（卷中）並びに古今著聞集（卷五）にも出てゐるので、片鱗を窺ひ得る。狹衣物語に出

てゐるのは、

みづから悔ゆる（卷一之上）

ふせご（卷二之下、卷三之下）

隱れ蓑（卷二之下、卷三之中、卷四之中）

唐國（卷二之下）

大津の王子（同）

蘆火焚く屋（卷三之中）

袖濡らす（卷三之下）

おほゐの物語（同）

玉の緒（卷四之中）

かはぼり（同）

等で、此の中、唐國とおほゐの物語とは、後の濱松中納言物語に影響してゐるところのある作であり、隱れ蓑は寶物集や色葉・風藥等にも見えてゐるばかりでなく、特に無名草子に推賞して、

又隱れ蓑こそ珍しき事にとりて見どころ有りぬべきものの、餘りにさらで有りぬべき事多く、詞遣ひいたく古めかしく、歌などのわろければにや、ひとてに言はるゝ取かへばやには、殊の外におされて、今はいと見る人少きものにて侍る。哀れにも珍しくも、さまゝに見どころ有りぬべき事に思ひよりて、むげにさせる事もなきこそ口惜しけれ。

と評し、今取かへばやの作られる位なら、今隱れ蓑を作る人のあれかしとまで言つてゐるものである。右の評言と、狹衣中の記述と、題號とから推して一種の如意寶を使ふ隱蓑の中納言を主人公とした傳奇的小說であつた事は確に知り得られる。

以上の諸物語は、中には源氏と同じ頃の物或は稍後の物もあるかも知れないが、大體に於て所謂昔物語と看ていゝと思はれる。何れも亡佚して今傳はらないのであるが、源氏物語の出現するまでに、現存の昔物語や歌物語以外に、それらと竝んで行はれた數々の物語が隨分在つたといふ事だけは是非知つて置く必要がある。我が國小說の胎生期から源氏物語に成長するまでの道程段階をなした、そして紫式部の創作慾を鼓吹し、藝術心を育くんだものは、現存三四の作品のみでは無かつたといふ事實を忘れてはならない。

なほついでに言ふ。源氏以後にも、以前に增して無數の小說が作られた。そしてそれらにして散佚した物も亦實に多い。異名同書の混淆もあらうが、風藥集・色葉集・

無名草子・明月記等を始め諸書に載せた古代から中世へかけての物語名は夥しい。

註一　「其の後、平中物語の傳存が紹介されて、現存の歌物語に又一を加へた。」

二　拙著、對源氏物語講話卷一、二〇二―二〇八頁參照。

三　源爲憲撰の三寶繪の序にも、「伊賀專」と見える。河海抄・花鳥餘情等の記述によつて按ずると、「たうめ」は諸國各地に居た狐神を祀る巫の老女らしく思はれる。

四・五　三寶繪の序に、「伊賀專」と竝べて、「今樣中將」「長居侍從」と見えるのと同じであらう。なほ同條に「土佐の大殿門」といふ散佚物語も見える。

竹取物語小論

よく引かれる詞であるが、源氏物語繪合卷に、

まづ物語の出で來はじめの祖なる竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合はせて爭ふ。

と見えてゐる。古い物語中の材料、場面を畫にした所謂物語繪を左右から出して勝負を爭ふ其の取組をいつたのである。そして竹取の方は、

繪は亘勢の相覽、手は紀の貫之書けり。

としてある。紫式部の時代に斯く物語の始祖と目してゐたのであるから、先づやはり之を所謂昔物語の最古のもの――少くとも其の一――としておいてよいのであらう。さうしてそれ以後の物語で亡佚したものが隨分多いのに、此の「出で來はじめの祖」の竹取物語が、今日傳存してゐて、我が小說史の源泉、搖籃時代の物語の形態を明示してくれてゐるのは、眞に興味深く、嬉しく、感謝にすら値すると言ひ度いのである。

「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつゝ、萬づの事に使ひけり。名をば讚岐造麿となむいひける。」

といふのが書き起しである。少し國文學を知つてゐる人なら直ぐに氣がつくが、今

は昔」といふ冒頭が、今昔物語――その名稱の由つて來る所が亦其處に在る――や宇治拾遺物語と全く同じである。"Once upon a time"である。"Es war einmal"である。

「昔々、或所に爺と婆とがあつたとさ」の御伽噺と何等擇ぶところは無いのである。今昔物語などを引くるめてなら、所謂說話的な文學と呼ぶべきであるが、竹取物語は其の中でも、童話的形態と內容とを殆ど完全に近い程に包持してゐる小說である。つまり製作童話であると言へる。但し讀者として明らかに兒童のみを目ざしてゐるのでない事は言ふまでもない。成人のもつ童心に、或は兒童と目しての成人に、話しかけてゐるのである。否、兒童と成人との境目を區ぎつてなどといふ意識は判然とは恐らく作者自身にも發らなかつたのであらう。古代人の心理、古代の小說といふ上からは、寧ろ當然の事である。併し一面かうしたものが生れるに他の理由もある。無論彼等には成人の詩や文はあり餘る程あつた。日記でも漢文で堂々と記した。が、「女もしてみむとて」と土佐日記の筆者が和らげて書いた所謂假名文で綴られた物語の讀者は、少くとも形の上では、自然婦幼が中心として豫期せられねばならなかつた筈である。男性の大人達も各〻讀者の一人となつて、支那的儀容生活に取り縛られた間隙を裕げて、私かに自分の故鄕に歸つた時のやうな心安さと懷かしさと、親しさと歡びとを見出しつゝ、打興じたに違ひない。貫之が假名文の文學的日記を書いた心持も、つまりはそれではないか。而も、そしてやはり前述の理由からしても――素材としては、童話的、少くとも說話的なものが必然に擇ばれなければならぬ以上、形態も表現も童話的であるに不思議はないのである。かうして古代小說は、中世の御伽草子並びになほ後世の落語と、種々の點に於て共通したものを有してゐるのである。

卷頭の數行をなほ讀み續けてゆくと愈〻それは鮮明に出てゐる。前に掲げた文を承けて物語はいふ。

その竹の中に、本光る竹一すぢありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば三寸ばかりなる人いと美しうて居たり。翁いふやう、「われ朝毎夕毎に見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家に持ちて來ぬ。妻の嫗に預けて養はす。美しき事限なし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。竹取の翁此の子を見つけて後に、竹を取るに、節を隔ててよ毎に、金ある竹を見つくる事重なりぬ。かくて翁やうゝ豐になりゆく、

竹の中に光り耀いてゐる美しい小さな女の兒、掌に入れて歸つて、籠の中に入れて育てるといふのからもう純然たる童話である。拾ひ手と拾はれ手の性こそ同じでないが、桃の中から躍り出した丸々の强い男の兒と、何れは同じ御伽の夢の國の種族である。丈こそ二寸伸びたれ、足駄の下から「物申さん」と呼ばはる愛敬者に先づは劣ら

ぬ芥子人形振りである。隨つてこれが引受け手はやはりお爺さんと十對の親切な御婆さんでなければならない。翁が此の子を獲て後、金の竹を見つけるやうになつて、次第に有福になつてゆくのも、童話式である。「子になり給ふべき人」といふのは、翁の職業柄「籠になり給ふ」と洒落れたのである。翁の剽輕さを想見する一方、我等は上品な古代の落語家を其處に見出す。そして此の言語上の機智的な洒落は、此の物語に一貫して屢〻、特に數箇の或小說話に纏まつた各段落の結末には、大抵いつも附せられてゐる。無論中には、上品とは言へないのもあるし、又かなり苦しい牽强もあるが、燕の子安貝を採らうとして大失敗を演じた上に、生命まで賭けてしまふ結果になつたのを、

思ふに違ふ事をばかひなしとは言ひける。

又、それを憐んで、流石に姫の心も少し動いたのを、

それよりなむ少し嬉しき事をばかひありとは言ひける。

などは、先づ自然で上出來の部であらう。結尾の「不死」「富士」の結びつけ工合も、あれ位なら許されてもよからう。少くとも氣分に於て嫌味が無いから。

餘り早く物語の結末に來過ぎてしまつた。もう一度前へ還らう。

此の物語は一名をかぐや姫の物語とも呼ばれてゐる。前に引いた源氏の繪合卷には「竹取の翁」とあるが、同じ源氏の蓬生卷には「かぐや姫の物語の繪にかきたるをぞ云々」と見えてゐる。かの竹の中から獲た女兒は、愈〻美しく生立つて、家の內は其の耀き出る光に滿ち渡つてゐた。「なよ竹の赫映姫」といふ名がつけられて、これから姫は小人國の世界を出て、人間社會との接觸が始まる。翁はもう立派な有德人となりすましてゐた。姫は打出の小槌の力を借りずに、人間並に大きくなつて、世界のあらゆる異性を魅惑するに足る程艶麗な年頃の女性美を發揮してゐた。之を取卷いて型の如く妻爭が開始せられ、就中熱心な五人の貴公子達に、最後の解決を與へる爲に、姫の希望でそれ〴〵試みの難題が課せられる。

一人一人づつ說話が片づいてゆく。第一の報告者は——そして無論失敗者は——「天竺の佛の御石の鉢」を所望せられた石作皇子である。持參した贋の鉢を看破せられて、門に棄ててからもなほ賴みをかけた一首の厚顏しさを、

故鉢を棄てて又言ひけるよりぞ面無き事をばはぢを棄つとは言ひける。

といふのが、例の作者の落の附け振である。

第二は車持皇子、誂へた通りの「蓬萊の玉の枝」が目の前に差出された時には、さしも

の姫も胸が潰れた。眞しやかな皇子の漂流譚に翁は頻りに感激した。妬ましいやら腹立たしいやら、困じきつた姫の氣の毒な樣子、勝誇つて緣ににじり上る皇子の圖圖しさ、それを「ことわり」と同感して、早やそゝくさと奥を片づけ始める翁、而も作物所の匠等が驅込願に詭計の底が忽ち割れて、笑み榮える姫、居たゝまらぬ皇子、それに

竹取の翁さばかり語らひつるが、さすがに覺えて眠りをり。

といふ掌返す現金さは、中でも一番面白い。

「火鼠の裘」の右大臣阿倍御主人、「龍の首に五色に光る玉」の大伴御行の大納言、燕の持たる子安貝」の中納言石上麻呂と姫をめぐる一群の公子連の、難題が絡んだ妻爭の渦卷の一つ〳〵が、滑稽な悲哀の記錄となつて、替る〴〵競爭圈外へ投げ出されて行くところに、童話的な興味は愈〻十分である。最後の人物が成功せぬのは、まだ說話の大切な終末が殘されてゐるからで、而も石上中納言のみが、五人の中で姫に少し同情を寄せられるのは、其の愚直の性格と憫むべき死にざまとに由るのではあるが、所謂末子成功說話の形を普通取つてゐる末の者の勝を語る童話心理におのづから合致する心持が、變つた姿で現れてゐると看る事が出來る。

此の童話味はずつと終まで續いてゐる。けれども後半は稍それは稀薄になつて、今度は傳說的な空想が漸く濃くなつて來る。戀の獵師達の狙ひは、各自確かなつもりでも、いつも的を外れた。最終の射手は畏くも時の帝であつた。併し、御狩にことよせての行幸も、目にもとまらぬ影と身を隱す怪しの姫が振舞に、空しく御輿を還されねばならなかつた。人間の戀は結局皆失敗であつた。かくて人の世の戀物語は竟に作り出される事無しに、かの戀の對象は、驚異の眼をみはる地上の人々を後に、急に手にも取られぬ天上界のものとなつてしまつた。武士共の弓箭も用を爲さなかつた。育ての親の翁夫婦が血の涙も引留め得なかつた。彼女の眞の父母の家は、仰ぐも遙けき月の都、なよ竹の姫は風早の三保の松原に降り來て舞の袖を反した天つ少女と同じ御空の天人の群の一人であつたのである。天の羽衣、不死の靈藥、下界の淹留、月宮からの迎、支那式神仙譚と佛敎的思想とが一つになつて、傳說的色彩を濃厚にしてゐる。竹取物語が寫實小說（"Novel"の譯語としての）と呼ばれる事のあるのは、此の後段に於て名傳奇小說（"Romance"の譯語としての）と區分する立場から、屢〻實共に相應してゐる。前段は傳奇的分子も含まつてはゐるが、童話としての性質が勝つてゐる。全作品としては、一箇の藝術童話としての取扱を受ける方が寧ろ妥當であると思ふ。（素材としての一部に民間童話的分子が採入れられてあつたとして

も、それは茲では別問題である。）唯前にも言つたやうに、嚴密な創作意識の下に生れた所謂"Kinder-Märchen"でない事だけは、これも亦否定し難い事實である。成人の爲の藝術童話、やはり古代の御伽草子である。そして中世の數多くのそれに比して、却つて藝術値の高いものとして眺めらるべき作品である。

此の物語の素材となつた主な傳說的要素に就て、三四述べてみると、先づ(一)竹取翁といふ名前に關しては、萬葉集卷一六の竹取翁が九箇の仙女と逢うての唱和の歌と、說話上の直接交涉は無いがやはり何等かの――少くとも名稱上の――關係はあると思はれる。(二)竹の中から子供の生れる奇談、それは廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經序品・佛說榛(ない)奈女祇(耆)域因緣經・佛說奈女耆婆經、或は華陽國志・後漢書西南夷傳などに本據を求めようとしてゐるのは、契沖や小山儀や田中大秀等此の物語の研究者達であるが、同時にこんな植物から出生する說話は、又世界の諸國に求め得る童話乃至特に英雄出生傳說の一說話型である事も注意せねばならぬ。特に大秀の竹取物語解に引いてゐる華陽國志の竹王や、契沖の河社に引いてゐる西南夷傳の竹夜郎などは、單に竹から男兒が生れたといふだけの類似に過ぎず、同一異傳である此の說話は、私は寧ろ我が桃太郎童話と關聯せしめて考ふべきものと信ずる。少くとも直接には竹取物語に關係してゐないものと考へる。却つて佛典特に月上女經が全說話の構想に多少の影響を與へてゐようとの幸田露伴博士や、近くは山岸德平氏（雜誌國語と國文學昭和二年五月號）やの意見は面白いと思ふ。(三)五人の求婚者の妻爭は、內地の先進傳說によりは、祇域因緣經の七國王が梵兒の女を爭ふのに近い、少くとも類型をなす說話と言ひ得る。これは明らかに七王中の一人が成功するのであるが、竹取には其の代りに難題のモーティフが含まつてゐて愈童話的條件を具備してゐる。(四)天女の昇天は漢武內傳を出典とする藤岡博士（國文學史平安朝篇）、月上女經を擬する山岸氏がある。いづれも傾聽させられるが、他に嫦娥傳說や、大秀の引いてゐる日本靈異記の大和の漆部造麻呂（うるべのみやつこまろ）が妾の昇天說話も間接には參考になる。又丹後風土記の白鳥處女說話（羽衣傳說）なども影響せなかつたかを保し難い。其の發生の時代は明白でないが、天女を養つて子とした翁の富貴になるなどは、類話である。但し直接交涉の有るか如何かは定め難い。（尤も、仙女と婚して富貴になるのは、螺女でも朝鮮の羽衣傳說でも、此の種の說話に珍しくない型である。）(五)富士と不死の通俗語源說的解釋から發生した傳說が此の物語の結末に材料を與へたとなす高木敏雄氏の說（比較神話學）は採りたくない。前に言及したやうに、他の各小段の終に附した滑稽な言語の遊戲の一と看るだけで十分であらう。富士神仙說は別に在つたとしても、不死の藥と若し結合して來たとすれ

ば、寧ろ本書からの事であらう。

其の他、其の不死の藥や、佛の御石の鉢や一々の部分的素材の典據の穿鑿に就いても、先哲は腐心してゐるが、玆に說くの要を認めぬ。(特に大秀の「男せざりし人」の例話の考證などは聊か的を外れて滑稽に墮せんとさへしてゐる感がある。

唯是非一言を費して置かねばならぬのは、小異の他、此の物語と殆ど全く同じ內容を有する說話が、今昔物語(卷三一)に收載せられてゐることである。藤岡博士は此の物語の方が古く、それを節約して收めたものだと論じてをられる。(平安朝篇)斷定を下すに猶多少の餘地があるやうでもあり、別に民間傳說が在つて、一方は今昔に收錄せられ、一方は竹取の作者に小說化せられたとも考へられない事もないが、今昔のそれを通して推知し得る形が、餘りに本小說と近接し過ぎてゐて、製作說話から出たと觀る方が自然のやうな點が多いから、猶博士の考が妥當かと思はれる。但し、節約して收めたと言ふよりは、竹取の作者によつて作り出だされた此の物語が、既に今昔物語集の成つた時代までに、あんな形に傳說化してゐたと言ふ方がもつと自然ではあるまいか。

又釋由阿の詞林采葉抄(卷五)や、源光行の海道記(古くは鴨長明巡歷記と謬り呼ばれてゐた。采葉抄にも、平安朝篇や比較神話學にも、其の名で引かれてゐる。)にも此の說話は載つてゐるが、これこそ更に後に傳說化したもので、前者は本地物の形をとるに至り、後者は鶯姫の物語になつてゐる。何れも帝とのローマンスが中心となつてしまつてをり、前者には坂上田村麿まで登場させられた。國名風土記のも鶯姫であるが、これは愈、地方的、民俗的口碑の姿に變つてゐる。

一要するに素材としての種々の類話を、古傳說や外國說話中に斷片的には檢索し得るが、竹取物語の作品としての興味と創作値とは、說話としての是等の材料との比較ではなくて、是等の材料が如何に作者自身のものになつてゐるか、作者自身のことばで語られてゐるか、そして如何に時代生活そのものと一になつて我々の眼前に展げられてあるかに在らねばならぬ。

出來上つた竹取物語について眺める時、其處に紛れもない平安朝生活の姿が、はつきりと浮出てゐる。戀の遊戲をいのちとする當代貴族生活の寫寫にさながらに接し得る。少しばかりのたばかりや財や地位や家ぴと共を有してゐる事によつて、己れの偉大さ優越さを信じようとし、又信じてもゐる憐むべき人々が、飽くまでも自らを守るに怜しい、而も常に異性に對して自己の存在を忘れさせまいとする一女性か

ら、自分達の力についての脆い幻想を見事に打壞られて、切實に眞摯なほんたうの人間に還らしめられる事を、讀者と共におのづから要求せられるところに、時代相の皮肉が宿つてゐる。」作者の豫期しなかつた事ではあらうが。

姫をめぐる一群の中には、人間の種ならぬ御方をも數へる。否、狩の行幸に託せて造麿が山本の家を訪らひ給ふ帝すらも、畏れ多い事ながら、「み籠持ち、み掘串持ち」て「菜摘ます兒」に「家聞かな。名告らさね」と、うちつけに宣ふ泊瀬朝倉宮に天の下しろしめしし天皇の御妻ではないか。引田部の媾が花蓮と盛りであつた童女の昔も眼に浮ぶ。平安朝とはいへ、未だ初期である。奈良朝以前から續いて來てゐる上古の氣分が、猶かなりに此の物語に漂つてゐるのは怪しむに足らない。かの五人の中の右大臣阿倍御主人、大納言大伴宿禰御行、中納言石上朝臣麻呂は、いづれも實在した人物の名を借りてゐる。官職までさうである。御行は贈右大臣、又麻呂は左大臣にまで歴任し、三人の中では最も遲れて、養老元年三月に薨じた。石作、車持も名だけは假空ではない。（車持皇子を藤原不比等なりとする竹取物語考の加納諸平の說は泥んでゐると思ふ。彼は此の物語を史實に關聯せしめて眺め批判しようとしたが爲に此の過誤に陷つたのである。）「兎も角作者が、昔時の實人物の名によつて、物語に眞らしさと興味とを增さうとしてゐる用意は窺はれる。そして實生活に觸れようとする態度と共に、物語の――小說の將來の――寫實的傾向を暗示してゐると同時に、亦上古の史實と傳說とが分離せず境界が模糊としてゐた名殘を留めてゐるといふべきで、此の點でも古代小說の鼻祖として、記紀や風土記から物語文學へ推移し展開して行く過程を示すものとして當然の現象と看られ得るのである。

更に女主人公かぐや姫は、小智や官位や權威や、そんなものの一段上に立つて、自分で自分を弄ぶのを知らずに集ひ來ては入れ替る多くの男性の惱ましく躍り狂ふ痴態を、自己の美しさに關する滿足な誇りを感じながら靜に冷やかに笑ましげに眺めてゐるところ、正に平安朝の思ひあがつた女性達の性情の一面と、此の時代に於ける彼等の社會的地位とが具體化され又誇張されてゐるではないか。而も彼女は地上の爛肉に汚されるには餘りに高く淨い蒼穹の靈光である。醜い現實は如何に理想に近い頂點に達しようとも、到底現實である。理想は、至美は、聖なる愛は、竟に永遠に天上のものである。併し、かうした平安朝生活の中心生命ともいふべき戀のたはむれ、其のものについて、甚だ無關心であるやうな姫も、やはり暖い涙は有つてゐた。純眞な愛の持主ではあつた。養ひ親との別離に堪へ得ない女らしい子としての感情

は、又あやにくな帝の御志におのづから牽かれ寄る優しい心であり、子安貝を拾はうとして身を贄にした最も正直なそして弱い石上中納言に對してのみ「少し哀れとおぼ」させた同情である。「天の羽衣を身に着けるまでは、月の宮人にも人間の血は通つてゐた。さうして帝にのみは「御返りごと流石に憎からず聞えかはし」、且其の「天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出で」たところに、なほ皇室尊崇、おふけなき身の譽を畏み嬉しむ我が國民性の美しい一面が映つてゐる。又女主人公の住居が賤しい老夫婦の家である事が、これからの小說が殆ど全く宮廷貴族社會中心になつて行くのに對して萬葉の生活からの推移をも語つてゐるかの觀があるのも面白い。

さて、竹取物語の作者は此の面白い說話を、超自然的な空想と現實的な氣分を綯ひまぜる事によつて彩りながら、愉快さうにきび〳〵したことばで語り續けて行く。そして其の物語を一層面白く印象させる爲に、語り方にをかしみを附加する手段を採つてゐる。これはかうした童話的のもの、乃至小說の初期のものには當然な現象であらうが、內容の滑稽（但しそれは事件上の偶然の失敗や無知から生ずる反豫期の滑稽が主で、僅に竹取翁の上に多少の滑稽的性格が賦與せられてあるのを看る。それは眞摯（まじめ）な滑稽であるのが、例へば月の都からの迎へ人を引搔いてやらうなどと力む邊りにもよく表されてゐる。）の他に言語上の同音異義の滑稽が多く用ゐられてゐる事は前に述べた通りである。そしてそれは此の作者獨特のものではない。古今集の俳（誹）諧歌と同趣味である。土佐日記の中に挿入せられてゐるそれと同じ滑稽でもある。特に此の言語の洒落が各小段の終に附いてゐるのが、此の物語の形態上の一特色であると共に、各獨立小說話が又それ〴〵歌で終る形の上に、此の物語が構成に於て抒情詩の流れを直接承けてゐる事を示し、所謂歌物語と密接な交涉を有つものである事を語つてゐる。そして內容に於ては前代の柘枝の仙女や浦島子の奇譚に連接して、固有と外來と、所謂三國の思想と習俗と說話的分子とを巧に融合させ、表現の樣式に於ては、記紀萬葉から源氏への一轉期を最も鮮かに劃して、而も立派に成功してゐる。部分的には昇天の段の敍述など特にすぐれてゐる。玉の枝や子安貝の段などもいゝ。

繪合卷の藤壺中宮の御前での爭ひには、宇津保に負けた。併し、作品としての價値は果して宇津保の下位に置かるべきであらうか。「物語の出で來はじめの祖」としてのかぐや姬の物語は、單純な統一をもつ、素朴で簡勁な筆致の中に輕いユーモアの流動してゐる明るい美しい短篇の傳奇小說である、藝術童話である。「稚くとも完から

ずとも、なほ懐かしく可愛い我が小説史の揺籃である。私は源氏以前の小説としては、先づ此の物語を取りたい。（さうして此の竹取物語の童話味とユーモアの更に延長し進展した姿をば、私は源氏物語の玉鬘卷に於て看るのである。事實、構想上にも詞章上にも竹取が範を垂れてゐることは確に否むことは出來ない。そして大夫の監（げん）の滑稽に於て、かなりに性格的に一歩を進めてゐる點が紫女の手腕であらねばならぬ。）

此の物語、作者は不明（源順といふ傳説は誤であらう。）創作の年代は延喜以前説が普通で、もつと限定しては弘仁以後（弘仁以後といふのは、物語中の「頭中將」の官職設置の年時に據つての推定で、竹取物語新釋の春山頼母・井上頼文兩氏の説）などとも言はれてゐる。兎もあれ、伊勢物語と相並んで平安時代初期を記念する名作品である。

散佚物語三つ

一　初雪物語

無名草子に

初雪といふ物語御覽ぜよ。それにぞ物語の事は見えて侍る。

とある。右の文によれば、此の物語の中に、他の諸物語に關する相當説明的な記述があるらしいから、それを通して昔物語に就いての概念もかなりはつきりし、又散佚物語の數種に就いての有益な資料が獲られるであらう事を疑はない。不幸にして此の初雪物語も亡佚して傳はらない。

此の初雪物語と云ふのもやり一種の作り物語であるらしく考へられる。其の名は無名草子以外にももつと古く見えてゐる。即ち榮華物語かゞやく藤壺卷の冒頭に、

大殿の姫君十二にならせ給へば、年の内に御裳着ありて、やがて内に參らせ給はむと急がせ給ふ。よろづし盡くさせ給へり。女房の有樣ども、かの初雪の物語の女御殿に參りこみし人々よりも、これはめでたし。

と記されてある。是は上東門院入内の派手やかさを此の物語の内容に比したのであるが、榮華物語の作者に定説がないとしても、所謂正篇の部であるから、初雪物語も源氏物語等より後のものと斷定する事は許されないであらう。寧ろ古物語であつたらうと想像する事すら却つて不自然ではあるまい。但し右の榮華の文は上東門院入内當時を回想して書いたものであらうから、必ずしも事實としての彰子入内當時よりも以前の作品であつたと推定してしまはねばならぬ理由もない。

兎に角此の物語は平安時代に愛讀せられた小説の一で、榮華物語の成つた時代には一般に親しまれてをり、そして無名草子の書かれた鎌倉初期迄は傳存してゐた事だけは明白である。何時頃から散佚したか分らないが今日覽る事の出來ぬのが惜しい。偶然何處からか發見される事でもあつたらば、などと時々空想してみる。

二　とほぎみ

更級日記の、をばの許から著者が源氏物語をもらつて歸る條の

源氏の五十餘卷、ひつに入りながらさい中將とほぎみ、せりかはしらゝ、あさうづなど云ふ物語ども、一ふくろとり入れて、得て歸るこゝちの嬉しさぞいみじきや。

と云ふ有名な文に見える「とほぎみ」以下の四種の小説は何れも散佚物語である。右の「とほぎみ」と「せりかは」とは普通二種の物語とせられてあるが、源氏物語蜻蛉卷に、

數多をかしき繪ども多く、大宮も奉らせ給へり。大將殿打勝りてをかしきども集めて、參らせ給ふ。芹川の大將のとほ君の、女一宮思ひかけたる秋の夕暮に、思ひ佗びて出でて行きたる畫(かた)をかしく書きたるを、いとよく思ひ寄せらる。然ばかり思し靡く人のあらましかばと、思ふ身ぞくち惜しき。

とあるのを見れば一の小説らしくもある。河海抄卷二〇にはこの條を註して、

古物語歟。水原抄云、遠君歟云々。或又十君歟云々。此一帖行成卿自筆本をみ侍りしかば、せりかはの中將とありき。惠心僧都の勸女往生義といふ物に、いまめきの中將長井の侍從伏見の翁など云ふ古物語ありといへり。是皆今の世に不傳。此せりかはの中將さやうのたぐひ歟。

と見えてゐる。伴直方の物語書目備考にも名物考を引いて、

此物語今傳はらず。さらしな日記に見えたり。遠君か、十君にや、いまだ詳ならず。

としてある。若しとほ君を人名とすれば、少くともせりかは物語中の人物で、せりかはの大將(若しくは中將)の子供らしく讀まれる。更級日記の記述では二書の様でもあり、若し一書とすればせりかはが男主人公で、とほぎみが女主人公の様にも一寸思はれるのであるが、とほぎみがせりかはの子であるとすれば、男子か女子か、名前から云へば姫君の様にもあり、女一宮を懸想する點からすれば男でなくてはならない。有朋堂文庫源氏物語の頭註には「とほぎみ」を、

人名歟或はたうぎん(當今即ち今上)のうつし誤りなるべし。

とある。是も一の解釋で、その代り大將對女一宮となるわけである。併し更級日記の文に見ても、とほぎみと云ふ小說が別になかつたのであるとすれば、やはり芹川物語中の人物であらうから、誤字と卽斷するのもどうであらう。若しかしたら、とりかへばや物語の樣に、女裝した息男――せりかは大將の――が女一宮を慕ふと云ふ樣な筋でもあつたのではなかつたらうか。併しとほ君と云つても女とは限らない。第十子であつても、なくても、男子の童名では普通である。道長の子賴通は童名たづ君、その弟敎通はせや君、高光少將はまちをさ君、伊周は小千代君、源氏の空蟬の弟も、浮舟の弟も小君である。さうすると、幼童と少女の戀物語、つまり源氏の夕霧・雲居雁、或は狛野物語や、伊勢物語の筒井筒式物語であつたのかも知れぬ、などとも思はれる。

物語書目備考に「芹川大將ものがたり」の項に

山岡明阿云、此ものがたり今傳はらず。芹河の御行などの事書しものか。

と引いてゐる山岡俊明の推測は、當つてゐるとも思はれない。尤も芹川大將物語でなくて、單に芹川物語と云ふのなら又右の樣な想像の餘地もある。「芹河の御行などの事」とは恐らく大鏡（下卷）の昭宣公基經が幼時勅命に依つて琴の爪を拾ひに行つた話でも指すのであらうか。

古物語類字鈔の黑川春村も此の物語に就いては疑問を抱き、「とを君物語」の條には

按に此物語不審の義あり。せり川の條にいへるをみるべし。

と云ひ、「せりかは物語」の條には

按に、源氏にせりかは・とを君を一部の物語とやうにかけれど、更科にては又二種のものなるが如し。姑く二種のものとして、後考を俟つにこそ。

と二書と見ながら又未解決のまゝで問題を殘してある。而も更級日記で二書とするのも稍常識的で、特に確定的な論據があるのではない。「とほぎみせりかは」と云ふ一の題名かも知れない。若し又二書であつたら芹川物語中の人物とほぎみを、又主人公とする他の小說が續いて出て行はれたのであらうも知れぬ。或は又一の物語の上下にでもなつてゐて「とほぎみ」「せりかは」それ〴〵の卷の名であり、又離れて各々の物語の樣にしても行はれたのかも知れない。憶測を加へれば如何樣とも面白い假定が成り立つが、要するに更級日記所見の「とほぎみせりかは」が、二書たる事の確證なき以上、そして却つて蜻蛉卷に一書たる推測を助ける樣な記述がある以上、春村の疑問を一層深めて未だ輕々に二書と斷じてしまへない事に就いて再考察する餘地

が十分ある。何とかして此の解決に資する參考の材料がほしいものである。

三　しらゝ物語（附、しをう）

前項に引用した更級日記の文中に見える「しらゝ」と云ふ物語も散佚して今傳はらない。「とぼぎみ」と同じ様に比較的短い物である事は、伊勢物語や「あさうづ」等と一緒に一つ袋に入れたと云ふのでもわかる。その物語の精しい内容は知る事が出來ないけれども、唯十訓抄（卷中、第六、可レ存二忠直一事）に、支那の望夫石の傳說（これにわが松浦佐用姫の領巾麾山の故事が並べてある。）を掲げた次に、

しらゝと云ふ物語にしらゝの姫君、夫の少將の迎に來んと契りて、遲かりしを待つとてよめるとあるは、このこゝろなり。

たのめつゝきがたき人を待つ程に石にわが身ぞなりはてぬべき

とあるのでその片鱗を窺ひ得る。古今著聞集（第五、和歌、第六）にも全く同文で出てゐる。卽ちこの小說の女主人公がしらゝの姫君で、この相手の男性が夫の少將、そして迎の約束をしながらなか〳〵姿を見せぬので、姫君が望夫山の悲しみに悶えた、と云ふ筋の所がある事だけは推知し得られる。

十訓抄よりも少し早い藤原範兼の和歌童蒙抄（第三）に、右の「石にわが身ぞ」の歌を「しらゝの物語」の第二に出てゐるとしてあるから、同物語が、他の同時代の多くの物語の樣に數卷から成つてゐた事と、前述の筋が物語のやゝ進んでからの部分にある事とを知る事が出來るのである。

望夫石の傳說は諸書に見えるが、「幽明錄」に

武昌陽新縣北山上有望夫石、若人立者。傳云、昔有貞女。其夫從役走赴國難、攜弱子餞送此山立望而死。形化爲石。

とあるが有名で、童蒙抄にも、十訓抄（著聞集も）にも之を引いてある。續歌林良材集には神異記を引いてあるが、同一の傳說である。

をとこ待てる女に代りて、　能因法師

石とだになりけるものを人待つはなどか我が身の消ぬべかるらん

といふのや

戀河に沈むにつけて思ふ哉我が身も石になるにや有るらん（永萬二年重家卿家歌合、戀）　藤原頼保

逢ふ事の難き歎きに戀ひ死なば我もや野邊の石となりなん（永萬二年五月經盛卿家歌合、戀）　小侍從

等の歌が夫木集（卷二二）に載せてある。何れも此の支那傳說から來てゐるのであらう。

（唐物語には他の傳への望夫石傳說が見える。以上の歌の中には――特に小侍從の作などは――この方から來てゐるのもあるかも知れず、又貞女峽の口碑の方に交渉を有するのもあるかも知れない。結局は同種の類話ではあるが）が、既に早く「しらゝ物語」にも上述の様に詠まれ、女主人公の姫君が佐用姫よりは先に石化しようとしてゐるのが面白い。(註)

春村の類字鈔に「しらゝ物語」の他に「しう〳〵物語」として

こは色葉集に見ゆれどおぼつかなし。疑ふらくはしらゝ物語の寫誤なるべし。

と記してある。色葉集（卷三、物語名）に出てゐるが、「しう〳〵」ではなくて確かに「しらゝ」と思はれる。

物語書目備考には「しらゝ物語」の條に

あまのしらゝと同じものなるにや

と註し（同書、安部にも「あまのしらゝ物語、八雲御抄卷一」として出してあり、八雲御抄にも其の名で出てゐるのを見れば、同書らしくもある。）且

名物考云、この物かたりは紀井國のしらゝのはまに住人の事作れりといへり。うつほものがたりの吹上の卷に源氏の宮の住み給ひし事書しがそれをうつせしか、またこの名は平兼盛の家集のうち「君がよの數ともとらん紀の國のしらゝのはまにつめるいさごをこれらをもつて名付しにや。

と見えてゐる。宇津保の吹上は紀の國の濱ではある。又播磨守が碁のまけわざに州濱の形を模して詠じた

きの國のしらゝの濱にひろふてふこの石こそはいはほともなれ

の歌が紫式部日記に記える。催馬樂にも謠はれてゐるらしい「紀の國のしらゝの濱」は有名なものであつたらしい。紀伊國牟婁郡白濱で、白い碁石の原料の產地として知られてゐる。十訓抄を通して知る女主人公が「しらゝの姫君」と云ふのと「あま」とが不似合のやうでもあるが、しらゝの濱の海人の子とか、或は海人に養はれた姫君とか云ふのであつたとすれば不都合なく、却つてロマンチックな昔物語らしい。題名の「しらゝ」と云ふのも特殊であるから、恐らくはこの紀の國の地名であらうし「石にわが身ぞ」の歌も望夫石に關係ある事は無論であるが、又この濱の名高い石に緣があるのであらう。

色葉集（卷三、物語名）に「あま」、八雲御抄（卷一）に「海人」、風葉集（雜三）に「あま人の女」とみえる「あま物語」（これも散佚物語である。）と云ふのがあつて、寶物集（卷五）に「海士子物語」とあると同書らしいと類字鈔に云つてあるが、寶物集の文と云ふのは

難波の浦の蜑の子は十六年といふに願力に依て兼光少將の妻と生れあひたりとぞ海士の子物語に

は申たるぞ、願の志かくのごときの事に侍る故なり。無下にちかくの事には侍らずや。

と云ふので、夫が兼光少將と云ふ點だけはしらゝ物語に矛盾しない。想像を許されるなら、しらゝの濱に生ひ立つた姫君が、一夜の契かそれとも夢想か何かで宿緣の夫の都迎を待つとでも云ふ筋なのではなかつたらうか。それが難波の話として作られた類話が、海士子物語といつたやうな關係なのではなからうか。勿論これは單なる憶測に過ぎない。風葉集の「あま人の女」の歌は、新古今（雜下）にも見えて名高い彼の

白浪のよするなぎさに世をへつゝあまの子なれば宿も定めず

の一首で（源氏夕顏卷の引歌の一つである。）

なにはわたりにて見あひける人の宿をとひはへりけれはよめる

と詞書がしてあるから、寶物集所引の海士子物語の地名とは一致する。源氏に引かれるほどであるから、この方もよほど古い昔物語でもあらうし、「しらゝ物語」との先後は俄にきめる事は出來ない。風葉の右の歌の直前の一首「いはやの內大臣北方」の歌といふのも、古本岩屋物語（岩屋の草紙の原本か）の歌でもあらうが、又この海士子物語等とも關係があるのかも知れない。

石川雅望の源注餘滴（卷五四・夢浮橋）に

新釋云、或說に、世の中は夢のわたりの浮橋かうち渡しつゝ物をこそ思へ此の歌は何に出でしや知らねばおきて……（中略）○雅望按に此世の中は」の歌しらゝものがたりに見えたり。結句、ものおもひぬるとあり。

とあるのを見ると、雅望はそのしらゝ物語と云ふものを覽たのであらうか。孫引でないとしたら、（孫引とすれば雅望が何から引いたかを知りたい。書名を記さない所を見れば孫引でないのかも知れない。）又書名に誤りもなく、或は記憶の誤りでもないとしたら、（雅望は可なり確實で粗漏の方ではないが）、それよりも確かに雅望自身の目に觸れたものであつたとしたら、極く近世迄傳存したことになり、恐らく何處かに現存してゐはせまいかと想像する可能性もある。（類字鈔には全然の散佚書として揭げてある。）「雅望按に」では少々心細いが、何處からか一本でも現出する事はないかしらと微かな望が懸けられる。

なほ附けて云ふが、「しゞら」と云ふ男の孝行の物語が別にある。それは御伽草子の「蛤の草子」で、異本「蛤はたおり姫」一名「蛤姫の草子」の方では「ちしう」と云ふ人名になつてゐる。又「秀祐」となつてゐる「秀祐の物語」と云ふのもある。「しじら」も恐らく「ししう」の寫誤から轉化したのではなからうか。內容は廣博文志や、祖庭事苑に見える螺女の傳說、乃至は三國傳記（卷第四、第二六話）の董永の孝行談（花鳥餘情第二にも引く）に關係のあるも